

ミトラ仏と觀貨邏の仏教 2

# ミトラ仏と観貨選の仏教 2

タジキスタン

カラ・イ・カフィルニガン遺跡発掘調査報告

蓮池 利隆

Бобомуллоев, Саидмурод



科学研究費補助金(研究種目名 基盤研究(B))

研究課題名

「タジキスタンにおけるゾロアスター教遺跡の発掘調査及び仏教との交渉についての研究」

(課題番号 21401027)の助成による成果報告

「タジキスタン拝火教遺構の発掘調査及び阿弥陀仏の起源としてのミトラ神についての研究」

(課題番号 25300041)の助成による成果報告

本研究は JSPS 科研費 JP25300041 の助成を受けたものです。



## ミトラ仏と靉貨邏の仏教2

「タジキスタン拝火教遺構の発掘調査及び阿弥陀仏の  
起源としてのミトラ神についての研究」

JSPS科研費JP25300041の助成による成果報告

発行日:2017年2月15日

発行者:蓮池 利隆

印刷社:ちよ古っ都製本工房

非売品

カラ・イ・カフィルニガン遺跡衛星写真（中央に遺跡）



上図中央拡大図



2009 年度 KKF-X 発掘



2009 年度 KKF-X 発掘



2009 年度 KKF-X 発掘



2009 年度 KKF-XI 発掘



2010 年度 KKF-X 部屋 1 (方形拝火拝殿) 北東より撮影



2010 年度 KKF-X 部屋 1 (方形拝火拝殿) 北より撮影



2011 年度調査時の筆者 蓮池 利隆



2011 年度調査時のポボムロエフ館長 Бобомуллоев, Саидмурод



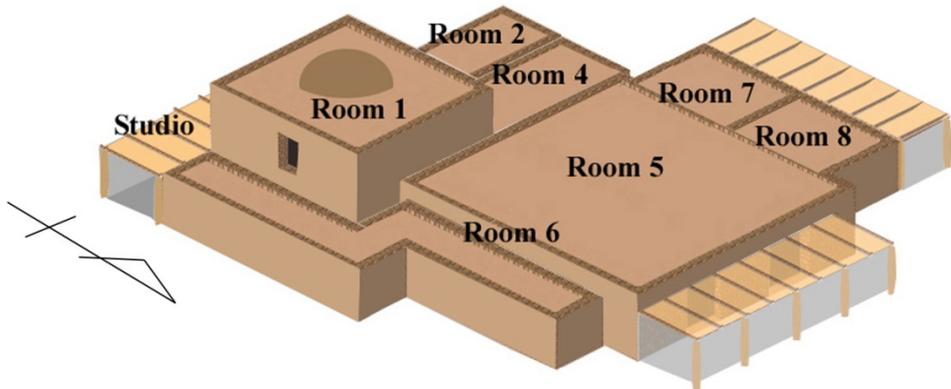
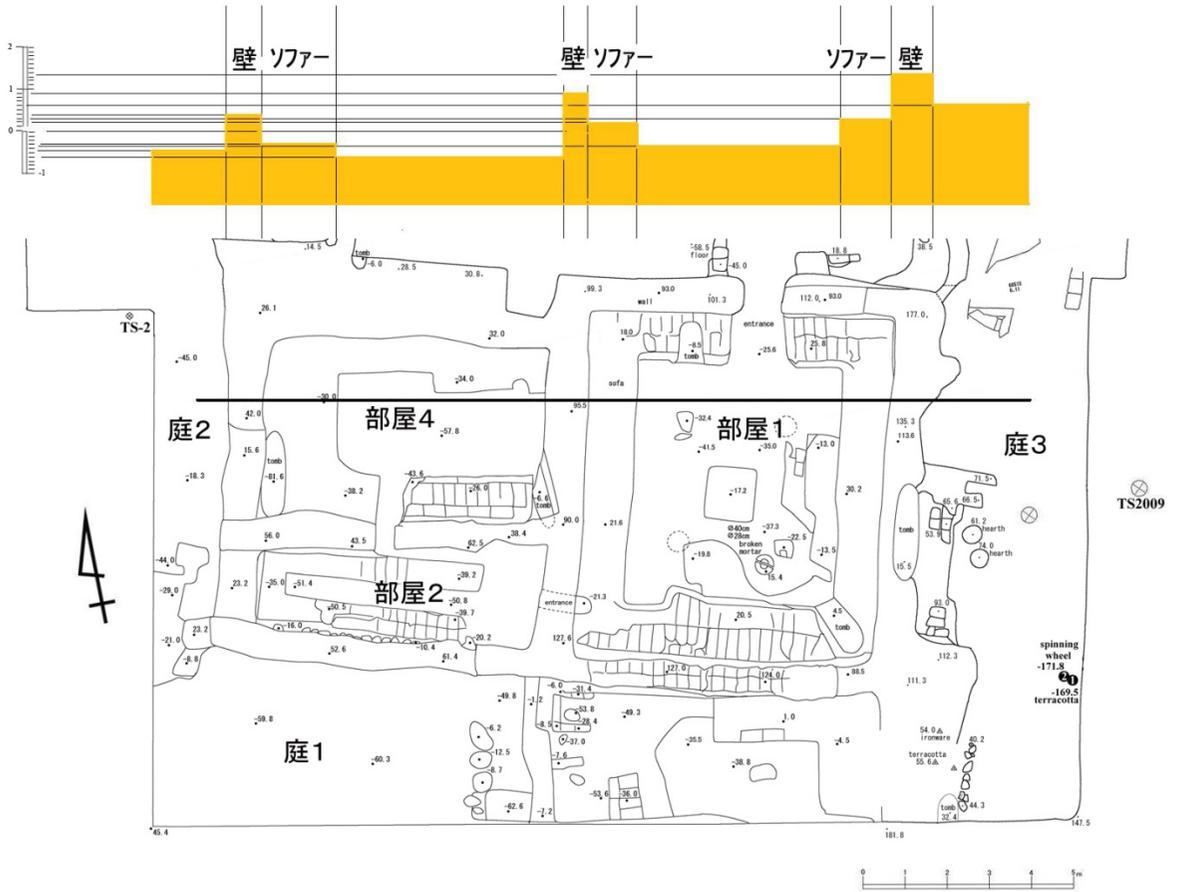
2012 年度 KKF-XII 発掘



2012 年度 KKF-XII 発掘

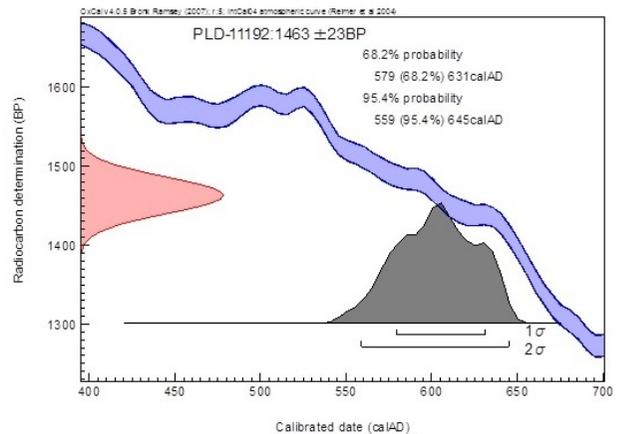
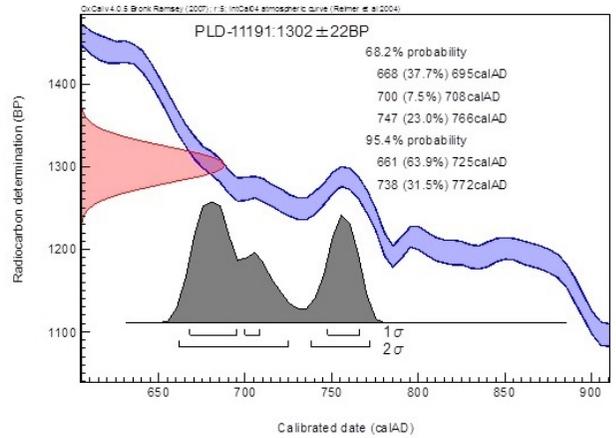
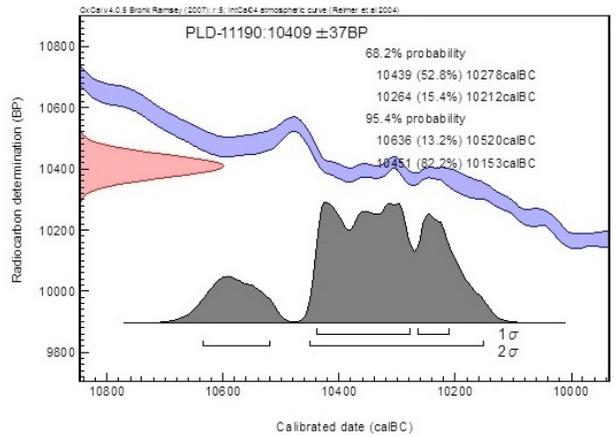


# KKF-X 断面図



KKF-X 遺構想像図

# 放射性炭素年代測定による検査結果



解説については p. 161 から P. 166 を参照

## 2013 年度 KKF-XI 発掘 (1)



1. 5月4日、博物館研究員ルスタン氏が土器を発掘(出土番号6)



2. 5月4日、博物館員マルチエル氏がカメラAを取り上げる。



3. 5月5日、部屋8の北側壁、北西隅より日干し煉瓦を検出する。



4. 5月5日、部屋8の日干し煉瓦構造物とソファー、手前はエサンボイ氏。



5. 5月5日、西側のトレンチ、本来の地表面を検出。レベルは-4.574m



6. 5月6日、左は部屋9、右は部屋8。部屋8の6層の煉瓦壁を検出する。

2013 年度 KKF-XI 発掘 (2)



7. 5月6日、部屋8の壁、日干し煉瓦は高さ10cm、横63cm、隙間は3~5mm。



8. 5月6日、北西隅のカメE、ゴミ溜め(ヤマ7)はこの北側にある。



9. 5月6日、部屋8の壁に白漆喰の層を検出する。



10. 5月6日、カメEと部屋9の壁



11. 5月6日、部屋9と部屋8

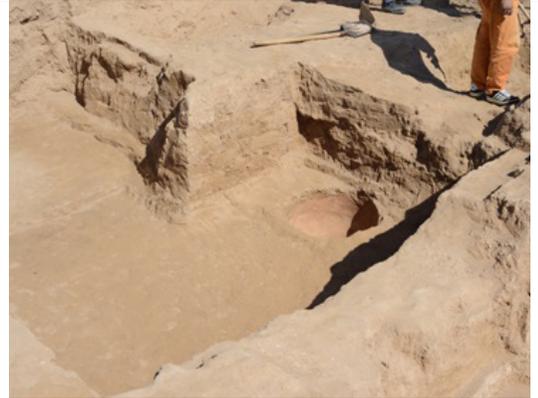


12. 5月6日、部屋8、南東隅より撮影。

2013 年度 KKF-XI 発掘 (3)



13. 5月6日、部屋8、日干し煉瓦による構造物とソファ



14. 5月6日、部屋9、カメ設置の跡および壁



15. 5月6日、部屋8、西域南道ニヤ遺跡ベッド状遺構との類似を示す。



16. 5月6日、部屋8、同左



17. 5月6日、カメD、保存のため取り上げる。



18. 5月6日、2013年度発掘範囲の全景

2013年度 KKF-XI 発掘 (4)



19. 5月6日、2013年度発掘範囲の北東部、カメラは北側に置かれている。



20. 5月6日、廃土を排出する作業員



21. 5月6日、廃土を排出する作業員



22. 5月6日、廃土を排出する作業員



23. 5月6日、廃土を排出する作業員



24. 休憩中

2013 年度 KKF-XI 発掘 (5)



25. 5月9日、博物館員ボボ君、ゴミ溜めから遺物、出土番号36、40



26. 5月11日、エサンボイ氏が掲げる遺物、出土番号56



27. 5月11日、コメ粒がゴミ溜め(ヤマ1)から出土。



28. 5月11日、ヤマ1より多数の粘土塊、2009年出土のものと同種。



29. 5月14日、カートに石を乗せて運ぶ。



30. 5月14日、城壁探査のためKKF-XI西側に幅5mの試掘溝を掘る。

2013 年度 KKF-XI 発掘 (6)



3 1. 5月14日、試掘溝の南側の断面。



3 2. 5月14日、試掘溝北側断面に炭化した草の層が見られた。



3 3. 5月14日、KKF-XI 全景 (南側)



3 4. 5月14日、KKF-XI 全景 (北側)



3 5. 5月14日、コハルニホン川と KKF-XI



3 6. 5月14日、カラ・イ・カフィルニガン遺跡での最後の集合写真

2013 年度 遺物 (1)



1. 5月2日、鏃 (矢じり)、 $z = -1.601$



2. 5月2日、出土番号2 a、テラコッタ、 $z = -2.174$



3. 5月2日、出土番号2 b、紡錘車、 $z = -2.174$



4. 5月2日、出土番号2 c、テラコッタ (菩薩像?) [KΠ 1194-1118]  $z = -2.174$



5. 5月2日、鏃 (矢じり)、 $z = -2.128$



6. 5月4日、紡錘車、 $z = -1.868$

2013 年度 遺物 (2)



7. 5月4日、土器、 $z = -1.886$



8. 5月4日、紡錘車、 $z = -1.802$



9. 5月4日、貴石 (ビーズ)  $z = -2.514$



10. 5月4日、羊骨 (玩具)  
 $z = -1.696$



11. 5月4日、土器 (杯断片)、  
 $z = -2.087$



12. 5月4日、土器・チラク (灯明皿)、  
 $z = -1.598$

2013 年度 遺物 (3)



13. 5月4日、石器、 $z = -2.032$



14. 5月4日、ビーズ (縞模様)、 $z = -2.370$ 、



15. 5月5日、出土番号13a、珊瑚、 $z = -2.352$



16. 5月5日、出土番号13b、ネックレス断片、 $z = -2.352$



17. 5月5日、出土番号14、小青銅鈴、 $z = -1.988$



18. 5月5日、出土番号15、鍬、 $z = -2.490$

2013 年度 遺物 (4)



19. 5月5日、貴石と小青銅鈴、  
 $z = -2.332$



20. 5月5日、紡錘車、  
 $z = -1.877$



21. 5月5日、コイン、  
 $z = -2.632$



22. 5月5日、歯、  
 $z = -2.711$



23. 5月5日、ビーズ2、 $z = -2.592$



24. 5月5日、土器 (杯断片)、 $z = -2.632$

2013 年度 遺物 (5)



25. 5月5日、テラコッタ (羊)、  
 $z = -2.641$



26. 5月6日、土器・灯明皿 (チラク)、  
 $z = -2.025$



27. 5月6日、紡錘車、 $z = -2.071$



28. 5月7日、コイン、 $z = -1.619$



29. 5月7日、鉄 (ナイフ)、 $z = -1.981$



30. 5月7日、紡錘車、 $z = -2.177$

2013 年度 遺物 (6)



3 1. 5月7日、土器 (ポット)、  
z = -2.254



3 2. 出土番号 29、貴石、z = -2.252



3 3. 5月7日、テラコッタとコイン、  
z = -1.906、[KП:1194-1119]



3 4. 5月7日、土器 (漉し器)、  
z = -2.084



3 5. 5月7日、土器断片、  
z = -2.356



3 6. 5月8日、テラコッタ (動物頭部)、  
z = -0.636

2013 年度 遺物 (7)

 <p style="text-align: right;">No. 34</p>	 <p style="text-align: right;">No. 35a</p>
<p>37. 5月8日、土器 (ポット)、 z = -2.426</p>	<p>38. 5月9日、出土番号35a、ビーズ (3)、z = -2.485</p>
 <p style="text-align: right;">No. 35b</p>	 <p style="text-align: right;">No. 36</p>
<p>39. 5月9日、出土番号35b、土器柱 基部、z = -2.486</p>	<p>40. 5月9日、テラコッタ神像、 [KII:1194-1150]、z = -2.466</p>
 <p style="text-align: right;">No. 37&amp;38</p>	 <p style="text-align: right;">No. 39</p>
<p>41. 5月9日、出土番号37・38、紡 錘車他、z = -2.876</p>	<p>42. 5月9日、土器台、z = -1.551</p>

2013 年度 遺物 (8)

 <p>No. 40</p>	 <p>No. 41</p>
<p>43. 5月9日、テラコッタ (動物)、 z = -2.486</p>	<p>44. 5月9日、土器 (ポット)、 z = -2.518</p>
 <p>No. 42</p>	 <p>No. 43</p>
<p>45. 5月9日、テラコッタ断片、 [KΠ 1194-1151]、z = -2.581</p>	<p>46. 5月9日、ビーズ、 z = -2.661</p>
 <p>No. 44</p>	 <p>No. 45</p>
<p>47. 5月9日、土器基部、 z = -2.588</p>	<p>48. 5月9日、テラコッタ (犬頭部)、 z = -1.670</p>

2013 年度 遺物 (9)



49. 5月9日、石器(穴開きの砥石?)、  
 $z = -2.097$



50. 5月9日、紡錘車、 $z = -1.852$



51. 5月11日、土器輪、  
 $z = -1.985$



52. 5月11日、土器基部、 $z = -2.575$



53. 5月11日、テラコッタ断片、 $z = -2.013$



54. 5月11日、鉄(ナイフ)、 $z = -2.473$

2013 年度 遺物 (10)



55. 5月11日、テラコッタ神像（頭部  
欠損）、 $z = -2.162$ 、[KII:1194-1267]



56. 5月11日、土器輪、  
 $z = -2.578$



57. 5月11日、ビーズ、 $z = -2.017$



58. 5月11日、紡錘車、 $z = -1.852$



59. 5月11日、漆喰（柱基部）、  
 $z = -2.686$



60. 5月11日、角ビーズ、  
 $z = -2.858$

2013 年度 遺物 (11)

 <p>No. 58</p>	 <p>No. 59</p>
<p>61. 5月11日、紡錘車、 <math>z = -2.862</math></p>	<p>62. 5月11日、コイン、 <math>z = -3.014</math></p>
 <p>No. 60</p>	 <p>No. 61</p>
<p>63. 5月11日、土器、<math>z = -2.818</math></p>	<p>64. 5月12日、装身具断片、<math>z = -2.938</math></p>
 <p>NO. 62</p>	 <p>NO. 63</p>
<p>65. 5月12日、土器管、<math>z = -2.523</math></p>	<p>66. 5月12日、テラコッタ、 <math>z = -2.474</math>、[КП:1194-1219]</p>

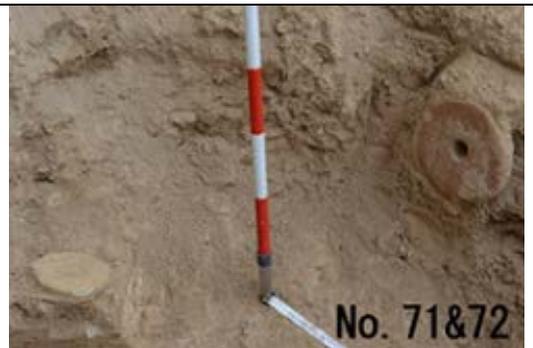
2013 年度 遺物 (12)

 <p style="text-align: right;">NO. 64</p>	 <p style="text-align: right;">NO. 65</p>
<p>67. 5月12日、石器(砥石?)、 <math>z = -0.927</math></p>	<p>68. 5月12日、テラコッタ(馬頭部)、 <math>z = -2.611</math></p>
 <p style="text-align: right;">NO. 66</p>	 <p style="text-align: right;">No. 67</p>
<p>69. 5月12日、テラコッタ(馬胴体)、 <math>z = -2.611</math></p>	<p>70. 5月12日、紡錘車、<math>z = -1.507</math></p>
 <p style="text-align: right;">No. 68</p>	 <p style="text-align: right;">No. 69</p>
<p>71. 5月12日、紡錘車、<math>z = -1.740</math></p>	<p>72. 5月12日、鉄製品、<math>z = -2.956</math></p>

2013 年度 遺物 (13)



73. 5月12日、土器錘、 $z = -2.004$



74. 5月12日、出土番号71・72、土器輪、 $z = -2.540$



75. 5月12日、テラコッタ馬、 $z = -2.112$



76. 5月13日、紡錘車とコイン、 $z = -2.370$



77. 5月13日、土器基部、 $z = -3.481$



78. 5月13日、紡錘車、 $z = -2.525$

2013 年度 遺物 (14)

	
<p>79. 5月13日、青銅碗、 z = -2.926</p>	<p>80. 5月13日、紡錘車、 z = -2.525</p>
	
<p>81. 5月13日、土器製型、z = -2.450、 [KП:1194-1253]</p>	<p>82. 5月13日、テラコッタ断片、 z = -2.784</p>
	
<p>83. 5月14日、金属製品、 z = -1.766</p>	<p>84. 5月14日、青銅碗、 z = -2.694</p>

## 2014年2・3月(1)



1. 2月23日イスタンブール空港。ドシャンベ行きTK254便欠航の掲示。



2. 2月23日、イスタンブール市内、トルコ航空関連のホテルで待機。



3. 2月23日、イスタンブール市内、トルコ航空関連ホテルでの軽食。



4. 2月23日、イスタンブール市内、トルコ航空関連ホテルでの軽食。



5. ホテルの室内。ただし、睡眠をとる時間はなく、すぐに空港へ移動。



6. 2月25日、タジキスタン・カヨン2ホテルで、3Dスキャナの点検。

2014年2・3月(2)



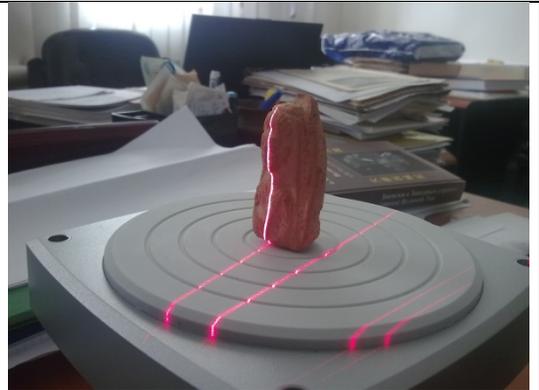
7. 2月25日、博物館事務室を使ってスキャン作業開始。



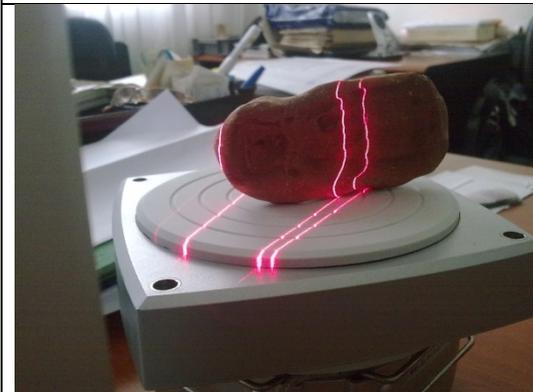
8. 2月25日、スキャン作業。遺物のカラー情報を取得するための照明。



9. 2月25日、3Dデータ取得のためのレーザー光による測定。



10. 2月25日、3Dデータ取得のためのレーザー光による測定。



11. 2月25日、3Dデータ取得のためのレーザー光による測定。



12. 2月26日、カヨン2ホテルの朝食。

2014年2・3月(3)



13. 3月1日、ギッサルのヒサル城址正門前。後ろ姿はガフル氏。



14. 3月1日、ヒサル城址城門の尖塔。



15. 3月1日、ヒサル城址前の広場。正面は博物館、右には神学校。



16. 3月1日、ヒサル城内から北方の山々を望む。



17. 3月1日、ヒサル城址の城壁部分。階段部と上部部屋は復元されている。



18. 3月1日、同左

2014年2・3月(4)



19. 3月1日、ブストン村の石窟遺構入り口部分。



20. 3月1日、ブストン村の石窟遺構、内部より入り口を撮影。



21. 3月1日、ブストン村イスラーム墓地周辺。



22. 3月1日、同左



23. 3月1日、ギッサル市街にあるゾロアスター教関連遺構。



24. 3月1日、ジープとボボムロエフ館長、ガフル氏、マルチェル氏

## 食事 (1)



ポルシチ (ジャガイモやニンジンは大きいまま煮込み、皿に取り分けて食べる)



プロフと野菜サラダ (サラダは多くの日本人にとって水あたりの原因となる)



ピロシキ (タマネギのみじん切りと羊の肉、さらにはジャガイモも入る)



ラグマン (ポルシチで麺を煮込んだもので、僕の苦手なパクチーをのせる)



乳粥 (牛乳で煮た粥にバターをたっぷり混ぜ込む) 主食ナンのスープといった感。



豆煮込みと豆ドーナツ (昔はおやつに作ってもらったものだが・・・) とサラダ

## 食事 (2)



マカロニ（ペンネ・マカロニと同じほどの大きさのもの）とコシヨーの薬味



プロフと野菜サラダ（羊の肉の脂身をカリカリに揚げたものも酒の肴となる）



マントー（大形の餃子のようなもので、水餃子のようにして食べる）



ボルシチ（具を食べ終わったら、ナンをちぎってスープに浸して食べるのも美味）



ピーマンのライス詰め（調理法は次ページ）スープ煮込みである。



スイカ（タルブーズ）の他にメロン（ハルブーズ）もよく食べる。

### 食事 (3)



ピーマンのライス詰め調理



同左、これをスープを煮たてた鍋に入れて  
コメが煮えたら出来上がり。



川魚のから揚げ（ナマズの類が多く、ワカサギに似た魚は上等の部類に入る）



プロフのニンニク添え（ニンニクは塊のまま鍋に入れ、皮をむきつつ食べる）



①プロフの調理（ニンジン、羊の肉をたっぷり  
の油で文字通り煮る）



②コメは水に浸した後、水切りしておく

## 食事 (4)



③野外用のコンロで調理中。



④ボムロエフ館長自らのプロフ作り。



⑤かなりたっぷりの油を使う、充分に油がしみたところで・・・



⑥コメを上に乗せて蓋をして・・・



⑦コメが十分に煮えたところで・・・



⑧全体をかき混ぜてプロフの完成。

## 目次

### はじめに

### 調査篇

2009年度調査報告	p. 1
発掘・遺物写真	p. 15
2010年度調査報告	p. 26
発掘写真	p. 50
遺物写真	p. 57
2011年度調査報告	p. 62
発掘写真	p. 77
遺物写真	p. 89
2012年度調査報告	p. 103
発掘写真	p. 109
遺物写真	p. 111
2013年度調査報告	
5月調査(発掘・遺物写真は口絵参照)	p. 115
3月調査	p. 127

### 考察篇

1. 方形拝火寺院遺構発見の意義	p. 146
2. 仏教方形寺院遺構との関連	p. 153
3. バクトリア語(クシャーン文字)銘文の発見の意義	p. 159
4. 炭素14検査と遺跡年代について	p. 161



## はじめに

本研究は JSPS 科研費 JP25300041 の助成を受けたものである。

タジキスタンの考古学的研究は旧ソヴィエト連邦主導の下で行われてきた。東西冷戦の状況下、その学術的成果が完全に西側諸国に伝わっていたとはいえない。さらには、ソ連邦崩壊後の政治的混乱や内戦によって、海外の研究者が容易に調査を実施できない状況が続いた。200年前後、漸く安定に向かいつつある中、この地域における調査・研究は新たな資料を提供するものとして期待されてきた。しかし、それも束の間、2010年以降のイスラーム過激派、特にアイ・エスの動向は中央アジアにも様々な形で影響を及ぼしている。タジキスタンでも2014年9月に首都市街地で銃撃戦が起こり、本調査でも2015年の調査を自粛せざるをえない状況に至っている。

私たちがタジキスタン調査に着手できたのは、国際文化学部・佐野東生教授の紹介によって、当時の在タジキスタン臨時日本大使、三好功一氏との面識を得たことによる。2003年大谷探検隊100周年シンポジウムの時期中、帰国中の三好氏が大宮学舎を来訪、中央アジアにも仏教遺跡があり、その調査をやってみないかとお誘いを受けた。その話の中、都城遺跡内の方形仏堂の存在が紹介され、私たちはその遺跡調査におおいに興味を抱いたのである。佐野教授には2004年春季に第一回目の調査を企画・実施、タジキスタン側との交渉を進めて頂き、タジキスタン国立博物館館長ボボムロエフ氏に現地発掘の指揮を執ってもらうに至っている。

さらに、調査の進展にともない、国立歴史考古民族博物館収蔵品の調査を実施した。理工学部岡田至弘教授を代表とする龍谷大学古典籍デジタル・アーカイブ研究センターでは、調査で入手した画像資料をもとにデータベースを作成した。その成果発表として、2005年に開催されたEXPO2005「愛・地球博」において、中央アジア館における大涅槃仏レプリカ展示と並行して、タッチパネル形式による展示を実施した。さらに、同年9月からはタジキスタン科学アカデミーからの承認を得てインターネット (<http://www.afc.ryukoku.ac.jp/tj/>) 上で公開している。

### タジキスタン共和国 (Republic of Tajikistan) 基礎データ

(平成28年2月24日現在:外務省資料より)

1. 面積: 14万3,100km<sup>2</sup>(日本の約40%)
2. 人口: 840万人(2014年:国連人口基金)
3. 首都: ドゥシャンベ
4. 民族: タジク系(84.3%)、ウズベク系(12.2%)、キルギス系(0.8%)、ロシア系(0.5%)、その他2.2%(タジキスタン共和国統計庁)
5. 言語: 公用語はタジク語(イランのペルシア語やアフガニスタンのダリー語などとともにイラン語派の西方方言群に属する。現在使用されているタジク語北西方言は、ウズベク語などテュルク諸語との接触により文法や語彙の面で大きな影響を受けている) ロシア語も広く使われている。
6. 宗教: タジク人の中ではイスラーム教スンニー派が最も優勢。パミール地方にはシーア派の一派であるイスマール派の信者も多い。



## 7. 略史:

前 4 世紀 アレクサンドロス大王により制圧

前 250 頃 グレコ・バクトリア王国成立

1—3 世紀 クシャーン朝による支配

6 世紀中頃— テュルク系遊牧民(突厥)の侵入、次第に住民のテュルク化が始まる

7 世紀 ソグド人の活動が最盛期に

8 世紀以降 アラブ勢力の侵入、土着のイラン系住民がイスラーム教を受容。テュルク系諸民族がこれらイラン系住民をタジクと呼ぶようになる

9 世紀後半—10 世紀 イラン系のサーマーン朝成立(文芸・学問の発展)

13 世紀 モンゴル帝国の支配

14 世紀後半—15 世紀 ティムール帝国の支配

16 世紀 シャイバーン朝の支配

18—19 世紀 ブハラ・ハン国、コーカンド・ハン国の支配

1860 年代 現在のタジキスタン北部がロシア帝国に併合

1890 年代 パミール地方の大部分がロシア帝国に併合

1924 中央アジアの民族・共和国境界画定により、ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国内にタジク

自治ソヴィエト社会主義共和国が成立

1929 ウズベク共和国から分離し、タジク・ソヴィエト社会主義共和国に昇格

1990.2 ドウシャンベ事件(アルメニア難民移住への抗議行動を契機とする騒乱事件)

1990.8.23 共和国主権宣言

1991.8.31 国名を「タジキスタン共和国」に変更

1991.9.9 共和国独立宣言

1992.5 タジキスタン内戦状態に

1992.11.19 ラフモノフ最高会議議長就任

1994.11.6 ラフモノフ大統領選出

1997.6.27 タジキスタン内戦の最終和平合意成立

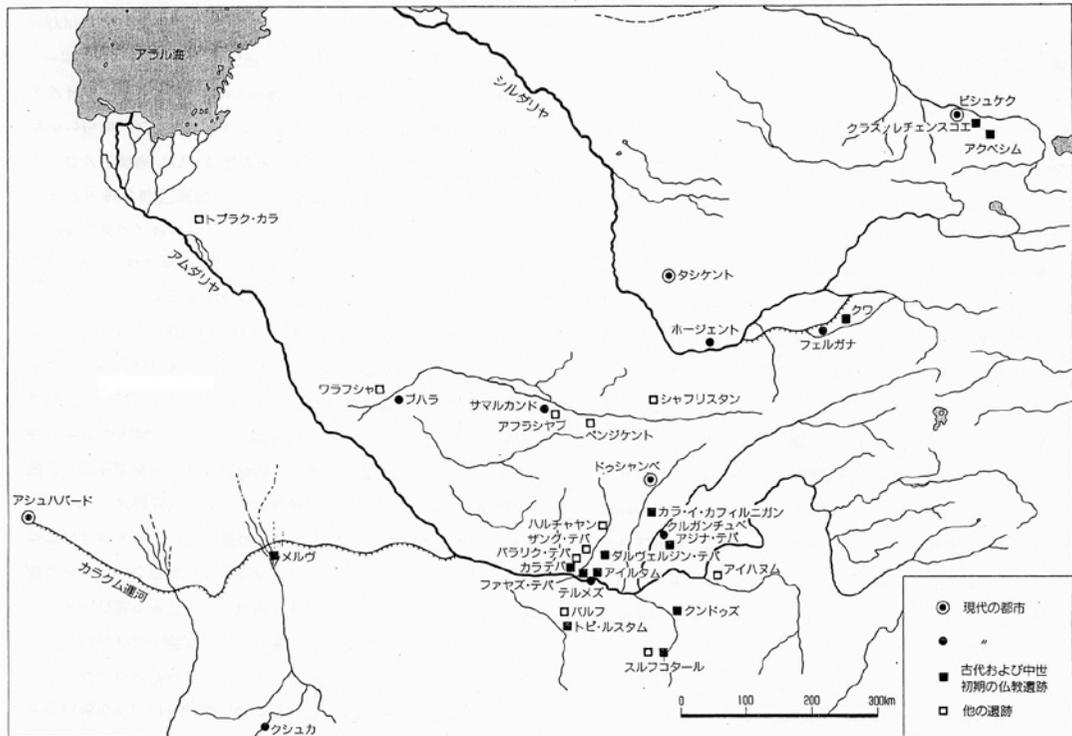
2013.11 エマムアリ・ラフモン大統領再選(2007年に「ラフモノフ」から「ラフモン」に改姓)

タジキスタンは古代、ガンダーラ地域とインド外世界を結ぶ要衝の地であった。アレキサンダー大王によって最北端のアレキサンドリア(現ホージェント)が建設され、紀元前1、2世紀頃はギリシア系の国バクトリアの勢力範囲にあった。その後、紀元後1世紀頃には、クシャーン族が現在のウズベキスタン地域からガンダーラに進入。クシャーン朝のカニシカ王は仏教を保護し、仏像もその頃に初めて作られたと考えられている。

クシャーン朝が滅亡した後、タジキスタン西部を故地とするソグド商人がシルクロード交易で活躍した。クシャーン族と同様、ソグド族もイラン系の民族であり、ゾロアスター教から転じて大乘仏教を擁護したことで知られている。歴史的に、仏教文化がヘレニズム文化、イラン文化と出合った場所が中央アジアであった。そのような諸文化の交流は国立タジキスタン博物館収集品にも表れている。また、イスラーム以後の文物にも独特の文化が反映している。例えば、陶器には動物や、身体は獣で頭部は人(スフィンクスと類似)といった図柄が描かれ、一般的なイスラーム美術には見られない特徴を示している。これは、先行する文化が影響力を維持していたことを示している。中央アジアにおいては、8世紀以降にアラブ人が到来しイスラーム文化が広がっていったが、土着の習俗としてゾロアスター教が底辺で生き続けたものと考えられるのである。そして、かつてこの地で栄えた仏教もそのような構造の中で展開していったのである。今までのこされた民俗学的習俗を調査することは、仏教とゾロアスター教との交渉を理解する上でも不可欠である。

この報告書は調査篇と研究篇からなっており、前半の調査篇は2009年度から2013年度までの調査報告を中心に構成されている。後半の研究篇ではミトラ神と仏教に関係する論文を掲載している。また、方形仏堂の起源についての考察はこの調査において一貫して追求してきた問題である。西域南道に散在する方形仏堂とタジキスタンの方形仏堂さらには方形拝火教拝殿との関連については今後も検討を続けていきたい問題である。

この調査は有縁の方々のご協力によってはじめて実施することができた。ここに、国立博物館館長ボボムロエフ氏を始めとする多くの方々への謝意を表したい。



## 第2次調査概要

中央アジアのタジキスタンで調査を開始したのは、12年前の2004年のことである。2008年までの5年間については、第1次調査報告『ミトラ仏と観貨邏の仏教』と題して、2009年に出版している。この報告書は、その後を受けて2009年度から2013年度までの5年間の調査を『ミトラ仏と観貨邏の仏教2』と題して出版するものである。

2009年度から2012年度までの4年間は第2次発掘調査として、『タジキスタンにおけるゾロアスター教遺跡の発掘調査及び仏教との交渉についての研究』（基盤研究 B:21401027）の題目の科学研究費による調査である。当初は5年間継続の申請であったが、最終年度の計画を取り下げ、引き続き第3次調査『タジキスタン拝火教遺構の発掘調査及び阿弥陀仏の起源としてのミトラ神についての研究』（基盤研究 B:25300041）の題目で申請し、5年間継続の科学研究費助成の採択を受けている。2013年度の1年間はその初年度調査である。

## 第2次タジキスタン調査の日程

2009年8月19日から9月18日まで（第3回発掘調査、KKF-X・KKF-XI）

2010年7月18日から8月10日まで（第4回発掘調査、KKF-X・KKF-XI、地形図作成）

2011年7月17日から8月9日まで（第5回発掘調査、KKF-X・墳墓A・B、地形図作成）

2012年4月30日から5月15日まで（第6回発掘調査、KKF-XI、KKF-XII）

2013年4月28日から5月21日まで(第7回発掘調査、KKF-XI)

2014年2月22日から3月4日まで(3Dスキャナーを使ったテラコッタの計測)

ここに2009年度から2013年度までの報告書を作成したのは、カラ・イ・カフィルニガン遺跡における発掘調査を終了するにあたって、これまでの成果を整理しておきたいと考えたからである。また、タジキスタン国立博物館作成の図録『カラ・イ・カフィルニガン(2007年から2013年の出土文物)』の出版によって遺物番号の照会が可能となったこともその機縁となっている。

## 調査機材

第1次調査からの継続: ニコン自動レベル(一台)、平板測量機材(二式)、5mスタッフ(3本)

第2次発掘調査:

2009年度、トータルステーション(ソキア SET620S-11) デジタル平板測量ソフト(ブルートレンド)、ノートパソコン(パナソニック・タブブック)、プリズムターゲット(2012年度に1追加)

2013年度、3Dスキャナー(ネクスト・エンジンHDプロ)

2014年度、3D-PDFコンバーター4. 0

2015年度、3Dプリンター(SCOOVO9)

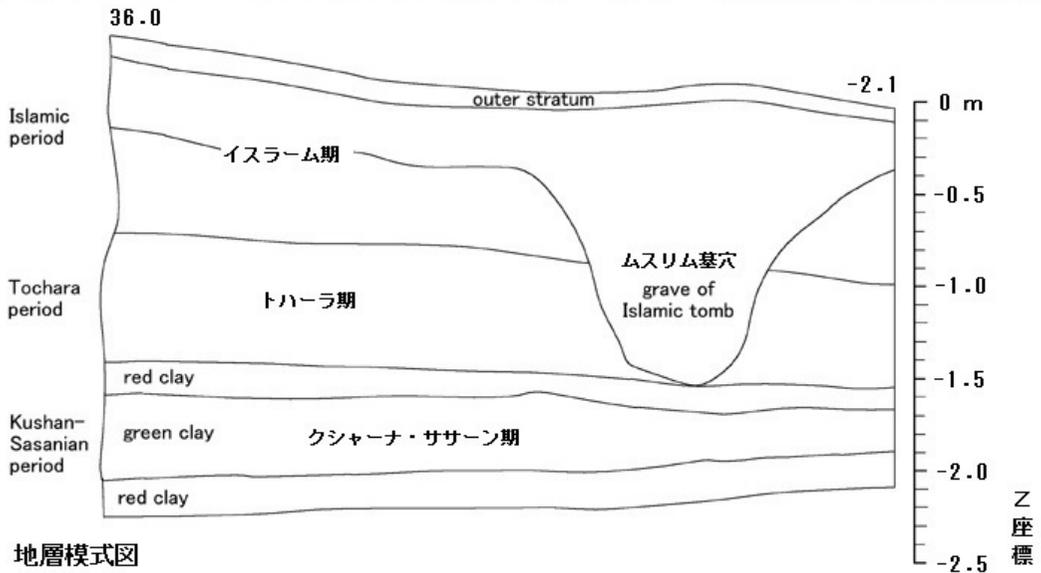
## 地層について

第一次報告でも示したように、表層の0.1~0.15mの厚さは炭化した草が含まれる。これは野焼きなどによるものと考えられる。次層は表層の下、1.0mまでで、イスラーム期のものである。遺跡・廃墟は墓地として利用されることが多いため、度々、ムスリムの墓がみられる。墓は0.3~0.5mの石を数個置いて墓標としている。この層では、前の時代の陶片などの遺物が混入している。これは、墓穴などを掘る際に混入した可能性もあるが、広範にみられることから考えると、大規模な氾濫によって地面がえぐられ堆積したものと推測される。このことは、後述する遺跡の特異な地形からも証明できるように思われる。

イスラーム期の層の下、第二層は7~8世紀ころのトハラ期(トハラ)の層である。この層の底面は地表から1.5~2.0mほどで、その下層であるクシャーナ・ササーン期の層は上から順に、厚さ0.2mの赤い粘土の層、厚さ0.3mの緑色の粘土層、厚さ0.2mの赤色の粘土層が分布している。

次ページに示した地層模式図のスケール及び、報告書の中で出土遺物の記録として挙げるレベル(Z座標)はカラ・イ・カフィルニガン遺跡のほぼ中央に設定した原点をゼロとして測定した値である。使用可能な水準点が近くにないため、便宜的に設定した原点である。

2011年の地形図の完成により、西南の丘のように見えるエリアは、北から南に緩やかに傾斜し、丘状のエリアの北東部分が窪地となっていることから相対的に高く見えることが判明した。これは川の氾濫によって表土が流された結果のように思われる。



地層模式図

2013年のKKF-X遺構の発掘調査で西側のこのことから、カラ・イ・カフィルニガン遺跡のトハラー期の建造物がほぼ同一のレベルで建てられていたと判断できる。KKF-X、-XI、-XIIの遺構においてもそのことが確かめられており、報告書の記録の中、Zで示した数値もおおむね、ここで示した時代区分に該当するものと考えられる。およその目安として、

イスラーム期: 0mから -1.0mまで

トハラー期: -1.0mから -1.5mまで

クシャーナ・ササーン期: -1.5mから -2.0mまで

## 調査篇

現地調査報告  
2009年度から2013年度まで  
タジキスタン  
カラ・イ・カフィルニガン遺跡

## 2009年度発掘調査報告

### 概要

2009年度の調査は新たに採択された『タジキスタンにおけるゾロアスター教遺跡の発掘調査及び仏教との交渉についての研究』を題目とする科学研究費(基盤研究 B:21401027)による初年度調査である。初年度の予算でトータルステーションとデジタル平板測量のソフト、ブルートレンドを購入した。操作方法など実際に測量を実施しながら習得したが、通関の手続きに関わる書類の作成が間に合わず、2010年度調査での使用に回さざるを得なくなる。

トータルステーションはレーザー使用の精密機器であるため、軍事目的に転用されるという理由で、海外に持ち出した際は必ず持ち帰ることが定められている。この持ち出しには書類を提示する必要があるとのことで、次年度では早めの対応をしなければならない。現地における発掘調査は、2008年度に検出した遺構の壁や床に沿って、発掘範囲を拡張しながら進めていった。

### はじめに

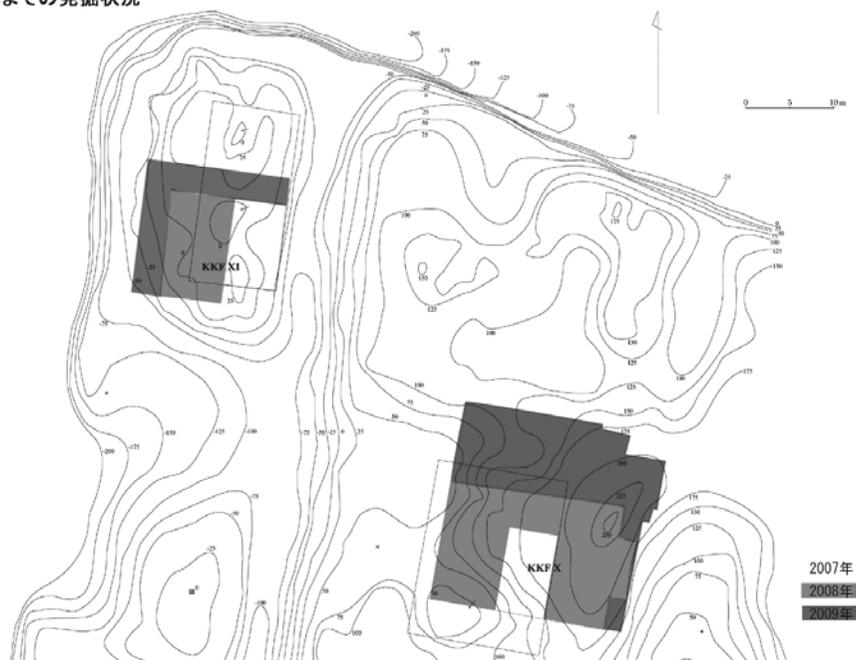
出発の一週間前、痛風の発作がおこり、18日に病院で診察をうける。海外調査を控えていることを相談し、痛み止めの薬などを処方してもらう。心配する妻に付き添われて、昼過ぎに閑空のホテルへ向かう。ホテルに一泊したのは、痛む足を引きずりながらの移動はつらいと考えたからである。空港内のホテルからであれば、備え付けのカートにスーツケースと装備品を載せてカウンターまで運ぶことができる。成田とイスタンブールでの乗り継ぎも左足をかばいながらの移動、汗だくの行程であった。

20日早朝、ドシャンベ空港に到着する。空港を出るとボボムロエフ館長と運転手が出迎えてくれた。この日は丸一日静養に当てた。

21日は博物館で2008年度出土品のリストを受け取り、その後現地入りの準備をする。翌、8月22日に現地に入る。

日曜	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜(休)	土曜
	8/17 13日 より痛風発作 福岡→京都	8/18 病院で診察 閑空ホテル	8/19 閑空発 成田経由	8/20 イスタンブール→ ドシャンベ	8/21 博物館	8/22 現地到着 午後下見
8/23 発掘作業 地形測量	8/24 発掘作業 遺構測量	8/25 発掘作業 遺構測量	8/26 発掘作業 遺構測量	8/27 発掘作業 遺構測量	8/28 データ整理	8/29 発掘作業
8/30 発掘作業	8/31 発掘作業 遺構測量	9/1 発掘作業	9/2 発掘作業	9/3 発掘作業	9/4 データ整理	9/5 発掘作業
9/6 発掘作業 部屋5	9/7 発掘作業 部屋5	9/8 発掘作業 部屋5	9/9 発掘作業 部屋5	9/10 発掘作業 部屋5	9/11 データ整理	9/12 発掘作業 遺構測量
9/13 発掘作業 遺構測量	9/14 発掘作業 遺構測量	9/15 発掘作業 遺構測量	9/16 ドシャンベ着 大使館訪問	9/17 ドシャンベ→ イスタンブール	9/18 成田着 →京都	

### これまでの発掘状況



薄墨の薄い方が2008年度、濃い方が2009年度の発掘範囲

宿舎は2008年まで借りていた変電所内の小屋からエサンボイ村の幹線道路を挟んで筋向いの旧野外映写施設に移転している。昨年までは国境警備軍の宿舎だった場所である。南隣には道を挟んで小学校があり、その道の西奥には毎金曜日に市が立つ広場がある。

宿舎は特殊な構造で、映写機を置く小屋には四角いガラス窓があり、そこから映写していたようである。その向かい側に広場があり、その端にスクリーンが張られたようである。具体的には、写真・宿舎：図1から図6までを参照のこと。宿舎は二階建てで、一階は台所兼寝室、二階は作業室、機材・遺物置場兼寝室である。

KKF-X(カライ・カフィルニガン遺跡第10号現場)では2008年度発掘範囲から東へ3m と北へ3m 拡張(KKF-X 発掘：図1)して掘り下げる。

KKF-XI(カライ・カフィルニガン遺跡第11号現場)では西側へ3m 拡張して(KKF-XI 発掘：図19、図20)発掘を開始する。昨年度の範囲で北西隅から東へ2.6m、南へ60cm、クシャーン期の床面よりさらに深い場所(地表から2m 前後の層)からコインが出土する。(遺物：図5)表に肖像、裏に動物が刻まれており、バクトリア・コインのように思われる。

自動レベルは脚と本体が別々のものが搬入されており、レベル測量がすぐにできない状態である。明日、ヤヒヨ研究員がドシャンベから合流する際に持参するとのことであった。

## I. 作業記録

8月23日、KKF-XI では北側に石組みが検出されている。イスラム期の墓石である。写真撮影(KKF-XI 発掘: 図 21)。南側では南東隅から北へ1.25m、西へ0.4m からカメ(高さ55cm、カメの口の外径34cm、内径29cm)が出土し、取り上げる。移送中に崩壊し、口の部分を含めた上部三分之一が残った状態となる。後に、接着剤で復元される。

KKF-X では北東隅から南へ1.0m、西へ2.0m、地表から1.3m の位置で陶器製管が出土(KKF-X 発掘: 図 2)する。

8月24日、レベルを設置して作図の準備をする。KKF-XI では鉄製鏃と四角錐形の錘(遺物: 図 16)が出土、ファルホト研究員が発見した。KKF-X では昨年出土の炉 C の横から鉄片(KKF-X 発掘: 図 3)が出土し、写真を撮る。

8月25日、強い南風が吹く。「アフガンの風」と呼ぶそうで、夏の終わりに砂を巻き上げながら吹いてくる。季節の変わり目の風だということである。気温も下がり、早朝の作業では肌寒さを感じる程である。

KKF-XI では西側3m 拡張部分にあった石組みの墓石を取り上げ、さらに深く掘る。中央部分でも掘り下げ作業を行っている。KKF-X では部屋6、北東部分の壁の下からソファー状段とみられる日干し煉瓦が出土する。また同所から羊骨の玩具14個(KKF-X 発掘: 図 6)が出土する。煉瓦と壁の間から水差しの頭部破片(KKF-X 発掘: 図 4)が出土、周囲の煉瓦上面から10cm 下にあたる。部屋6中央から炭化した柱片(KKF-X 発掘: 図 5)が出土する。

8月26日、KKF-XI ではかなり深くまで掘り下げており、クシャーン期以前の層まで進んでいるようである。KKF-XI 部屋2北端でネックレス玉(おそらく瑪瑙)が出土、緑土層の下の赤土層から出土している。2008年度出土の一对のピラミッド状礎石はすでに昨年段階で取り上げられている。そのさらに下、バクトリア期の層まで発掘するのが目的のようである。昨年出土の石組みはアイワーン(ペランダ)式の遺構であったが、それらも全て取り上げるようである。KKF-X では部屋6のトハール期の層から炭化した柱を取り上げる。

8月27日、KKF-XI からギリシア文字(バクトリア語)の銘文がある壺片(遺物: 図 4)が出土する。ファルホト研究員が KKF-XI 部屋2で検出する。同室の南端からペンダント(遺物: 図 8、表: 男神像と裏: 山羊、遺物)が出土する。

ο-η-σ-σ-ο-τ-ο-β-ο  
α-τ-υ-ρ-α-λ-α-β-ο

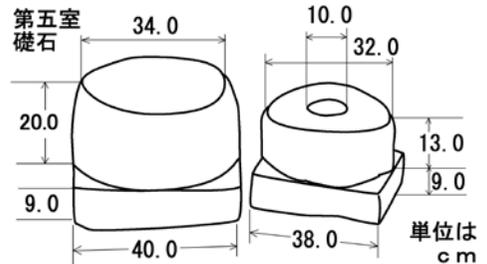
8月28日、金曜礼拝とバザールの日で作業休止である。宿舍の庭を使って自動レベルの杭打ち検査を行う。ヤヒヨ、ファルホト両研究員に検査をやってもらい、レベルの扱いについても説明す

る。平板測量やレベル測量の基本的な使い方を習得してもらうのもこの共同調査の意義ではないかと思う。

8月29日、KKF-X、部屋6東側から土器製スタンプ(遺物:図 15)が出土する。スタンプ刻印面は2.5cm×2.5cm、長さ9.0cmである。部屋5の礎石二基(KKF-X 発掘:図 10、遺物:図 1)が出土する。

38cm×38cm、高さ9cm の方形の上に直径32cm、高さ13cm の円筒が乗った形をしており、内径10cm の柱受けが空けられている。

もう一基はひとまわり大きく、40cm×40cm、高さ9cm の方形の上に上面の直径34cm、下部の直径40cm、高さ20cm の円筒が乗る。こちらには穴が空けられていない。



8月30日、トラックターで発掘によって出た土を移動する。途中でエンストし、再開するのにだいぶ手間取る。KKF-XI の部屋番号を決める。

昨年の発掘範囲の東側、中心に炉がある部屋を部屋1、西側の北部分を部屋2、南部分を部屋4、さらに今年度発掘部分の北側を部屋3とする。時代的に部屋1と3はトハラ期(Tocharian)の床面であるが、部屋2と4はさらに深く、バクトリア期(Bactrian)の床面を探しているとのことである。

8月31日、KKF-X では北側へ5m 拡張することになる。拡張部分の発掘に作業員を回した結果、それまでの発掘部分は作業中断である。床面が出ないままの状態、平面図を描くこともできない。昼食後、ボボムロエフ館長が現時点での遺物写真が欲しいという。館長はドイツ出張のため、しばらく現場を離れるとのこと、また明後日にでもドシャンベに戻る予定だとのこと、遺物写真を持ち帰りたいとの意向である。

午後の作業では KKF-XI の作業状況を確認する。すでに部屋3は日干し煉瓦の壁も取り払い、地表から2m 程の平面となっている。KKF-XI での方針はバクトリア期の遺物発掘に集中しているようである。夕食時、この地域の区長コディルヴ・フジャンクル氏が来訪、テラコッタ像(遺物:図 11)を手渡している。館長はそれが珍しい像であることを認め、おそらくヘラクレス像でありそれはインドのインドラに相当するのではとの意見であった。

9月1日、現場に向かう途中、昨夜来訪した区長コディルヴ・フジャンクル氏の自宅に立ち寄る。地表採取のテラコッタ出土場所を確認する。裏山が崩落した際に出土していたということで、周辺を調査する。テラコッタは邪神のような面影で、この地域の民間信仰の特徴をよく示している。

KKF-X では部屋6から6個の壺が出土する。(KKF-X 発掘:図 11)全部の配置を図化し、午後

はその中の2個①壺と②壺の取り上げ作業をおこなう。その様子をビデオで撮影した。

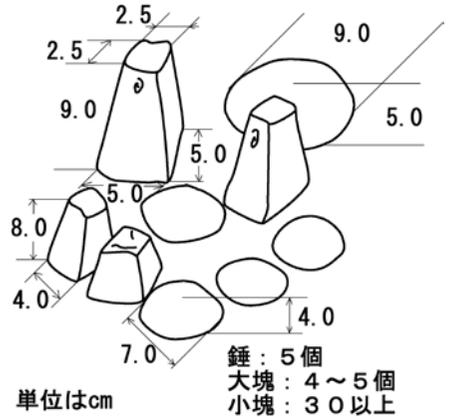
ビデオの充電器が不安定な電圧のため壊れてしまっているため、現在充電できている2個のバッテリーがなくなれば、それで終わりである。節約しながら慎重に撮影する。夕食後、ポポム口エフ館長に写真データを手渡す。

この日の深夜、館長はドシャンベへ移動した。

9月2日、KKF-Xの部屋6では昨日の6個の壺に加えてさらに2個の壺が出土する。このため、さらに部分的に北へ3m 拡張して発掘作業を行う。KKF-XIでは第四室中央の炉周辺で粘土塊と焼く前の成形された錘が出土する。大小の錘が5個、大きい粘土塊が5、6個、小さい粘土塊が30個以上あった。

(遺物: 図 3) (KKF-XI 発掘: 図 26、図 27)

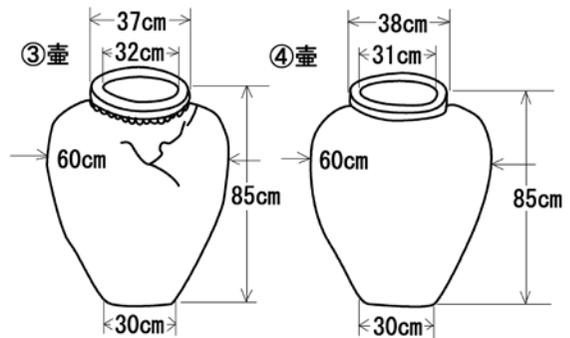
昨年の発掘時にもほぼ同じ場所から焼成後の錘が数個出土していた。城塞内で多数の錘が作成されて、周辺地域の商取引に使用されたものと考えられる。焼成時の重さが基準の値になるようにするために、一定の技術が必要であったと考えられる。KKF-XIでは部屋5西側でメノウのネックレス玉が出土する。長さ2cm、幅1cmで、縦に穴が開けられている。



9月3日、KKF-Xでは部屋6の壺③④の取り上げ作業。午前10時頃、アメリカ人2名が運転手を伴って見学にやってくる。

③壺からは金属製容器(KKF-X 発掘: 図 12)が見つかる。内容物を掬うためのものだったと見られる。KKF-XIでは昨年出土した石組遺構もすべて取り払われ、平らな底面が広がっている。

(KKF-XI 発掘: 図 24)

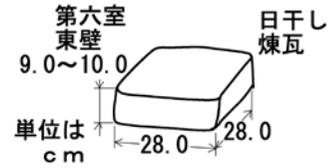


9月4日、休日、隣接するバザールで日用品を買い求める。バザールは午前中でほとんどが終了し、昼過ぎには撤収が始まる。

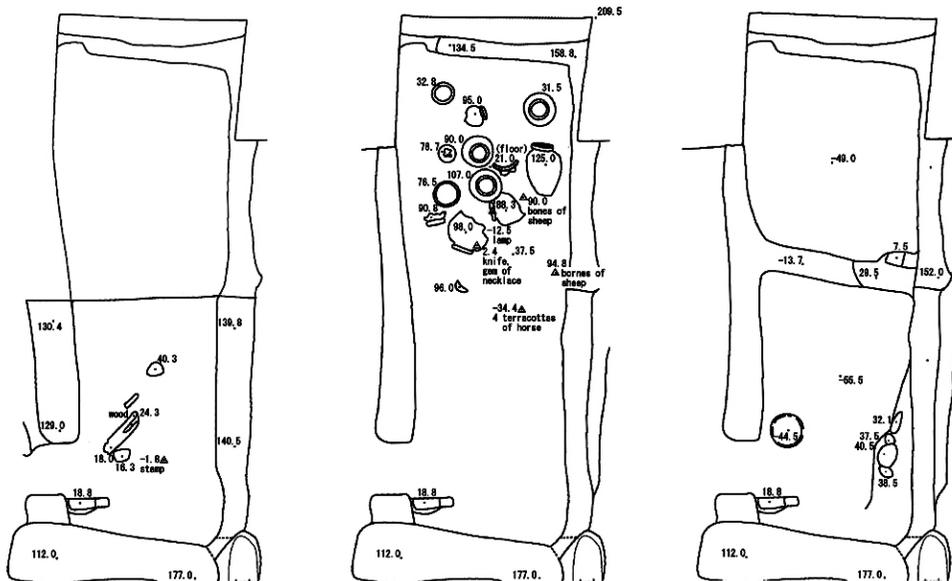
早朝から若い男女が集まり、交際相手を探す場所でもあるという。そう言えばみんな一張羅を着て楽しげである。蓮池は数日前から腹痛で弱り、一日を休養に当てることにする。タジク腹(この地特有の食あたり)で下痢が続く。

9月5日、KKF-X 部屋6の壺群の取り上げが終わり、その下まで掘り下げるとのことである。壺があった床面には日干し煉瓦が敷き詰められていたが、それを取り除き、さらに発掘を続ける意向のようである。

部屋6は少なくとも二期にわたって使用されているようで、古い層の床面を検出することになる。取り上げる日干し煉瓦の中で、欠けていないものがあったのを実測する。



日干し煉瓦のすぐ下、壺があった位置から鉄製ナイフ(KKF-X 発掘:図 13)とネックレス玉が出土する。



発掘の進展にともなう部屋6(部屋9)の平面図

KKF-XI では部屋2の中央部分をさらに深く掘り下げている。(KKF-XI 発掘:図 29) 部屋2床面から50cm 程下に石組が出てくる。遺構なのかどうかはまだ判断できない。(KKF-XI 発掘:図 30)

9月6日、KKF-XI 部屋2の石組みの図化をおこなう。スタッフ5mを全て伸ばしてやっと測定できるほどの深さである。石組周辺からの遺物は出土していない。人為的遺構でない可能性もあるだろう。KKF-XI の発掘はここまでで、しばらく中断することになる。KKF-X 部屋5では床面検出作業が難航している。複数世代にわたって使用されたため、床面も数層になっているようである。部屋5東側、部屋6付近で容器蓋が出土する。

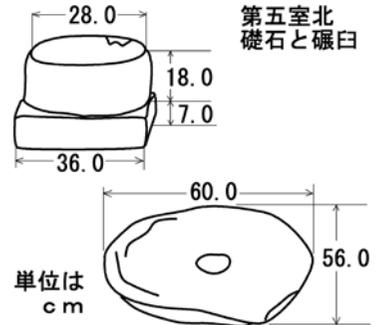
9月7日、KKF-X 部屋6の床面検出作業を続行する。遺物の取り上げはまだまだ問題が多く、作

業員が無造作に取り上げて、後で研究員に手渡すことも多い。出土位置の確認が十分にできない状態である。部屋5の中央から病人用とみられる吸い飲み(KKF-X 発掘: 図 14)が出土する。高さ7cm、開口部直径5cm、胴部直径9cm の土器である。

9月8日、日の出以前はかなり寒い。平板に張り付けた作図用紙が湿気を含んでぼこぼこになるので、日が少し高くなって気温が安定してから据えることにする。

廃土移動のために手配していたトラックターがなかなかやってくない。賃金問題で渋っているようである。

午後4時半頃にトラックターが到着し、廃土移動を開始する。KKF-X 部屋5では先に出土した礎石 2 個の他にさらに西側から礎石 1 個と礮臼 1 個が出土する。



9月9日、午前中、蓮池も KKF-X の埋め戻し作業を手伝う。発掘作業は遺跡破壊の危険もあるので極力参加せず、もっぱら作図や写真撮影を担当している。しかし、埋め戻し作業であればそのような危険も比較的少ないと思われる。

スコップで土砂をすくい、記録し終わった遺構に戻していく。KKF-X では北側にさらに3m 拡張して発掘作業を続けている。その間、遺跡の南西部のチタデル(宮殿域)とされる一帯のレベル測定調査を行う。遺跡全体が南にかけて傾斜しており、北部分が若干高くなっている。

そのため、南西部一帯が丘のように見えるものの、レベル上はそれ程高低の差がないことが分かる。基準点 0m に対し、南西部北端の頂点が 86cm であり、KKF-X や KKF-XI とあまりかわらないレベルである。タジク側の研究者は来年度の調査で南西部における発掘を計画しているようであり、基準点との位置関係を測定した第二基準点を置かなければならない。

今年度は持ち込まなかったが、トータルステーションを使った作図が必要となるだろう。

9月10日、KKF-XI では中断していた作業を再開する。発掘範囲を北側に3m 拡張する。第一測点からの作図は無理となったため、北側に測点を移動する。KKF-X 部屋5の北側の発掘作業が進む。部屋5西側壁付近の礎石横から小壺(KKF-X 発掘: 図 15、遺物: 図 22)、さらに台付き燈明皿(KKF-X 発掘: 図 16、遺物: 19)が出土する。部屋7では小石を敷き詰めた一画があり水はけを考慮した構造のようである。その周囲には日干し煉瓦が敷き詰められた場所もあり、浴室あるいは宗教的沐浴(禊)を行った可能性もあるとのことである。この施設から第8室の下を、北側壁の外へと排水する暗渠が設けられていたようである。

9月11日、金曜日で作業は休止。遺跡の図化作業で描いていない箇所がないかを確認する。帰りの航空券のリコンファームもこの日に手続きするつもりであったが電話が通じず、断念する。

9月12日、KKF-X 部屋5の北側拡張部分で埋設貯蔵壺が5個発見される。その中の4個は直径30cm前後の壺の口が地表に東西一列に出ている。口と口の間隔は20cmから30cmである。さらにもう1個は東側に離れて出土し、蓋も付いた小ぶりの壺である。高さ65cm、外径50cm、開口部外径20cm、内径15cm、蓋の外径15cm、取っ手の径7cmである。

さらに北に発掘範囲を拡張するべきかを尋ねられたので、今年度はここまでに止めるのが適当だろうと答えておく。

午後に小ぶりの壺を取り上げる作業が行われる。4個の壺は一旦土を被せて、明日以後の取り上げ作業となる。

9月13日、KKF-X では4個の壺の取り上げ作業が行われた。部屋7の北側部屋8の図化作業を行う。礎石が多数出土し、北からA区画、B区画、C区画と階段状に低くなる。石の位置とレベルを一つ一つ図化していくためかなりの時間を要する。蓮池はポール持ち、ヤヒヨ研究員が図化作業を担当する。

A区画とB区画では20cmから30cmほどA区画の方が高く、B区画とC区画では80cmから90cmほどB区画の方が高い。(右下図参照)

礎石のレベルが相違するのは時代的差によるものなのかは次年度の発掘によって明らかになるものと考えられる。

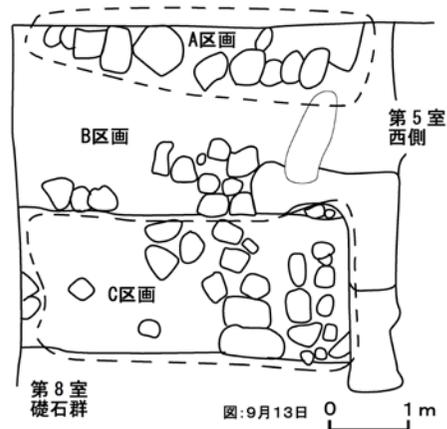
9月14日、蓮池の現場での作業は本日で終了する。後の作図はタジキスタン側に任せ、追加部分としてEメール添付で送ってもらうことになる。

KKF-XIの発掘作業とKKF-Xの埋め戻し作業を行う。

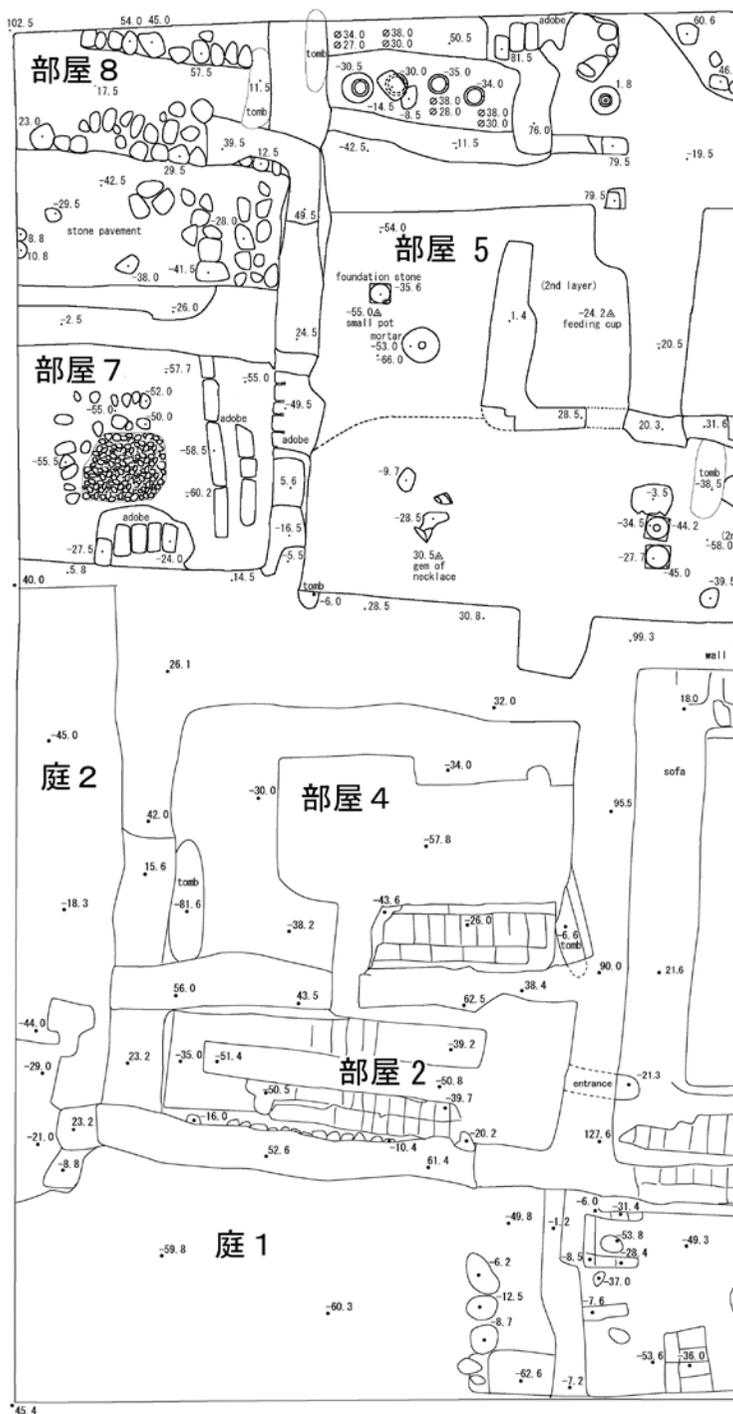
KKF-XIでは注ぎ口付き水差し、高さ10cm、基部外径9cmが出土する。

9月15日、平面図の整理、出土遺物追加撮影で一日宿舎に留まる。

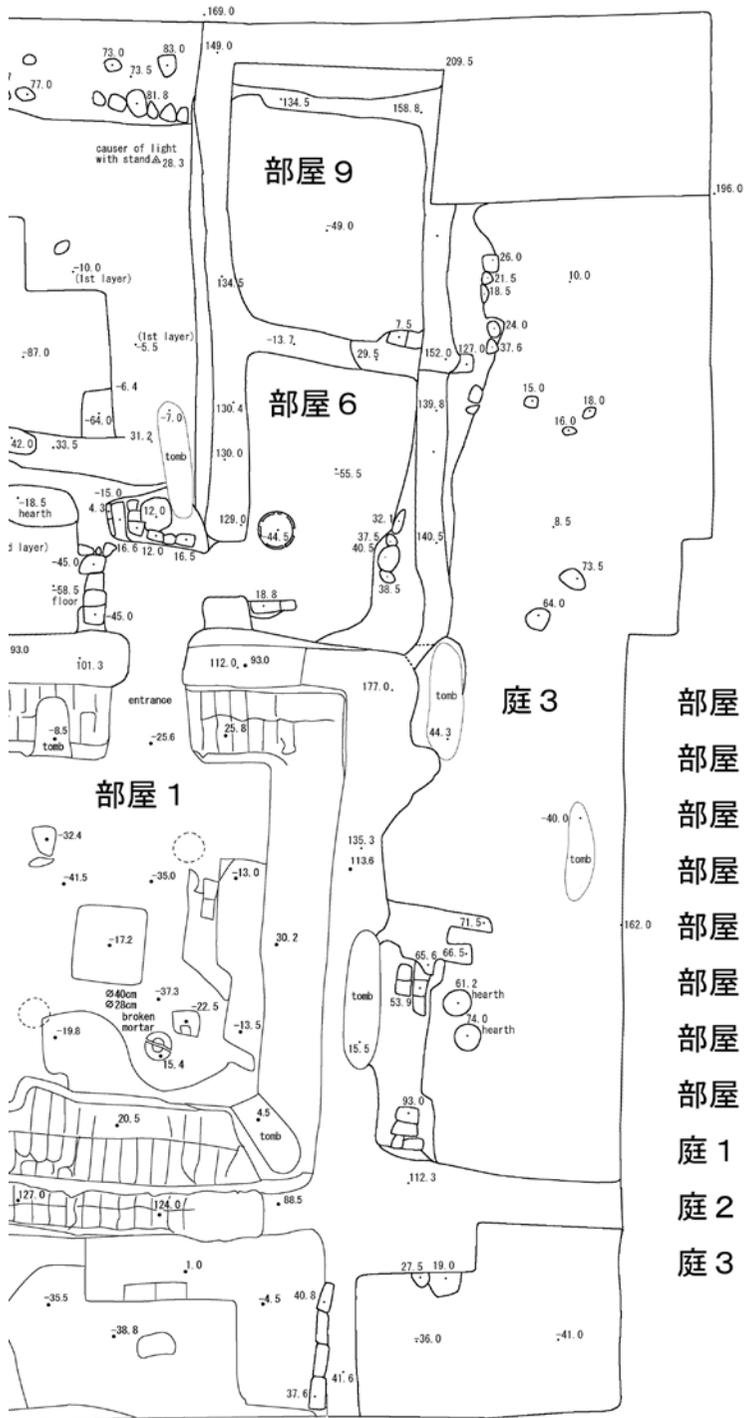
午前にはボボムロエフ館長が現場に帰ってくる。来年の日程について相談し、七月後半から八月初旬にかけて発掘調査をすることで合意する。昨年と今年の日程では酷暑の中での作業となり、体力的にも消耗が激しいとの理由である。蓮池も来年度の授業計画段階で早めに前期を終えるようにすることで対応したい旨伝える。今年度平面図の部屋番号などについて打ち合わせを行い、一ヶ月内に図化した資料を送付することになる。



KKF-X平面図  
(2009年)



方形拝火寺院と周辺複合施設 (2009年)



- 部屋 1 : 拝火拝殿
- 部屋 2 : 居住室
- 部屋 4 : 居住室
- 部屋 5 : 厨房
- 部屋 6 : 倉庫
- 部屋 7 : 沐浴室
- 部屋 8 : 不明
- 部屋 9 : 倉庫
- 庭 1 : 工房
- 庭 2 : 不明
- 庭 3 : 不明





角線上の南西隅で多くの木炭が出土していた。これらは4本の柱あるいは礎盤が焼けたものと考えられる。部屋の中央には正方形の壇の跡が認められた。この建築様式はペンジセントで確認されているチャルタク（方形拝殿）と一致する。南西隅に部屋2への出入口、北中央に大きい出入口がある。

## 部屋2

部屋1とは南北の壁によって仕切られ、その中央に部屋1への出入口が設けられている。北壁中央には部屋4への出入口がある。部屋の北側、南側、西側にソファーがあり、レンガは40×26cmのものである。南側のソファー部は一段と二段の部分があり、おそらくは二段の一部が破損したものと考えられる。ソファーと床面の段差は約50cmである。

## 部屋4

部屋2の北隣部分。部屋の北側の壁は部屋1の北壁につながる。ソファーと床面の段差は約30cmである。南側壁に部屋2へ続く出入口がある。

## 庭3

部屋1の東隣部分。数点の重要な遺物が検出されている。中央部分に聖火炉CとC'がある。C'は古い炉であり、それに重なるようにして炉Cが作られている。これはこの施設において古い炉から新しい炉へと継続的に使われていたことを示している。

この聖火炉付近からミフル神像の断片やマジマル（小型拝火壇）が出土している。また、聖火炉から1～2m東には一対の拝火壇礎石が検出されている。この様式の礎石はKKF-XIでも検出されている。これらの遺物はすべてゾロアスター教との関連を証明するものである。

## 部屋5

部屋4と部屋1の北側に位置し、厨房として使用されたと考えられる。途中の時期に改装がおこなわれたと見られ、新旧二つの床面が確認されている。部屋の南東隅には土が変色した炉跡がある。部屋の南からは礎石2個が出土していたが、西側からも礎石1個と礪臼1個が出土している。北壁の南側に4個のツボが一行に埋設され、東側に離れて蓋つきの1個のツボが置かれていた。

## 部屋6(部屋9)

壺群の取り上げが終わり、その下まで掘り下げる。壺があった床面には日干し煉瓦が敷き詰められていたが、それを取り除き、さらに発掘を続ける。部屋6は少なくとも二期にわたって使用されているようで、古い層の床面を検出することになる。

日干し煉瓦のすぐ下、壺があった位置から鉄製ナイフ(KKF-X 発掘:図 13)とネックレス玉が出土する。0.8mほど下にある古い層では中ほどに壁があり、南側を部屋6、北側を部屋9として記録した。

### 部屋8

部屋の中央 1.5m 四方の広さに玉砂利が敷き詰められ、水はけを考慮した構造であることがわかる。沐浴のための部屋であり、ここで宗教的儀式にともなう禊が行われたと推測できる。排水のための暗渠が部屋9の下を通っているようで、北側の壁の下に排水口を確認できる。

## Ⅲ. 遺物

### テラコッタ

神像[KII:1194-781]、人物(首欠損)[KII:1194-844]、山羊[KII:1194-852]、  
山羊[KII:1194-858]、邪神像？[KII:1194-879]、象[KII:1194-2009]、

### 土器

吸い飲み[KII:1194-037]、小壺[KII:1194-782]、銘文入断片[KII:1194-797]、  
土器製錘[KII:1194-802]、小壺[KII:1194-820]、小壺[KII:1194-821]、  
土器片[KII:1194-822]、土器片[KII:1194-826]、燈明皿(チラク)[KII:1194-843]、  
印章[KII:1194-845]、燈明皿(チラク)[KII:1194-873]、燈明皿(チラク)[KII:1194-926]、  
燈明台[KII:1194-983]、燈明皿(チラク)[KII:1194-1018]、  
大型カメ(複数個)、

### 石器

石製遊戯用駒[KII:1194-828]、紡錘車[KII:1194-859、860、861]、礎石3基、摺り臼1基、

### 鉄製品

鋏、ナイフ、

### その他

メノウ玉[KII:1194-895]、ペンダント

## 2009 年度 宿舎



1. 西側から見た宿舎（アルミ製缶に入った水は川から汲んで運んでくる）



2. 広場の北側から（手前の簡易ベッドは暑い夏の夜の寝床となる）



3. 小屋の側壁中央の窓が映写機用のものである。（ガラスがはめられている。）



4. 二階への階段（蓮池は二階の部屋に居た）



5. 調理用コンロ



6. 旧ソ時代の夏季映写場の時には観客席となった広場（手前のイスは食事用）

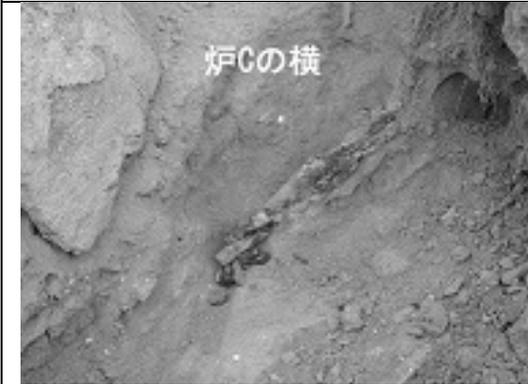
2009年度 KKF-X 発掘 (1)



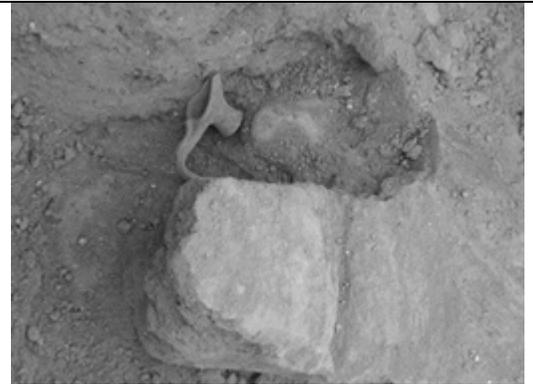
1. 2008年度より東へ3m発掘範囲を拡大。右端、ボボムロエフ博物館長。



2. 8月23日、陶器製管出土。ボボ・ボボムロエフ研究員（館長の息子）



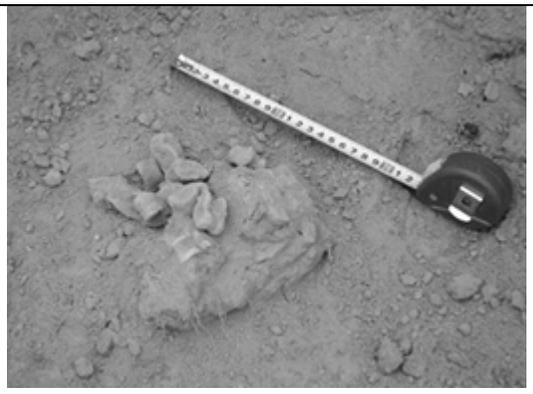
3. 8月24日、炉Cの横から鉄製品出土。



4. 8月25日、水差し頭部断片出土。手前は日干し煉瓦の壁。



5. 8月25日、第6室南側（トカラ期の層から炭化した柱が出土。



6. 8月25日、部屋6北東、羊の骨を使った玩具。14個がかたまって出土。

2009 年度 KKF-X 発掘 (2)



7. 8月26日、第6室と第5室の間の壁。第6室では炭化した柱の検出中。



8. 第6室東壁下から六個の石製玩具が出土。遺物写真30も参照。



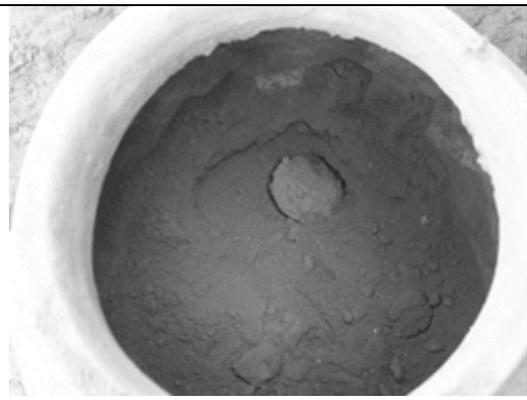
9. 8月29日、第6室東側、刻印面、2.5cm×2.5cm、全長9.0cm。遺物15参照。



10. 8月29日、第5室南側の礎石二基。遺物1も参照。



11. 9月1日、第6室貯蔵用壺、多数出土。遺物写真2も参照。



12. 9月3日、壺の一つには金属製容器が残されていた。

2009年度 KKF-X 発掘 (3)



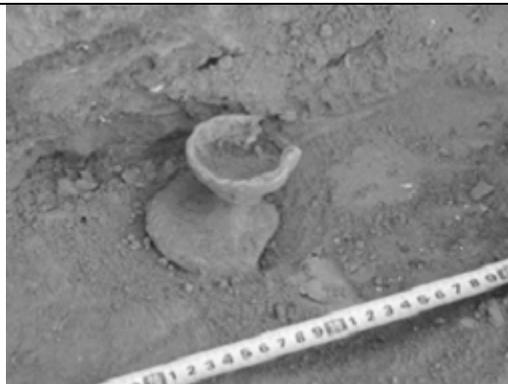
13. 9月5日、小刀、第6室壺の下層(第7室)から。日干し煉瓦の下より。



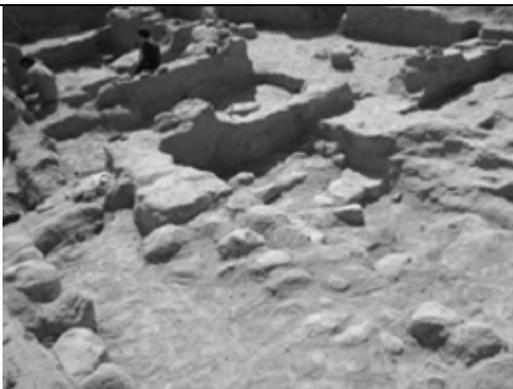
14. 9月7日、第5室中央。吸い飲み、高さ7cm、開口部直径5cm、胴部直径9cm。



15. 9月9日、第5室西側壁付近の礎石横から小壺出土。遺物写真22参照。



16. 9月10日、台付き燈明皿、遺物写真19参照。



17. 9月13日、KKF-X第9室北西端から南東方向を撮影。

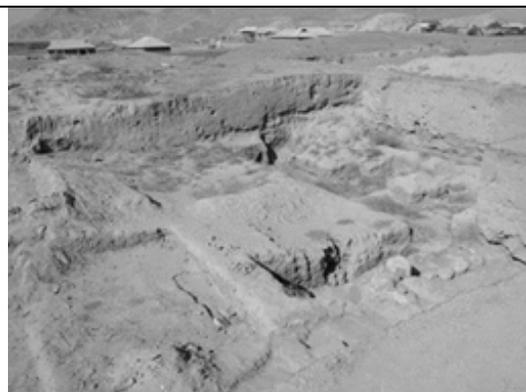


18. KKF-X第8室南西隅から東方向を撮影。2009年度の発掘はここまで。

2009年度 KKF-XI 発掘(1)



19. 8月23日、2008年度の範囲を西側へ3m拡張して発掘。



20. 2008年度の発掘範囲。



21. 8月23日、イスラーム墓地の墓石。右が北方向になる。



22. 8月25日、KKF-XI 第2室をさらに掘り下げる。



23. 金属片



24. 西側。表層、第一層（イスラーム期）第二層（トハラ期）、さらに第三層。

2009年度 KKF-XI 発掘 (2)



25. 8月26日、部屋2北側、土器片、  
装飾貴石、紡錘車。



26. 9月2日、第4室西隣、炉周辺から  
出土の粘土塊。成形材料か。錘も出土。



27. 9月2日、第4室西隣の炉周辺。粘  
土塊は中央の段の左端。



28. KKF-XI 今年度発掘範囲を北から撮  
影。手前左が第4室。右手前は炉跡。

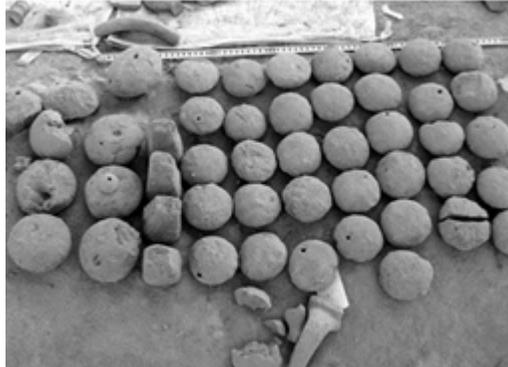


29. 9月5日、第2室をさらに掘り下げ  
る。



30. 9月5日、左の発掘で検出された石  
組遺構。

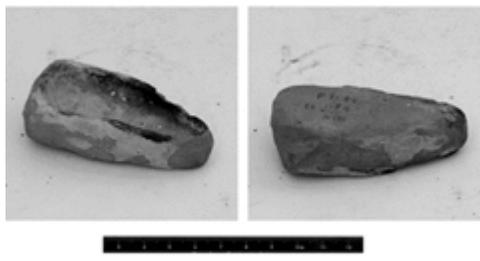
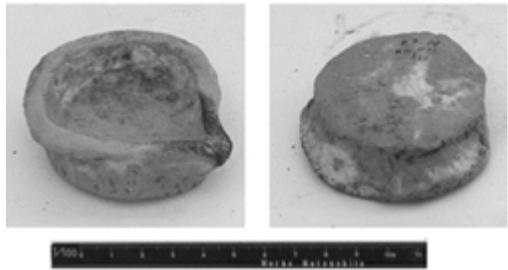
2009 年度 遺物 (1)

	
<p>1. 礎石 (KKF-X、第5室南中央)</p>	<p>2. カメ (主に KKF-X、第7室より出土)</p>
	
<p>3. 粘土塊 (左より縦3列目は錘の形に成形されている。XIの炉辺より出土)</p>	<p>4. バクトリア語銘文 (<math>\alpha \tau \upsilon \rho \alpha \lambda \alpha \beta</math> o?) [KII: 1194-797]、KKF-XIより。</p>
	
<p>5. 両端、バクトリア・コイン KKF-XIの第3層より</p>	<p>6. 鈴と装飾品 [KII: 1194-784] KKF-XIの第3層より</p>

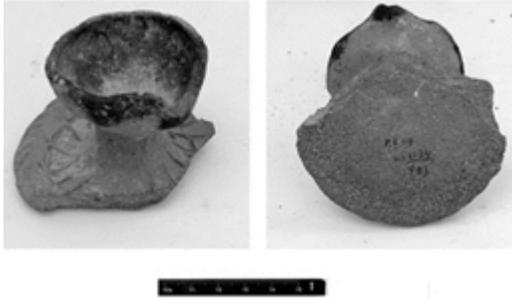
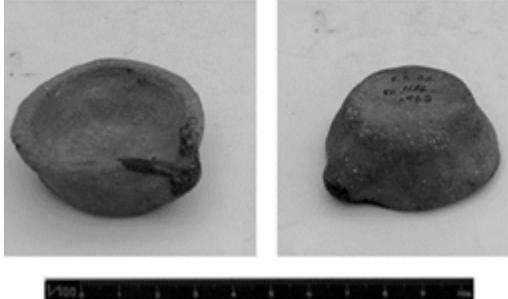
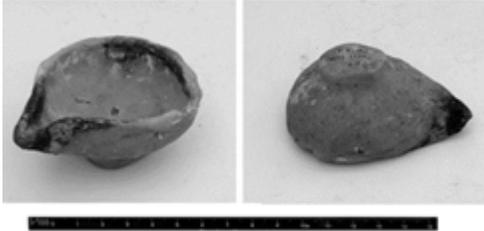
2009 年度 遺物 (2)

	
<p>7. 金属器片</p>	<p>8. ペンダント (左: 男神像、右: 山羊) KKF-XI 部屋 2 南端より出土</p>
	
<p>9. テラコッタ (神像) [KII : 1194-781]</p>	<p>10. テラコッタ (6.8×3.2×1.1cm) [KII : 1194-844]</p>
	
<p>11. テラコッタ (邪神像?) [KII : 1194-879]</p>	<p>12. テラコッタ (象) [KII : 1194-2009]</p>

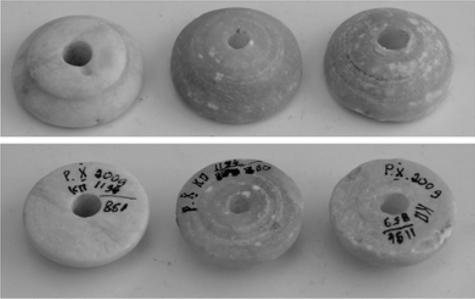
2009 年度 遺物 (3)

	
<p>1 3. テラコッタ (山羊) [KPI : 1194-852]</p>	<p>1 4. テラコッタ (山羊) [KPI : 1194-858]</p>
	
<p>1 5. 印章 (土器) KKF-X 部屋 6 東側より、 [KPI : 1194-845]</p>	<p>1 6. 土器製錘 KPI : (7×4cm) [KPI : 1194-802]</p>
	
<p>1 7. 燈明皿 (チラク) [KPI : 1194-1018]</p>	<p>1 8. 燈明皿 (チラク) [KPI : 1194-926]</p>

2009 年度 遺物 (4)

	
<p>19. 燈明台・第5室北側より出土 [KII : 1194-983]</p>	<p>20. 燈明皿 (チラク) [KII : 1194-843]</p>
	
<p>21. 燈明皿 (チラク) [KII : 1194-873]</p>	<p>22. 小壺・第五室東側礎石横から出土 [KII : 1194-820]</p>
	
<p>23. 小壺 KII : [KII : 1194-782]</p>	<p>24. 小壺 [KII : 1194-821]</p>

2009 年度 遺物 (5)

	
<p>2 5. 土器片 [K17 : 1194-822]</p>	<p>2 6. 土器片 [K17 : 1194-826]</p>
	
<p>2 7. 土器片 [K17 : 1194-849]</p>	<p>2 8. 紡錘車</p>
	
<p>2 9. 紡錘車 [K17 : 1194-859、860、861]</p>	<p>3 0. 石製遊戲用駒 [K17 : 1194-828]</p>

## 2010年度発掘調査報告

### 調査概要

#### 1. はじめに

2008年の発掘ではチャルタクと呼ばれるゾロアスター教方形拝殿を発掘した。さらに、2009年にはその周辺から複数の関連する部屋が検出され、これらの部屋が複合施設であることが明らかとなった。部屋1がこの宗教的複合施設の核である。炉や石臼、そして貯蔵用壺が出土したことから、部屋5は食堂を備えた厨房であったことがわかる。部屋7は沐浴室である。禊に類する儀式がこの部屋の中で執り行われたものと推測できる。そしてその後には修行者は方形拝殿である部屋1に向かったのだろう。部屋2と4は居住施設である。修行者はここに寝泊まりして宗教的行為をおこなったものと考えられる。この複合施設は1、2、3、4の中庭に囲まれている。そして、南東の隅には工房があった。2007年に、この工房から、テラコッタを作成するための土器製型が出土している。たくさんのミフル神の像が製造され、拝殿に参拝した信徒たちに配られたのだろう。

この年度の調査からトータルステーションとデジタル平板ソフトを使用して図化作業をおこなった。地形図作成には自動コンタ機能(等高線を自動的に算出・描画)も活用することができた。2008年度、2009年度の測量では地形図作成は中断していたが、2012年度までに遺跡全体の地形図を作成する予定で進めていきたい。



#### 2. 発掘の概要

2009年度は KKF-XI の発掘は中断、KKF-X と遺跡南東約330m に位置するナウス(墳墓)を発掘、KKF-X では北へ3m 拡張、部屋5と中庭3をさらに掘り下げた。

## 日程表

日曜	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜(休)	土曜
7/18 伊丹→成田 イスタンブール	7/19 ドシャンベ ホテル	7/20 博物館 打合せ	7/21 現場へ エサンボイ村	7/22 測点確保	7/23 測量データ 確認作業	7/24 ナウスまで トラバース
7/25 発掘作業 地形測量	7/26 発掘作業 遺構測量	7/27 発掘作業 遺構測量	7/28 発掘作業 遺構測量	7/29 発掘作業 遺構測量	7/30 データ整理	7/31 発掘作業
8/1 発掘作業	8/2 発掘作業 遺構測量	8/3 KKF-X 北側	8/4 現場終了 →ドシャンベ	8/5 博物館	8/6 データ整理	8/7 博物館で 遺物撮影
8/8 博物館で 遺物撮影	8/9 ドシャンベ→ イスタンブール	8/10 閑空着				

### 現場への往路

7月18日、朝5時には起床し、出掛ける用意をする。40分に出るが、帽子を忘れていたので、すぐに取りに戻った。河原町には予定より早くつき、快速電車の先発普通電車が止まっていた。高槻市でこの普通電車に乗り換えのようだ。その普通電車に乗った。関西空港行きのはるかとは違って、のんびりした気分で、阪急電鉄沿線の風景を眺めた。先月末にも札幌出張で同じ路線で出掛けていたので、気心が知れたような感でもある。

大阪空港ではその時と違って、JALへ行った。機械での手続きを試したが、受け付けないのでカウンターに行く。海外への乗り換えがあるので機械での手続きはできないとのこと。4階の出口ビーへ行って宅急便の荷物を受け取る。宅急便の会社が多数並び、クロネコヤマトはいちばん奥にあった。場所を確認して、旅行保険などの手続きを済ませて時間をつぶした。チェックインの時刻前に荷物を受け取りカウンターへ。超過料金6840円を取られる。

成田発が半時間ほど遅れ、乗り継ぎが心配されたが、去年の経験もあってか、搭乗口へは迷わずにたどり着いた。ここでも小一時間ほど遅れて出発。ヤレヤレこれで一安心と思って見回すと、通路を挟んですぐ横に日本人らしい夫婦が座っていた。男性の方は見たことのある顔で、在タジキスタン日本大使館の中山大使のようだ。しかし大使はエコミークラスには乗らないだろうと思い、しばらくは音声のない映画を見たりしていたが、降りる間際に尋ねるとやはり大使だった。挨拶を交わして、一度日本大使館へ伺うことを約して別れる。

7月19日、中山大使と別れて入国審査へ行く。大使は手続き不要なのだろう、夫婦ともども見当たらない。予定より一時間ほど遅れたためか、迎えが見当たらない。実は後でわかったことだが、1日あとに到着すると思っていたとのことだ！とにかく一万ドルを抱えて空港の雑踏に居るのも危険だと思ってタクシーに乗った。予約してあるというカヨン・ホテルへ行ってもらうが、まだ開いていないとのこと。仕方がないので運転手さんに紹介してもらったアジアグランドホテルに泊まることになった。一泊110ドルのダブル。一休みした後、博物館へ行く。不案内なため、迷った挙げ句に戦争

記念公園の戦車の所まで遠回りして博物館に到着したが、月曜休館日だった！連絡しようもなく、明日の午前中にまた来ることにして、本日は休養日である。携帯のメールとインターネットを使えるようにしたいと思って悪戦苦闘するが、パケット通信の設定がどうしてもできない。電話のほうは無難につながった。やはり当地のSIMカードを買った方が良さそうだ。明日、博物館に行ってカード購入を依頼し、航空券のリコンファームもしたい。現場へは明後日出発か？早々に寝る。

7月20日、6時起床。今日までの出来事を記録する。朝食の会場を探して降りた一階カウンターでインターネットの有無を尋ねると無線回線があるとのことで、パスワードを教えてくれた。早速朝食後にメール3通を送信する。9時すぎにチェックアウト。博物館まではタクシーで20ソモニである。博物館の事務所ではポボムロエフ館長が接客中だったが、合間を見て一万ドルを手渡した。これで今年度の科研費も目処が立ったことになる。

屋前後にポボくんが来るとのことで、しばらくは周辺で時間潰しである。出発は予想通り明日である。並木通りの木陰は存外に涼しく、散水器も役立っているのだろう。博物館に戻るとポボ君、ヤヒヨ君がいる。挨拶もそこそこにリコンファームとSIMカードの件を依頼する。ポボムロエフ館長が、明日は午前11時に出発すると言っていたので、リコンファームは明日にして、SIMカードを手に入りたい。店で買うにも身分証明が必要だなどとやっている、ポボ君の弟君が貸してくれた。

## I 作業記録

7月21日、朝7時の約束のはずである。しかし、博物館まで行ったがアカデミー長官マツソフの夫人らしき女性が掃除しているだけで、他には誰もいない。カヨン・ホテルに戻って横になって待つことしばし、ポボ君が入り口で待っていると電話がかかった。7時半までにはなっていなかったが、日本人は時間にはうるさいんだぞと言いたかったが・・・。

早々に博物館を出発した。ドシャンベ市内で飲料水5リットル入りを4本とコカ・コーラを本当は1ダースほしかったのだが、2本だけしかないので、それで我慢する。

現地エサンポイへの道はもう何度も行き来しているので、うとうとしていると、10時半頃にエンスト。オーバーヒートしたようだ。昨日から調子が悪く、タンクのキャップを替えたのがよくなかったとのこと。件の飲料水1本が冷却水タンクに吞まれてしまった。携帯電話をやりくりして、やっと連絡が取れた。電波の状態がよくない田舎道のこと。これで一安心。11時過ぎにエサンポイからガフル氏がジープで牽引のため到着。正午前には昨年と同じ借家にたどり着くことができた。ヤレヤレである。

昼食後、昼寝して、午後5時から7時まで現場で立ち合う。去年の範囲から北に3メートル拡張されている。30センチは掘り下げている。去年の測点を探したが、草が茂って困難な状態である。ようやく、原点と去年の機械点(T3)の2点を確認した。今年の発掘のためにKKF-Xの東側に測点(機械点T01)を設置した。早いこと図化作業に入らないと大変だ。夕食後、測量器材の点検をして、就寝。

7月23日、作業は休み。昨日の図化作業の結果を見ていて、間違いに気づいた。Z座標の値がとんでもない数値になっているのだ。借家の庭で試したが、どうも数値入力の間違っていただけと考えられない。機械高を入力する際にメートルをミリで入力したようである。明日、計測し直して、確認しなければならない。観測を始めて早い段階でリストと照合しなければならないようだ。

夕食前、ポボムロエフ館長から報告書出版についての話が出た。150ページで200冊を印刷したいとのこと。費用はタジキスタンで作成すれば2000 \$ほどになると言う。日本円では二十万円ということか。科研費から支出すれば名目も立つと思うが、今年度内に出版できるかどうかの問題となるだろう。私の調査宿泊費と謝金とを製本代に振り向けることも考えられる。

7月24日、左足の小指と薬指の間に痒くなってきた。出国前に水虫ができて、薬を塗っていたが、それがまた出てきたようだ。薬は持参していない。よく拭いて乾燥させておくしかない。しかし、去年の痛風に比べれば、どうってことないだろう。痛風の際には便所で用をたすのも覚束ないほどだった。

本日の課題はZ座標の確認である。原点から引いた観測点での機械高を間違えないように慎重に入力する。確定後の数値が小数点以下3桁になるのに注意しておけば良いようだ。さらには測点リストを表示して、とんでもない数値になっていないかをチェックする。これで準備OK。

ポボムロエフ館長は皆に指示を与えると、ナウス(墳墓)の調査に行った。ホッジ君も連れて行ったのでポボ君に頼んで機械操作をやってもらう。そのうちに遺跡には数人の作業員とガフル氏しかいなくなる。独りで三脚とプリズムを移動させながらの機械操作を余儀なくされる。地面を舐めるような作業がコンタの図化である。2007年に国際文化学部の院生他2名とコンタの図化をやった時、彼らもおおいにへたばってしまったことがあったなあ！今回は自動図化ソフトを投入してはいるものの、面として測点を拾っていくということ自体には変わりはない。

行ったり来たりして午前中いっぱい入力作業を行う。遺跡での作業を終えての帰り、ナウス(墳墓)に立ち寄る。そこは2008年度調査の時に異神テラコッタが採取された崖崩壊の場所である。コディルヴ・フジャンクル区長宅の北側斜面で作業中だった。ポボムロエフ館長が上がって来いと言うが、崩壊しやすい斜面のこと、無理をして滑落したくはない。手前から数枚の写真(ナウス:1)を撮って墳墓跡までは行かなかった。

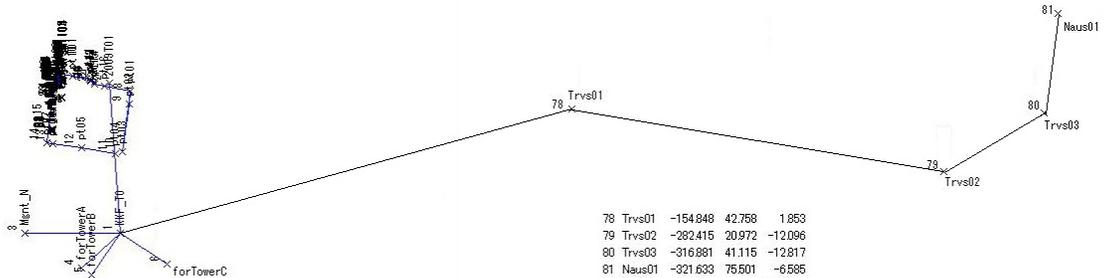
昼食時にポボムロエフ館長は興奮気味で数冊の報告書を見せながら貴重な遺物が出る可能性を指摘していた。今回の調査で遺跡と墳墓とのいずれを優先すべきかを尋ねられたので、館長の判断に委ねる旨を回答した。かなりの期待ぶりで、準備をしている。記録用の手帳はないかというので、持参の野帳の後期分を渡した。

午後5時に遺跡へ出発する。作業員の半分が墳墓へ当てられている。私はガフル氏採集の遺物の出土位置を測定した後、墳墓発掘調査に必要な測点を確保するために、トラバースを行った。一人で機材全部とカメラを抱えて機械点と後視点と移動点を設置しながらの移動はかなりの労働である。タジク側研究者に測点の意義が正しく理解されているのか甚だ疑問である！結局は

自己満足に過ぎないのかなあ!?2点のトラバース点を置いた後、午後7時前にどうにか墳墓下の路肩に測点(Trvs03)を設置した。X座標:316.881m、Y座標:41.115m、Z座標:-12.817mで、KKF原点から319.540mの距離である。

ボボムロエフ館長の方はあまり成果がなかったようで意気消沈した様子である。夕食時にもウオッカはなしであった。

私には好都合ではあるが。



トラバース概略図

7月25日、午前4時頃に借家の外から呼ぶ声がする。タクシーの運転手がボボ君を迎えに来たようである。いつまでボボ君が不在となるのかわからないが、研究者の参加数が確保できないことにもなりかねない。遺跡へ行く途中、ナウス(墳墓)で下車し、墳墓のそばに測点(Naus01)を設置した。X座標:321.633m、Y座標:75.501m、Z座標:-6.585mで、KKF原点から330.3754mの距離である。これでいつでも図化作業を開始できる。

機材を抱えて遺跡へ歩いて移動する。ホジ君が半分を持ってくれた。測点(TO)からコンタ作業用の測点(Tpgr01)を設置し、機械点移動をして、作業を開始する。

ホジ君が機械操作をしてくれたので、作業は順調に進んだ。設置した測点から観測可能な約80点をほぼ取り終えることができた。

ガフル氏が撮影を依頼してきたので、カメラを持って急行する。庭4から白色の壺のような遺物(KKF-X:図2)、西側に壊れた大甕(KKF-X:図3)が出土していた。レベルも取りたい旨を伝えて、機械を移動させ、ホジ君に操作してもらいながら、作業を進める。パソコンのバッテリーがなくなった時点で午前の作業は終了である。借家では停電が続いており、充電ができない。予備のバッテリーはあるが、今夜も続いたなら、何もできなくなってしまう。

午後5時からの仕事は墳墓周辺の撮影である。カメラだけ持って下車し、墳墓周辺で写真(ナウス:図2~5)を撮った。その後、遺跡へ移動してコンタ作業用の測点(Tpgr02)を設置した。その後、TO測点に機械を設置して発掘作業の記録に備える。特に新たな出土品はなく、終了時間前に撤収する。

夕食時にポボムロエフ館長は明日以降の発掘作業に期待できると述べてウォッカで乾杯する。夕食後に電気が来たのでとりかえひきかえ充電する。普段何気なく使っている電気だが、このようなことがあると、そのありがたみを痛感させられる。

7月26日(月)

昨日までの二三日、蚤の類いに悩まされてきたが、今日は掛け布団なしで寝て事無きを得たようだ。在タジキスタン日本大使館から届いたメール情報ではダニによる伝染病が発生しているというので気になるところである。

朝一番に、ナウス(墳墓)でカメラだけ持って下車、写真(ナウス:図6~9)を撮って遺跡へ移動。機械点入力ミスで情報を損なう。定位を確認することが肝要である。紡錘車の出土位置を削除。その後、KKF-Xの中庭4から銅製鈴(遺物:図1)の上半分が出土、その位置を入力する。同じく、中庭4から漆喰の構造物(KKF-X:図4)を検出、その位置も入力。午前中に二度、ポボムロエフ館長からの要請があり、ナウスに行く。行ったり来たりで集中できない。人骨5人分が出土し、副葬品もかなりあるとのことである。図化してくれとの要請があるが、ヤヒヨ君が手伝ってくれなければ無理だと一度は断ったが、ホジ君に手伝ってもらいながらやることにする。

昼食にはビールが並び、収穫物が披露される。クシャン朝コインの他に装飾品の部品、小さな金の装飾品などが並ぶ。出土位置の記録はキチンとできているのだろうか？図化が終わってはじめて遺物の取り上げをおこなうという原則はここでは守られていない。

午後5時からトータルステーションを使って骨片の位置を記録するつもりだったが、現実にはそう上手くはいかなかった。骨片はみんな片付けられていて、何の痕跡もなくなっていた。さらに、このあたりに金箔があって、そこのあたりに頭骨とコインがあって云々と言われても、返す言葉もない。一体どうしろと言うのだー！と逆上したいところではある・・・が、そうはいつでも何にもならない。言われる通りに図化作業をおこなったが、もとより満足できるものになるはずもない。6時に墳墓から遺跡まで移動。ポボムロエフ館長が機材の半分を持ってくれた。すでに終了時間まで半時間ほどなので機械を設置しても間に合わないと判断。野帳を取り出して憤懣を書き連ねてしまった。夕食にはウォッカ一本が出てくる。麦粒が瓶の底に沈んでいる類いのもので、ガフル氏は一口も飲まなかった。昨日も同じウォッカを途中で捨てていたようで、夕食もあまり進まないようだ。ホジ君もだいぶ疲れてきたようである。炎天下の作業がやはり効いてきたのだろう。

私もそうそうに就寝。

7月27日、昨日は夜中、いつまでも暑く、寝苦しかった。朝一でナウスに立ち寄り、写真とビデオを撮った。ビデオのバッテリーは日本で充電してきたが、少し放電している。遺跡へ移動して、機械設置を始めたが、電子平板のキーUSBを忘れてきた。現場と宿舎の間を徒歩で往復する。遺跡に着いて機械設置。図化作業を進める。中庭4の漆喰の構造物(KKF-X:図5、6)を撮影、ガフル氏によれば拝火教の宗教的儀礼に関わるものだと言う。聖火を点すタシュタクのように思われる。さ

らにガラス状の遺物が中庭4から出土する。午前9時ころ、国境警備隊がパトロールに回ってくる。測量には無線を使っているの、とがめられないか気になったが、別に問題にはならなかった。

午前9時20分頃、またもやボボムロエフ館長からの呼び出しがあり、カメラを持ってナウスへ行った。昨日のナウス(ナウスA)の向かいにあるナウス(ナウスB)が掘り返されている。石組みの構造と大腿骨(ナウス:図10~12)が出土していた。これだけだった！と残念そうなコメントだった。午後に図化することになったが、写真を撮ったらさっさと骨を取り上げてしまった。一体どうしろと言うのだ！というのは、昨日と同じ展開だ。再び遺跡に戻って図化作業を進めるが、すぐに終了時間となった。

帰りにナウスに立ち寄るとホジ君だけが待っていた。ボボムロエフ館長と研究員アシラさんはすでに借家に戻っている。家に帰るとボボ君ともうひとりの青年がいた。調査に参加するとのこと。なんだかサマーキャンプみたいな雰囲気である。件の青年、どうやらアシラさんの彼氏のような感じだ。アシラさんも化粧が際立っていたもんね～！

えっ!?ボボ君の弟です!?博物館で会ったのだが、顔をすっかり忘れていた。いよいよボボムロエフ・ファミリーのサマーキャンプだね。夕食後はサッカーに興じるのにいたっては、やっぱりねえ。昨年のファルホット君のほうがアカデミック?だったかな～。

午後にはナウスBの図化のための計測を行ったが、小一時間待たされた挙げ句に、そのあたりこのあたりの指示で計測をする羽目にいたった。また、遺跡に戻れば戻るで、ガフル氏から取り上げてしまった遺物を3点見せられた。まだまだ道のりは遠い。この日もそうそうに就寝。

7月28日、右足の親指の付け根が痛くなりそうな感あり。ここのところウォッカが続いているし、急な坂を登り降りしているからだろうか。

出掛けにトラブル発生。無線の電源を入れっぱなしにしている、バッテリーが空になっている。仕方がないので、ケーブル接続で測定することになった。今の状況ではケーブル接続でも支障がない。ほとんど一人でやらなければならないからだ。設定に少々手間取るが、ケーブル接続で測定を開始する。昨日の遺跡での出土品のレベルを計測しなければならない。中庭3から出土したレリーフ(人物?)の断片(KKF-X:図7、遺物:図6)と中庭4から出土した紡錘車、(KKF-X:図8、遺物:図11)とビーズ(黄色)(遺物:図26)、の3点である。

始めはホジ君が手伝ってくれるが、一通り測定が済むと墳墓のほうへ行ってしまった。後は一人でぼちぼちいくしかない。10時頃には気温が高くなり、コンピューターもかなりの高温になっている。ダウンしてしまわないか気がかりである。

終了間際にブロックの表面に文字のような痕跡のあるものが出土した。清掃して後で検討してみなければ分からないが、もし、カローシュティエーだったならば…、そんなわけなかったよね。

昼からの作業は一人になり、なんと非効率な作業!!中庭3の第二層から出土したアイワーン(バルコニーの一種)の礎石と見られる石畳状遺構の石(KKF-X:図10)を図化するのに機械と遺構の間を行ったり来たりして、やっと4個の石を図化した次第。

部屋8の北側壁に穴を検出する。壁に空いた穴であるから、ムスリムの墓ではない。ガフル氏によれば部屋7からの暗渠の排水口だとのこと。

帰りに墳墓で停車するとスコップなどを全部積み込んだ。墳墓での作業は今日までのようだ。明日からは測量の手伝いも頼み易くなりそうだ。夕食ではガフル氏も吞まないとのこと、私も右に習えでコップを伏せ、焼き飯の一種、ポロ(プロフ)を頂くのに専念する。

夕食後は機器のバッテリー充電。夜に雷が鳴った。

7月29日、夜中、蚤の類に責められ、夜具を剥いでベッドだけにしたがダメだった。ベッドごと日干ししなければならぬのだろう。午前3時頃に小用に外に出るとポツポツと雨が降っていた。5時頃には小雨模様になって、ポボムロエフ館長は車の中に避難した。朝食はお茶とナンのみ。現場に到着すると、兄ボボ君がスコップを手に墳墓へ行く。作業員も二三人を連れて行った。

ホジ君に機械の設置をまかせてみる。設置が済んだら昨日の石畳遺構の図化を続ける。右足の親指の付け根がたいぶ痛い。しかし、記録を残していかなば、次々に遺物が取り上げられていく。部屋6の壁北東隅から壺(KKF-X:図11)が出土、この壺の西からテラコッタ(遺物:図2)も出土する。部屋5の壁南東隅の壺(KKF-X:図12、17、20)の周りから紡錘車(KKF-X:図16)、ガラスの小物(KKF-X:図15、遺物:図28)、金属製プレスレットの断片(遺物:図16)を検出する。さらに部屋6の壁北西隅から壺2個(XXF-X:図21、22)が出土する。口が壊れた東側の壺からは、四角のコイン(遺物:図19)と指輪の断片(KKF-X:図18、遺物:図17)が出土している。

それにしても、理解できないのが彼らの記録についての意識である。ポボムロエフ館長が昨年出土の壺の寸法が知りたいと尋ねてきたのだ。それは自分で用意しておくべきことではないでしょうか？昨年度のレポートはすでに渡しているのに。私も昨年の記録を持ってきてはいるけれども、自前で用意しておくのが当然でしょうが！遺物は全てタジキスタンにあるのだから……。なんて具合にストレスを感じるのが痛風には一番悪いのです。

夕食後にはハルブズ(メロンの一種)が出る。新鮮な果物を頂き、穏やかな気持ちでいきましょう。明日1日ジッとしていたら、少しは良くなるハズと信じて就寝。

7月30日、昨夜は蚤の類に悩まされることはなかった。今日は静養に努めたい。ボボ君の弟君は今日ドシャンベへ帰るとのこと、私のパスポートも彼に託してヤヒヨ君に渡ることになるとのこと。金曜日のバザールで未明から車が隣接地の広場へと入ってくる。朝食前にポボムロエフ館長にパスポートと10ドルを預ける。ナンと紅茶の朝食。ポボムロエフ館長とガフル氏はバザールへ買い出しに出掛ける。私は静養。11時頃にポボムロエフ館長が呼ぶ声があったので行ってみると、アイスクリームを食えと言う。バザールで買って来たものとみえて、自分では絶対に買わない代物だ。下痢を覚悟で頂く。昼食は万頭とサラダ。生野菜はありがたいが川の水で洗ったんだよね!?こりゃあ、2連発だ。足に続いて腹もいかれるのか？とんでもない静養になったものだ！

図化作業は概ね順調で、プリントアウトできる程度までには仕上げることができた。測点の選択

複写ができないようになっているので、野帳に抜き書きしたうえで、手入力した。これでA4判に印刷できる。ただ、昨年までの平板測量とのレベルの誤差があるのか気になったが、要確認事項である。昼過ぎから風が強くなって、砂塵が舞う。電子機器には過酷な環境だ。右足親指の付け根はまだまだ痛い。今夜一晩寝て、様子を見るより仕方がないようだ。

夕食にはポボ君の弟君もいる。ドシャンベには帰らないのか？パスポートも戻ってきたし、どうも判らない。ポボムロエフ館長はヤヒヨ君が万事手配してくれると言うのでそれを信用しておこう。まあ、どうにかなるのだろう。

7月31日、足はまだまだ痛い。作業のやり方を考えなければならないだろう。遺跡の発掘も進み、地面からだいぶ低くなってきている。繰り返しの登り降りは患部への負担になるようだ。なるべくホジ君に動いてもらい、私は床面を定位置とするしかない。パソコンとカメラを定位置に置いておけば動かなくてすむだろう。

今日、ポボ君の弟君がドシャンベへ帰る。パスポートも託した。朝食はナンとコーヒーで終わり。遺跡についてホジ君に機械設置してもらい、図化作業開始。昨年とのつながりが取れるような線を拾う。遺物も図化していくが、壁に隠れて見えない部分が多い。もたもたしていると、メジャーを取りに行っている間にさっさと取り上げられてしまった。これには閉口してしまった。そこで、測点の移動を行った。今年の発掘調査は現状より北には拡張しないとのことで、北に測点(T02)を置く。(KKF-X:図27)廃土が盛り上げられているので、その撤去からしなくてはならない。足場が悪いがしょうがない。ホジ君が手間取っているので、私が設置したが、やはり少々時間がかかってしまった。部屋6の北東隅から二つの壺を取り上げ、さらにトレンチを拡張する(KKF-X:図24)。そこから四角の日干し煉瓦(30cm×30cm、厚さ10cm)(KKF-X:図23)と小筒状の遺物(KKF-X:図25、遺物:図30)が出土する。

5時からの作業も移動した測点で行った。唯一のポイントが中庭3の部屋6の東側壁際のコイン(KKF-X:26、遺物:21)で、高さが足りずに1.5mに上げての測定であった。ポボムロエフ館長は第2層まで掘り下げたいとの意向で、石畳遺構も取り上げてしまった。第5室も掘り下げて、石も次々に撤去していく。人為的な構造物ではないのでそれでも良いのかもしれないけれども、図くらい残しても良さそうなものである。

夕食ではコインが出たので酒を飲もうということになったが、私は固辞した。これ以上悪くなりたくないからねえ！

8月1日、夜中に痒みで目が覚めた。毎日、夜具を太陽に晒さなければならないようだ。ネズミも居るし、外で寝た方が良いのかもしれないが……。

右足の方は少しはよくなっている。ウォッカを飲まないのも良さそうだ。

今日の作業はトータルステーション設置場所の確保から始めなければならない。盛り土が崩れ落ちているのだ。スコップで土砂を除く。そのあと機械設置する。壁際でターゲットが見えないとき

には、1.5メートルのロッドの一番上にターゲットを付け替えて観測し、メモには、Z=-0.5と注記。それでも見えない場合は、メジャーで測った適当なもので継ぎ足して、その長さを注記した。例えば、Z=-0.5-0.8といった具合である。中庭4からコイン(KKF-X:図28、遺物:図22)が出土する。部屋5からは紡錘車(KKF-X:図29、遺物:14)が、中庭3からはテラコッタの像(KKF-X:図30、遺物:図3)がそれぞれ出土する。

午前中の終了前には、各人、相当疲れた様子でそれぞれに横になったりしている。調査も四週目になって、疲れがたまってきたようだ。昼休みにポボムロエフ館長は部屋で長いこと眠っていた。

午後掘り下げ作業が続く。中庭4からコイン(KKF-X:図31、遺物:図23)が出土。部屋5から小水差し(KKF-X:図32、遺物:図25)が出土。また、中庭4と部屋5の北壁の下の甕の中からコイン(KKF-X:図33、遺物:図24)が出土する。常にパソコンなどを作動させているとバッテリーがもたないの、電源を切っておく。再開するには必ず後視しなくてはならないので、後視点にターゲットを立てなければならない。次年度の機材としてターゲット一式を追加するべきだろう。そうすれば、常に後視点を置いた状態で継続して作業が可能となる。中庭3の西側の壁際付近からテラコッタ(KKF-X:図34、遺物:図4)が出土する。琵琶を弾く楽士をかたどったもので、ポボムロエフ館長も見られない代物のようである。

夕食、私はコーラで乾杯する。

8月2日、昨晚、天井を走り回るような音で目が覚め、ネズミかと思ったが、実は蝙蝠が入り込んだのだった。しばらくすると開け放った入り口から外へ飛んでいった。ついでに小便に出ると満天の星だ。やっぱり違うなあ～。

今回は懐中電灯の電池がなくて不便だったが、携帯の液晶画面が役立つことがわかった。午前中の作業は引き続き掘り下げ調査である。天気は曇りで気温も少しはましな状態である。今まで出土した層より古いものが出てくる。日干しレンガからなる遺構で、部屋1やその他のものと建物の方が違っている。7月25日の記録で小さな白い甕としていたものは臼(KKF-X:図37)であることが判る。石臼のうえに漆喰で壺の形に成形されたものである。その用途については明確ではない。中庭4の東から小さなコイン(KKF-X:図36、遺物:図25)と手がある像のテラコッタ断片(遺物:図5)が出土する。

昼食後、ポボムロエフ館長が金額のことについて何かしゃべっているが、お金のことだけに曖昧に答えるわけにもいかず、ポボ君を呼んで話してみると300ドルほど立て替えてくれとのこと。手元にある分280ドルを用立てる。また、帰りの宿泊についてアパートがあるが、そこでどうか？とのこと。ホテルの高価なのに閉口している私としては断る理由もない。

日中はかなりの暑さである。外の温度も真夏日相当だろう。午後4時のおやつにはスイカが必ず出る、というより水分補給のためであろう。分からないのがスイカとナンをいっしょに食べる。ベッド周辺を整理していると濡れティッシュの詰め替えが二袋できた。家に置いてきたものと思い

込んでいただけにありがたく感じられた。

午後の作業。5時になれば風が少々涼しく感じられる。

古い時代の壁跡(KKF-X:図38~40)を図化する。まずは東側から図化するために機械点をT03に設置して観測。次に北側の壁跡を図化するために機械点をT02に移動させようとしたが、釘ごと土といっしょに掘捨てられている。なんとしたことか！仕方なく、T01を機械点として図化を続ける。写真も撮っておく。

夕食時にボボムロエフ館長がドシャンベではアラブダンサーの店に案内しましょう、ネクタイなどの正装は貸してやるからというが、あまり気乗りはしない。ハーレムの文化なんだろうけれど、女性蔑視の感があり、あまり好きではないのだ。

8月3日、夜中に右踵あたりが痒くて寝付けない。次回での対策を考えておかねばならない。

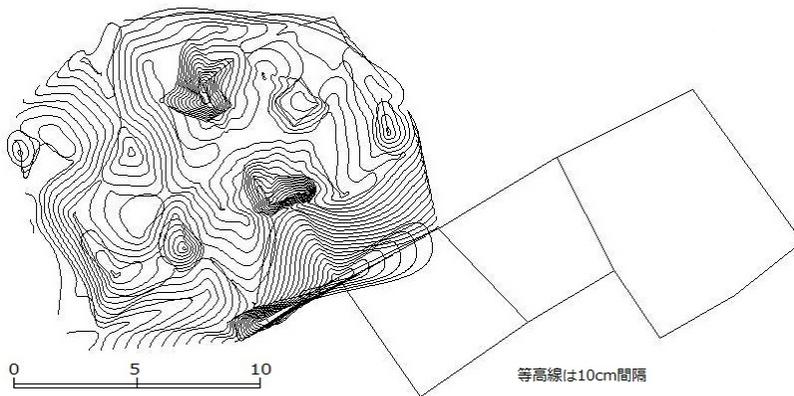
朝から曇っていて、気温もさほど上がらず比較的過ごしやすい。発掘も最終段階となり、箒で清掃したりしている。

明日にはドシャンベに帰るような話しになっており、地形図の方も急がねばならない。彼らにしても大分疲れているように見える。写真撮影や作図は博物館でやろうということのようである。5日のホテル滞在費はアパートに住むのであればよいとして、後はかねてからのヤクボフ氏の著書翻訳の出版準備に費やしたいと思う。無駄な時間とならないようにしたい。

夕方、コディルヴ・フジャンクル区長さんも加わってささやかな宴席が設けられた。

8月4日、現場最終日である。コンタ測量、9時までで打ち切り。実は仏堂周辺の現状を詳細に作図したいと思っていたのだが、ボボ君の心情を察するに、作図することに躊躇した感もある。彼によれば、リトビンスキーは仏堂発掘後に遺構の覆い屋を作って保護しようとした。遺構の四隅に残るコンクリートや鉄骨の残骸はその名残だという。しかし、ソ連崩壊後の内戦による混乱の中で覆い屋も住民によって持ち去られたというのだ。あまり触れて欲しくない傷跡といったところか。

未完成ではあるが、限られた時間内で描いた図面を挙げておきたい。



宿舎に戻って、荷造りに小一時間かけ、10時ごろに出発する。往路でオーバーヒートした車をボボ君が運転、マブルーダさんとマフトナ、アシラさんとホジ君、それに私が同乗した。ジープには家財道具と機材のすべてが乗せられ、ガフル氏が運転、ボボムロエフ館長が同乗する。どう見ても家族のキャンプ帰りといった雰囲気である。途中レストランで昼食を取って午後3時には博物館に到着した。ボボムロエフ館長とボボ君がアパートまで案内してくれたが、空港の方角だということぐらいしかわからない。途中、バザールに寄って水と食品を買ってくれた。

アパートに着くと、女性が二人居たが、入れ替わりに出て行った。誰？わからないまま、部屋を案内され、鍵を受け取る。久しぶりにシャワーを浴び、横になっていると、チャイムが鳴った。仕方がないので扉を開けると、十歳ほどのメガネの女の子がいた。～ちゃんはいる？といったことを言っているように思えたので、いないというと、すみませんといって帰っていった。いつもは誰が住んでいるのだろうか？それにしても改修工事なのか騒音がひどい。すぐ上の階でやっているようだ。疲れのため、そうそうに就寝。

8月5日、8時にアパートを出て、すぐ前の空港大通りで8番のミニバスに乗った。グランドアジアホテルの前を通ったので、そこで降りておけばよかったのだが、降りそびれて西郊外へ。もうダメだと、降りてタクシーを拾った。駅前美術館までで20ドルを払った。少し高いとは思ったが、これも勉強。博物館に着くとまずトータルステーションの清掃をした。メンテナンスに出すにしても砂塵まみれでは面目ない。濡れティッシュはここでも活躍した。次に写真撮影の準備。博物館には専門のカメラマンがいるだろうに、何故私が撮影しなければならないの？と思いつつも、三脚やバックを出してもらう。三脚は埃まみれ、バックはグレーの方眼入り、いっしょにカラーコントロールパッチもある。そうこうしている時に別室ではボボムロエフ館長たちがワインを飲んでいる？のを見てしまった。まあ、別にどうでもよいけど。撮影を始めてしばらくして昼になったので、外に出てパンとチーズで食事をする。この頃から頭痛がしだした。やはりシャワーがよくなかったのだろうか？

食後に撮影を続行。今年の出土品を撮影し終えて、ボボムロエフ館長にUSBに入れて渡し、少々疲れたので帰ると言って、アパートに帰る。途中までボボムロエフ館長が同行、ルダキー通りで乗用車のタクシーで8番のカードを出した車に乗るようにと教えられた。いわゆる白タクシーの類だ。アパートでは頭痛が続くのでベッドで横になっているとチャイムを鳴らし扉を叩く音がある。男女が二人立っていて、女性は名簿のようなノートを持っている。ボボムロエフ館長に電話口に立ってもらい応答してもらう。明日にまたと言って帰ったのが気になったが、ひとまず一件落着。頭痛が続くので夕食も取らずに就寝。

8月6日、頭痛はまだ続いている。8時に洗濯機を使って調査で汚れた服を洗う。8時半にアパートを出て、8番のタクシーで博物館へ。今日はスムーズに行けた。午前中は機材の清掃とビデオデータの受け渡しをする。遺跡平面図の図化作業を継続する。明日はプリントしてボボムロエフ館長に渡す予定だ。昼食に行くと断って博物館を出て、フライドチキンの店で食事を済ませ、スーパー

でパンとキュウリを買って戻る。チキン2個とフライドポテトで16ソムニだった。館長室ではボボムロエフ館長が今からアカデミーに行き、そのまま帰宅すると言って、慌ただしく退室しようとしている。私も居残る義理もないし、頭痛も続いているのでアパートに戻る。騒音が激しい。しばらくカメラを手を外に出て散歩する。旧ソ連時代の雰囲気が残る街並みだ。交差点周辺の店で買い物をしてアパート一階13号室に戻る。ベッドに横になっているとチャイムとノックする音。面倒なので居留守を使う。実際、ノックの音か作業音なのか分からない感じだった。6時に、昼休みにスーパーで買ったパンとキュウリで夕食。その後、図化作業を続けた。9時に就寝。メールは時間帯によってつながったりつながらなかったりするが、バビロンMを使う限りでは概ね良好である。メール新規作成で送信しても不可である。一旦接続したうえで未送信メールフォルダーから送信すればうまくいった。料金はSIMカードをかりた段階でゼロだったものに二十ソモニ(5ドル)をチャージしただけ。二週間でのメールのみの使用で半分以下の減ですんでいる。事前に購入した欧州向けSIMカードではポケット通信ができないとの表示が出るのみ。次回への課題である。

8月7日、7時過ぎには工事が始まったようで、ガタガタしだしたので早めにアパートを出る。写メールを試みようと思い、アパートの外観を撮影した。白タクの8番に乗り、少々余裕も出てきて観察していると、8番のプラカードを出したり引っ込めたりしている。満車の場合は勿論、大きな交差点でも引っ込めたり出したりしている。お巡りがいると、ヤバいんだ～！ポリスカ？と言うと、運転手はニヤリとした。なるほど、違法操業なのだ。オペラ座の前で下車して、並木のベンチで時間つぶし。写メールの送信を試みる。料金を確認したがそれほどかかっていない。9時に博物館に到着する。館長室で作図の続き。プリンターのセットアップCDをUSBにコピーしてもらって、昼休み。

昼過ぎはプリンターと格闘する。セットアップCDなんぞでなく、付録アクセサリではないか！仕方がないので、インターネットに繋いでダウンロードする。キヤノンキヤノンでもヨーロッパ仕様だな～！インストールしてみるが認識してくれない。ただでもプリンターの接続は厄介なのに～！仕方がないので、スクリーンプリントで出力するしかない。

出土品の整理について、昨年のレポートが出ていない、との指摘がボボムロエフ館長からあった。そういえば、昨年は図面だけ送って文章は出さなかった。帰国後、すぐ送ることにする。

午後4時、アクバルおじさん運転の車に乗せてもらってトータルステーションを持ってアパートへ戻る。ボボムロエフ館長も同乗してきたが、今住んでいるアパートは歩いて2分ほどだと言う。6時からレストランで夕食である。時間になったのでアパートから出ると、ボボムロエフ館長が二人の娘とやって来た。初めにアパートに来た時に居た女の子たちだ。小遣いをもらってアイスクリームを買いに行った。ボボムロエフ館長と私は8番のタクシーで出かけた。西の郊外へとタクシーは走る。一昨日、ミニバスで通ったあたりである。噴水のあるレストランだ。途中からサイドアクバル氏が同席、そしてボボ君がやって来た。ゼリョーニマルカ「緑印」というロシアのウォッカがおすすめらしい。小さいコップで3、4杯。さらにはドウオブなる飲み物。足の痛みが気になりだしたところでやっとお開きとなる。ボボ君の運転する車で、郊外の田舎道を周りこむ形でアパートに到着する。

車に揺られてすっかり酔っぱらいになってしまう。明日は10時にと約束して、アパートに入ると、そのままベッドへ。

8月8日、2時に一度目が覚め、洗濯物を洗濯機から出して干し、また寝た。ウォッカがまだ残っている。6時に起床し、荷物の整理をして、ビデオの充電を試みるが、壊れている。もうだいぶ古い代物だから仕方がないのだろう。カメラと食糧だけ下げてアパートを出る。途中、ゼリョーニバザールに立ち寄ってぶらぶらする。写真を撮ろうとも思ったが、結局撮らずじまいになってしまった。カメラを向けることが無遠慮なことのような感じがしたし、人々の活力に気後れしたのだろう。10時まで並木道のベンチで時間をつぶした。

博物館に着き、館長室に入るが、誰もいない。机の上にはコインの類がでている。カメラをセッティングして十点ほどを撮影する。ヤヒヨ君がいたので、写真データを館長のパソコンにコピーしてもらい、本日の仕事は終了！ヤヒヨ君によれば、昨日今日は「蜂蜜祭り」だそうで、公園で各地の蜂蜜が出店しているとのこと。ぶらぶらと中央公園へ行って見たが、蜂蜜祭りらしきものは見当たらない。ついでに足を延ばしてタジキスタンホテル前の店に行き、ソーセージ入りの揚げパンを買って公園で昼食をとる。後は用もないので件の8番タクシーでアパートに戻った。

ゴミを捨て、荷物の整理をする。ゴミ箱はアパートの北西隅にコンクリートの囲いがあり、その中に2つ置かれている。5時に夕食をとり、食べ物の容器などと屑籠の紙屑を捨てて、後には何も無いようにする。6時にはベッドに入るが、7時過ぎにチャイムとドアを叩く音がした。もう、明日にはいなくなるのだから、居留守を使った。起きたついでにメールチェックするとカミサンからの到着時間の問い合わせだ。便利なものだな～。

9時ごろにまたもやチャイム！これも無視していると、電話が鳴ってボボムロエフ館長である。またチャイム？ドアを開けるとボボムロエフ館長とボボ君が立っていた。別れの挨拶に来たという。ボボムロエフ館長はパジャマ姿だ。ボボ君は3時に来るといって出て行った。気にかけてくれてなんとも有り難い。

8月9日、早朝、ボボ君運転の車で空港へ移動。ドシャンベからイスタンブールへトルコ航空で到着する。夜の出発までの長い時間を待合室をあちこち移動しながら過ごす。

8月10日(火)、夕方、イスタンブールから関空に到着する。

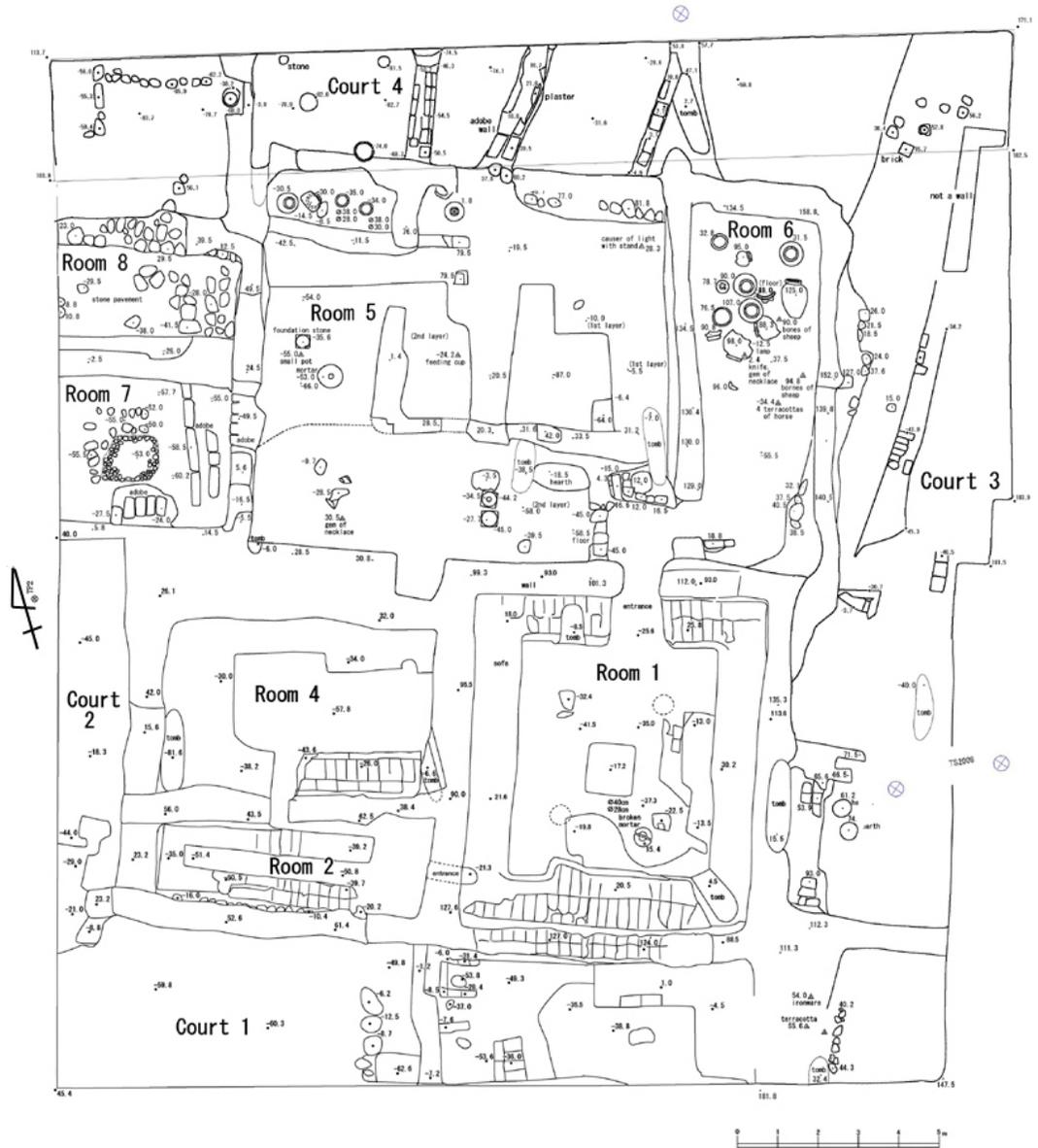
## II. 遺構

### 1) イスラーム期の墓

2009年度以降、イスラーム期の墓については作業過程の写真で記録することとなり、すべての墓についての記述は省略せざるをえなくなった。

### 2) トハーラ期の遺構

## KKF-X エリア(全体図)



### A. 部屋5

部屋5は、宗教的複合施設の中心となる部屋1(方形拝殿・チャルタク)の北側に位置する。南東隅の入り口は部屋1に続いており、部屋6と部屋7とを連絡する空間となっている。この部屋は数世代にわたって使用され、床面はいくつかの層をなしている。多くの遺物がこの部屋から出土している。

7月27日には、紡錘車(KKF-X: 図16)、小さなガラス製品(KKF-X: 図15、遺物: 図28)、金属

製ブレスレットの断片(遺物:図16)が南東壁の隅の壺(KKF-X:図12、17、20、遺物:図14)の周辺から出土している。

8月1日には、紡錘車(KKF-X:図29、遺物:図14)、小水差し(KKF-X:図32、遺物:図25)が出土している。さらに、壺と壺の断片が出土したが、これらの周囲からは遺物は見つかっていない。

## B. 庭3

庭3は部屋1と部屋6の東に位置する。このエリアは発掘過程で名称が変わっている。2007年度の発掘段階では部屋3としていたが、2009年度の発掘で部屋ではないことがわかった。トハラ期の複数の層からなり、ここから新旧拝火炉と拝火壇礎石一対、その他多くの遺物が出土している。

2010年度も、7月28日に文様レリーフのあるブロック(KKF-X:図7、遺物:図6)が、さらに深い層から石遺構(KKF-X:図10)が出土し、アイワーン(バルコニーの一種)の礎石部分と見られる。同じ石遺構は2008年度のKKF-XIでも出土している。

7月31日、部屋6東側壁下からコイン(KKF-X:図26、遺物:図21)が出土している。ポポムロエフ館長は、トハラ期の第2層を発掘するために、先述の石遺構を撤去。

8月1日、テラコッタ・人物像(KKF-X:図30、遺物:図3)と小さなコイン(KKF-X:図31、遺物:図23)が出土。西側壁下から、琵琶を弾く楽士を描いたユニークな形のテラコッタ(KKF-X:図34、遺物:図4)が出土する。

8月2日、トハラ期第2層から日干し煉瓦による遺構を検出する。これまでに出土した遺構より古いものと見られ、部屋1やほかの部屋とは異なり、庭4の古い壁遺構の方角と一致する。

## C. 庭4

庭4は部屋5、6、8の北側に位置し、2010年度に新たに発掘した場所である。トハラ期の複数の層が重なり、このため、多くの遺物が出土している。

7月25日、東側で白い甕状の遺物(KKF-X:図2)が、西側で壊れた大甕(KKF-X:図3)が出土している。

7月26日、金属製鈴の上部(遺物:図1)が出土。漆喰の構造物(KKF-X:図4)を検出する。ガフル氏によれば拝火教の宗教的施設であるとのことで、聖なる火を保持するタシュタクに類似する。

7月28日、紡錘車(KKF-X:図8、遺物:図11)と黄色のビーズ(遺物:図26)が出土。部屋8の北側壁の下部に穴があり、排水口であったと思われる。ガフル氏によれば、襖をおこなったと考えられる部屋7からの排水が部屋8の石組みの下の暗渠を通して、排水口から外へ流れたものと思われるとのこと。

7月29日、部屋6の北東壁の隅から甕(KKF-X:図11)が出土する。この甕の西側からテラコッタ(遺物:図2)が、また、同じ北東壁の隅から2個の甕(KKF-X:図21、22)が出土する。口が壊

れた甕の南側で四角のコイン(KKF-X:図18、遺物:図17)と小さな紡錘車が出土する。

7月31日、部屋6の北東隅の二つの甕を取り上げ、トレンチを拡張(KKF-X:図24)、そこから日干し煉瓦(30cm×30cm×10cm、KKF-X:図23)と小さなパイプ状の遺物(KKF-X:図25、遺物:図30)が出土する。

8月1日、コイン(KKF-X:図28、遺物:図22)、さらに部屋5の北側の壁下の甕の下からコイン(KKF-X:図33、遺物:図24)が出土する。

8月2日、7月25日の段階で白い甕の形をした遺物と記録したものが臼(KKF-X:図37)であることが分かる。石製の臼の上に白い漆喰で臼の形に成形したものであるが、その用途は不明。東側から小さなコイン(KKF-X:図36、遺物:図25)、また腕のあるテラコッタ(遺物:図5)が出土する。

この庭から三つの遺構が出土したことは注目すべきである。東から二つの遺構は一对の平行な壁で、これまで出土した他の部屋より古いもので、もう一つの西の遺構はさらに古い時代のもと考えられる。この一番古い壁は磁北より18°である。この偏角はリトピンスキーが発掘した南側の遺構と一致する。ただし、方形仏堂の-20°とは異なっている。並行する二つの遺構は磁北より30°で、この偏角は中庭4の日干し煉瓦と礎石の偏角28°とほぼ一致する。

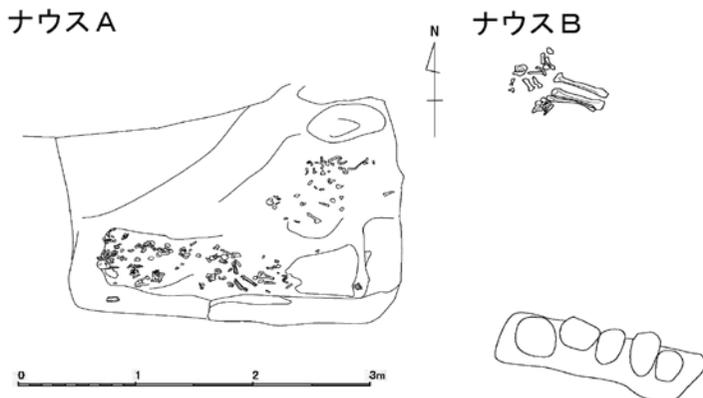
#### ナウス(墳墓)A/B

ナウスAとBは7月24日から29日にかけて発掘をおこなった。

7月24日、KKF-Xからトラバース測量を実施し、ナウスA/Bを見上げる手前の道路の路肩に測点(Trvs03)を設置した。X座標:316.881m、Y座標:41.115m、Z座標:-12.817mで、KKFの原点から319.540mの距離である。

7月25日、両方のナウスから見える地点に測点(Naus01)を設置する。X座標:321.633m、Y座標:75.501m、Z座標:-6.585mで、KKF原点から330.3754mの距離である。

7月26日、ナウスAの発掘現場(ナウス:図6、7、8、9)を撮影する。5人分の遺骨と副葬品が出土する。



7月27日、ナウスBの発掘現場において石組みの遺構と遺骨(ナウス:図10、11、12)が出土する。この日の午後、ナウス図面作成のためにトータルステーションを設置して出土地点などを記録する。

### Ⅲ. 遺物

主な遺物について記述している。( )内の数字は遺物:図の番号である。また、遺物図に附した黒丸に白抜き数字は遺物出土の順番であり、後に掲載した図の中に位置を示している。

#### i) テラコッタ像:

テラコッタ断片(1、2、5、6)、ライオン像?(3)、琵琶楽士像(4)

#### ii) コイン:(19、20、21、22、23、24、25)

#### iii) 土器:

水差し(7)、吸い飲み(10)、カップ(8、9)

#### iv) 金属製品:

鈴(15)、腕輪(16)、指輪断片(17)

#### v) 石(貴石):

ペンダント(8)、ビーズ飾り(31、32)、紡錘車(11、12、13、14)

#### vi) その他:

ビーズ(26、27)、角(29)、ガラスビーズ(28)、パイプ状装飾品(30)  
ナウスAの副葬品(18)

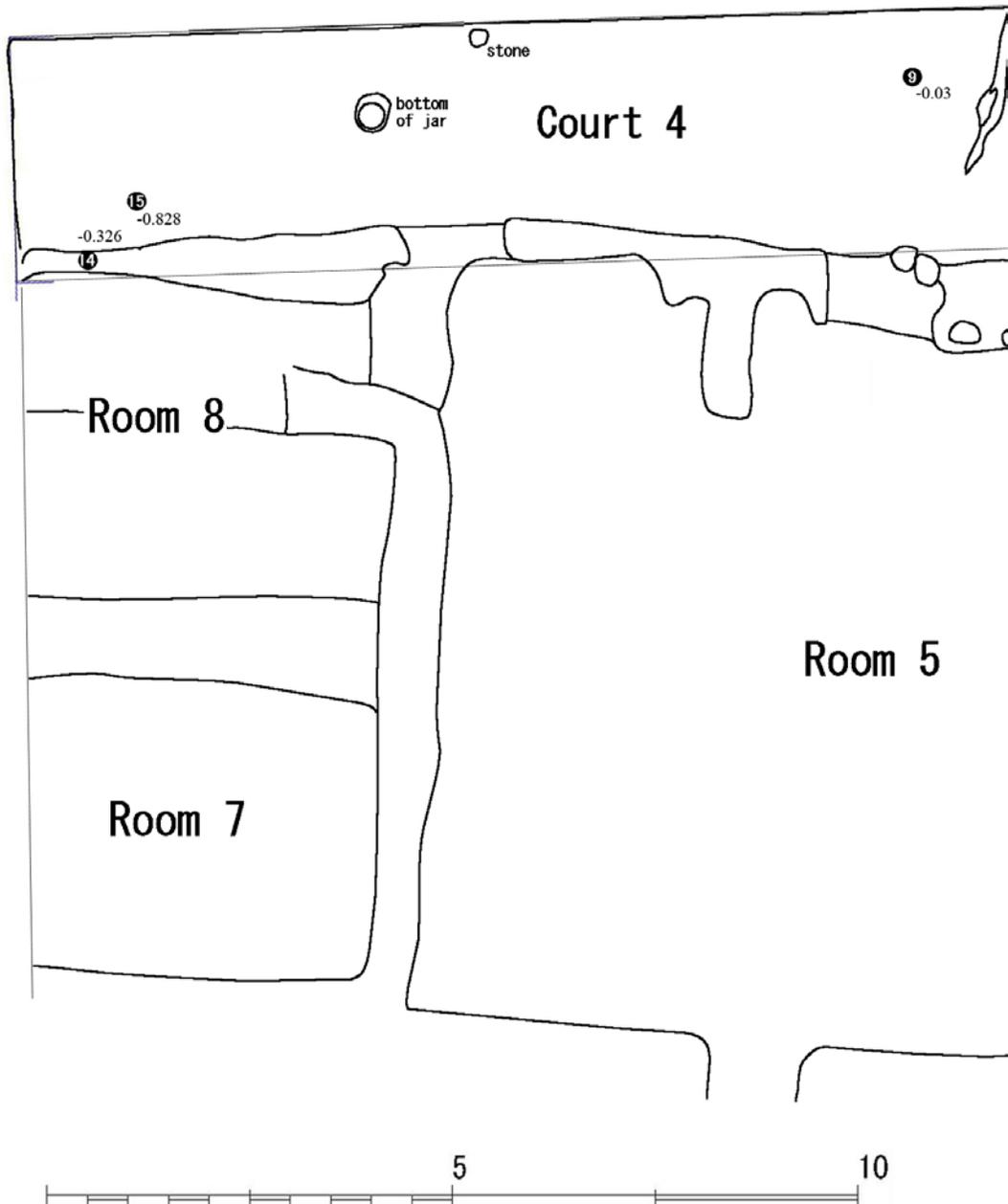
### まとめ

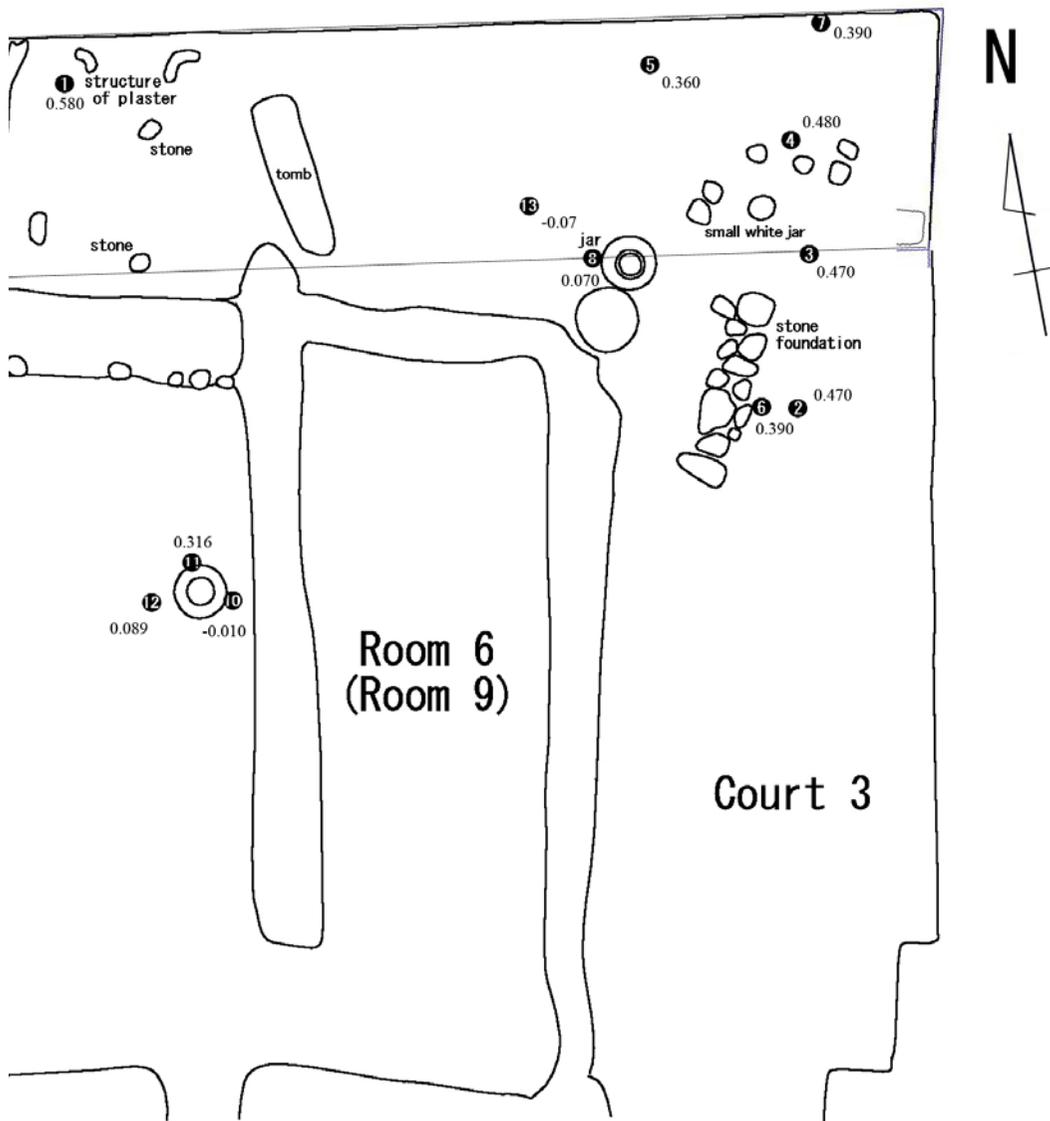
この調査の当初から、方形仏堂の偏角が他の遺構となぜ相違するのかを解明することが課題であった。1970年代、この遺構を発掘したリトビンスキーは彼の報告書の中で、方形仏堂の関連施設が三期にわたって拡張したであろうことを述べている。最初期にはゾロアスター教の拝殿であるチャルタクとして造られたが、第三期には仏教寺院として改築されたと言うのである。

今年度、2010年度の発掘ではKKF-Xの複合施設周辺でもいくつかの時代の層が確認されたが、方形仏堂と一致する偏角の遺構は今のところ出土していない。

しかし、仏堂が周囲の遺構と異なる偏角であることは、古い施設が取り壊されることなく、新たな目的で再利用されたことを示すことについては疑いがないものと考えられる。

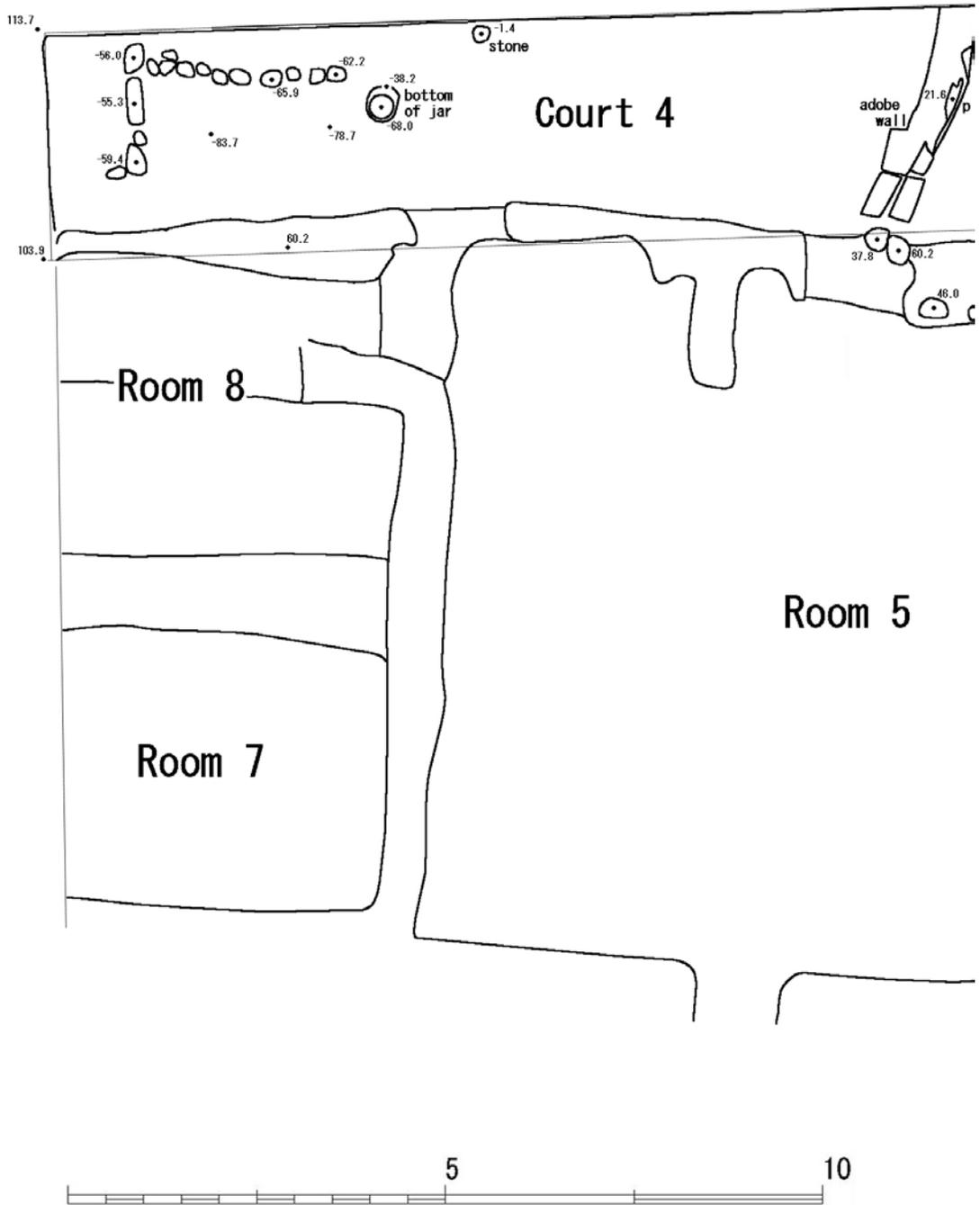
7月29日までの遺物の出土位置(見開き)

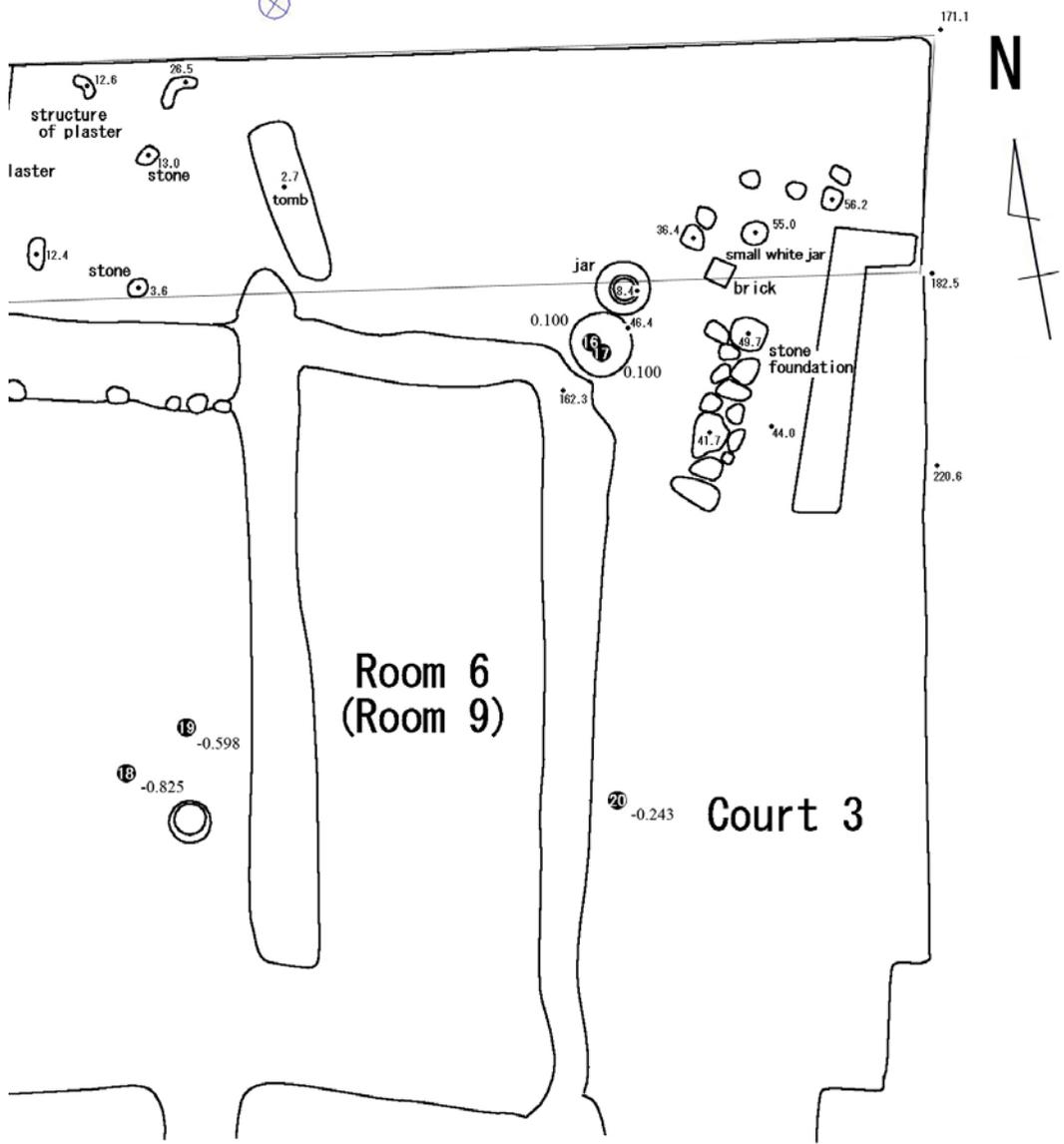




- に白抜きで出土番号表示、付した数字はレベル、( )内は遺物写真の番号
- 1: 青銅鈴(15)、2: 煉瓦片(6)、3: 紡錘車(11)、4: 装身具・黄色小ビーズ(26)、  
 5: 紡錘車(12)、6: テラコッタ断片(1)、7: 装身具(27)、8: テラコッタ断片(2)、  
 9: 紡錘車(13)、10: 装身具・ビーズ(28)、11: 紡錘車、12: 金属製遺品(16)、  
 13: -、14: 紡錘車、15: 羊角(29)

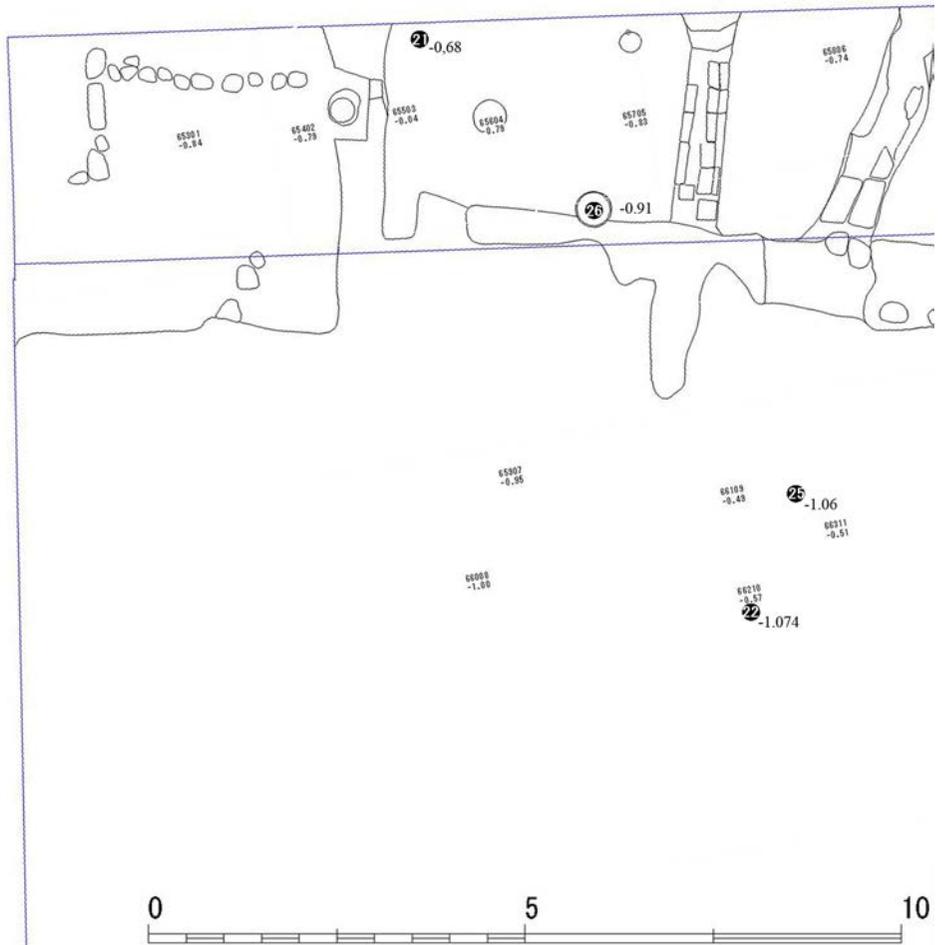
7月31日までの遺物の出土位置(見開き)

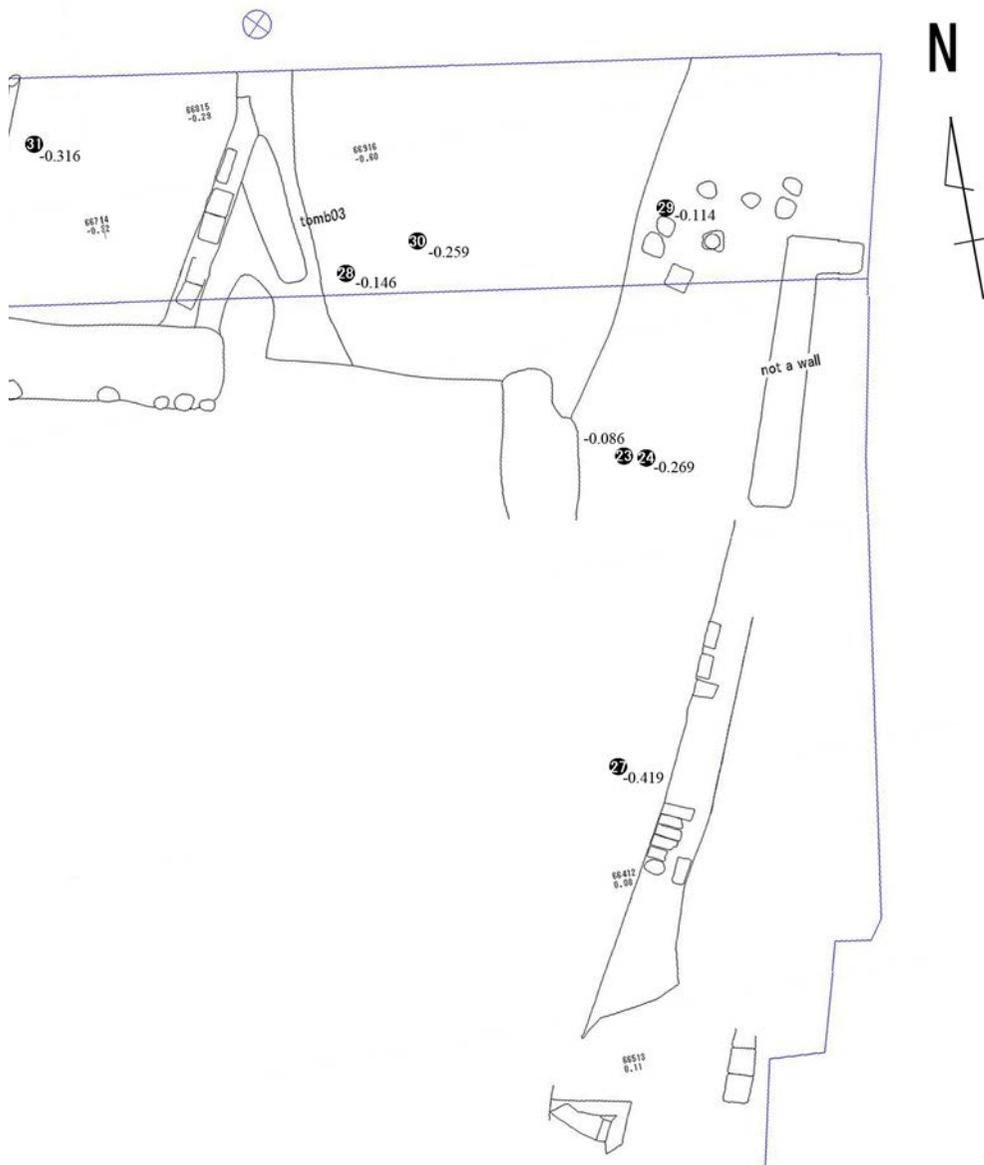




●に白抜きで出土番号表示、付した数字はレベル、( )内は遺物写真の番号  
 16:装身具断片(17)、17:コイン(19)、18:コイン(20)、19:象牙管(30)、20:コイン(21)

8月7日までの遺物の出土位置(見開き)





●に白抜きで出土番号表示、付した数字はレベル、( )内は遺物写真の番号  
 21:コイン(22)、22:紡錘車(14左)、23:テラコッタ(3)、24:コイン(23)、25:小ポット(7)、  
 26:コイン(24)、27:テラコッタ・楽土(4)、28:バクトリア・コイン小(25)、29:テラコッタ(5)、  
 30:紡錘車、31:コイン、

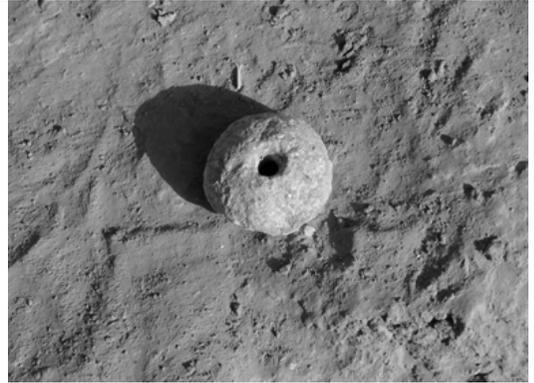
2010 年度 KKF-X 発掘(1)

<p>1. 7月22日、KKF-Xでは北へ3mの発掘範囲を拡張する。背中：ガフル氏</p>	<p>2. 7月25日、中庭4から白色の壺状の遺物が出土。</p>
<p>3. 7月25日、中庭4から壺上部が出土。</p>	<p>4. 7月26日、庭4から。青銅製ベルが出土（遺物：図15参照）</p>
<p>5. 7月27日、中庭4の構造物は拝火壇（タシュタク）の漆喰と推測。</p>	<p>6. 7月27日、中庭4から別の漆喰構造物（タシュタク）出土。</p>

2010 年度 KKF-X 発掘(2)



7. 7月27日、中庭4からレリーフ付の陶片（遺物：図6参照）



8. 7月27日、中庭4から紡錘車が出土（遺物：図11参照）



9. 7月28日、テラコッタ、貴石、紡錘車出土。



10. 7月28日、中庭3から石組みの礎出土。アイワンの基礎部か？



11. 7月29日、部屋6の北東隅壁から壺が出土。



12. 7月29日、部屋5の南東壁隅から壺が出土。

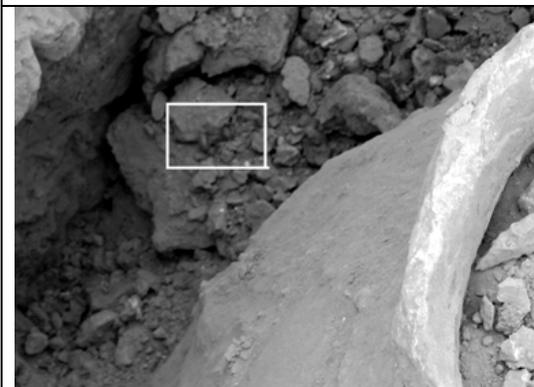
2010 年度 KKF-X 発掘(3)



13. 7月29日、中庭4から壺下部出土  
(参照：3. 7月25日の壺上部)



14. 7月29日、紡錘車出土



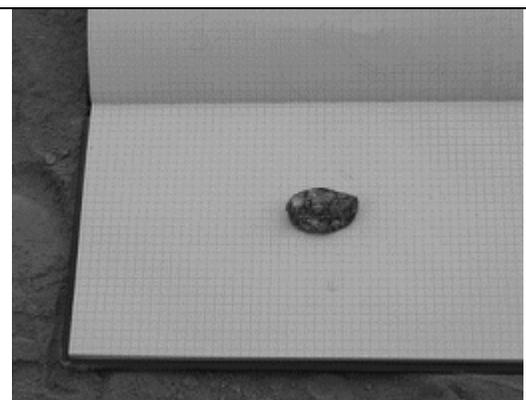
15. 7月29日、部屋5南東隅壺の横、  
ガラス製装飾品出土 (遺物：図28参照)



16. 7月29日、部屋5南東隅壺の横、  
紡錘車出土



17. 7月29日、博物館研究員ホジ君

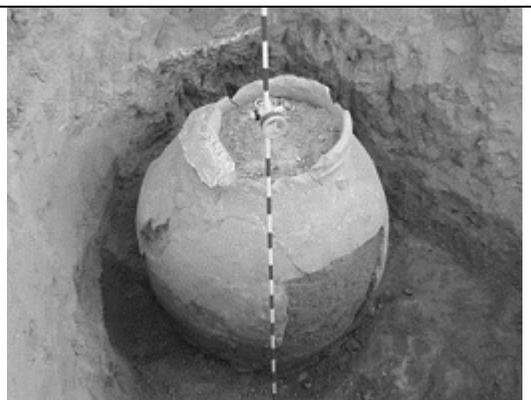


18. 7月29日、部屋6北西隅壺 (発掘  
図22) から、指輪の断片出土

2010 年度 KKF-X 発掘 (4)



19. 7月29日、羊の角出土 (遺物: 図29 参照)



20. 7月29日、部屋5の南東壁隅の壺 (発掘: 図12 参照)



21. 7月29日、部屋6北東隅から壺2個が出土する。



22. 7月29日、右の壺から金属製品と指輪の断片を検出 (遺物17・19)



23. 7月31日、部屋6北東隅の壺2個の下から煉瓦 (30×30×10) が出土。

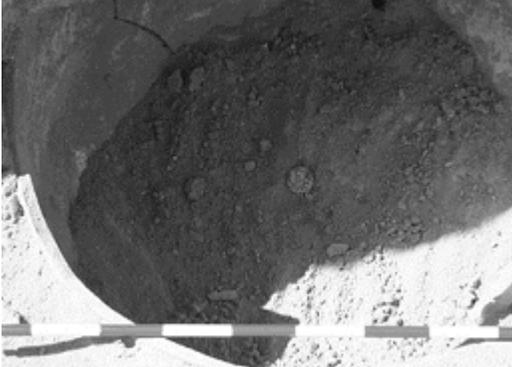


24. 7月31日、部屋6北東隅の壺2個を取り上げ、さらに掘り下げる。

2010年度 KKF-X 発掘(5)

	
<p>25. 7月31日、部屋6北東隅の壺2個の下からパイプ状遺物出土。</p>	<p>26. 7月31日、庭3、部屋6東壁際からコイン出土。</p>
	
<p>27. 7月31日、手前の庭3と発掘領域の北の奥側の庭4を撮影</p>	<p>28. 8月1日、庭4からコイン出土、(遺物22参照)</p>
	
<p>29. 8月1日、部屋5より紡錘車出土 (遺物14参照)</p>	<p>30. 8月2日、庭3よりテラコッタ断片出土 (遺物3参照)</p>

2010 年度 KKF-X 発掘(6)

	
<p>3 1. 8月1日、庭4よりコイン出土 (遺物23参照)</p>	<p>3 2. 8月1日、部屋5より水差し出土 (遺物25参照)</p>
	
<p>3 3. 8月1日、庭4と部屋5北壁下の甕 の中、コイン出土 (遺物24参照)</p>	<p>3 4. 8月1日、庭3西側壁付近より琵琶 を弾く楽士像出土 (遺物4参照)</p>
	
<p>3 5. 8月1日、庭4で開口部が壊れた甕 を取り上げる。</p>	<p>3 6. 8月2日、庭4東からコイン出土 (遺物：図25参照)</p>

2010 年度 KKF-X 発掘 (7)



37. 8月2日、庭4、臼（石臼の上に漆喰で壺状に成形）（発掘：図2参照）



38. 8月2日、庭3で検出した、角度の異なる古層の遺構が出土。

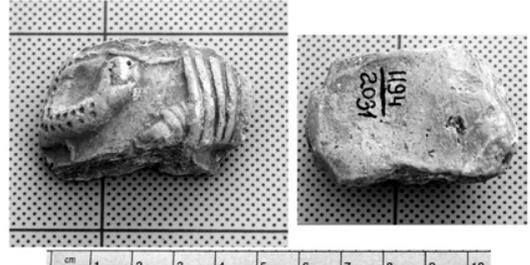
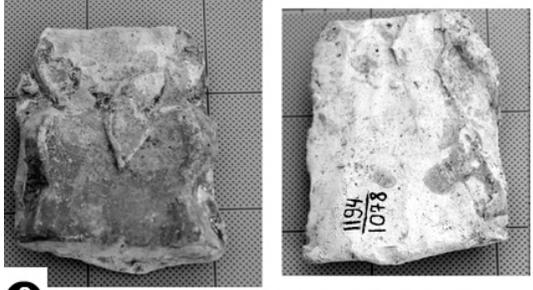


39. 8月2日、庭3、角度の異なる遺構は庭4の壁の一部と同角度である。

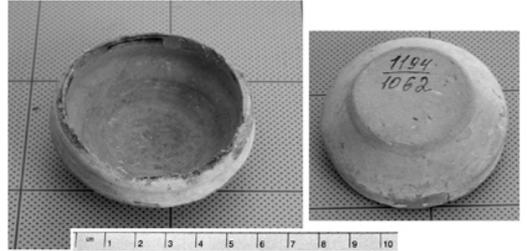
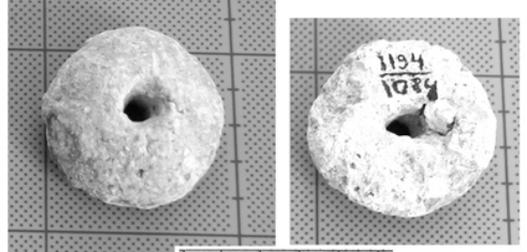
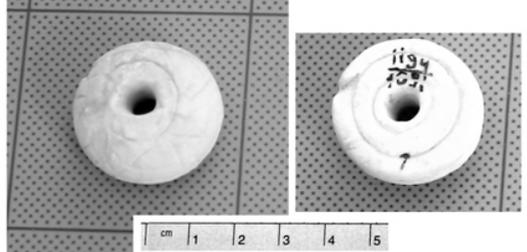


40. 8月2日、庭3、角度の異なる遺構は庭4の壁の一部と同角度である。

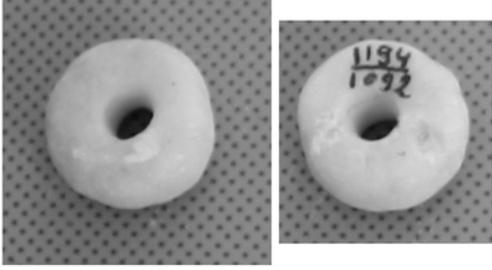
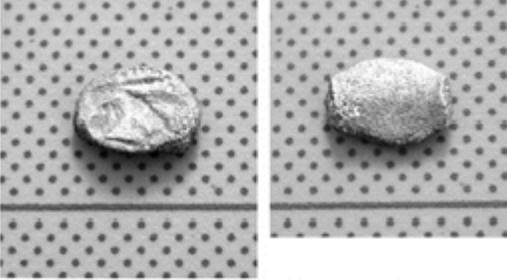
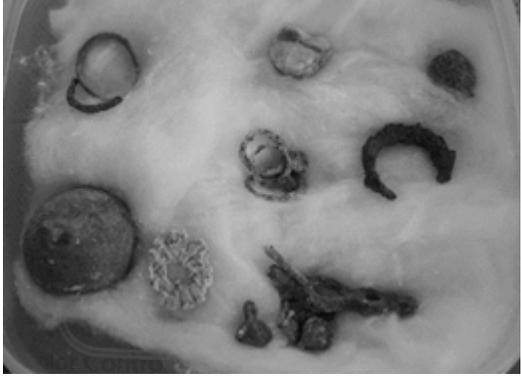
2010 年度 遺物 (1)

 <p>6</p>	 <p>8</p>
<p>1. テラコッタ、像の断片 [KII : 1194-2001]</p>	<p>2. テラコッタ、人物像の断片 (7×4,2×1.5cm) [KII : 1194-2005]</p>
 <p>23</p>	 <p>27</p>
<p>3. テラコッタ、獅子? (8.2×8.8×4.2cm) [KII : 1194-2020]</p>	<p>4. テラコッタ、琵琶を弾く楽士 (10.2×3.4×3.7cm) [KII : 1194-2025]</p>
 <p>29</p>	 <p>2</p>
<p>5. テラコッタ、断片、人物の腕と胸部 (2.8×5×2cm) [KII : 1194-2031]</p>	<p>6. レリーフを施したブロック (10.4×11.9×4cm) [KII : 1194-1078]</p>

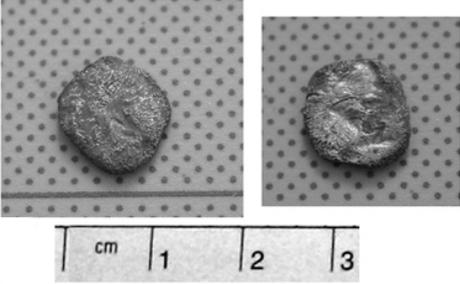
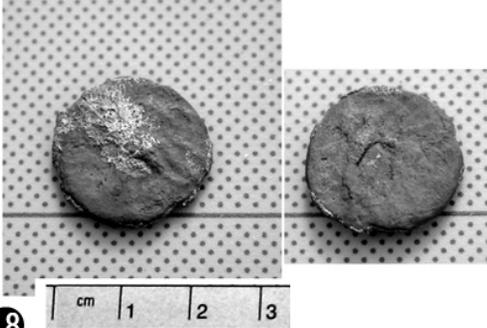
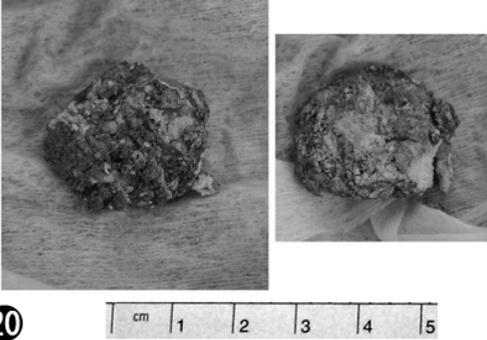
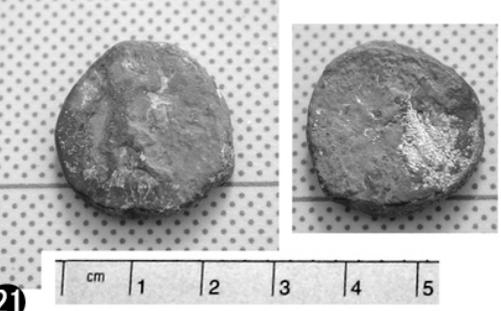
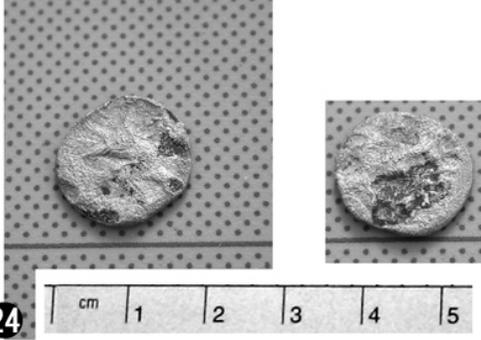
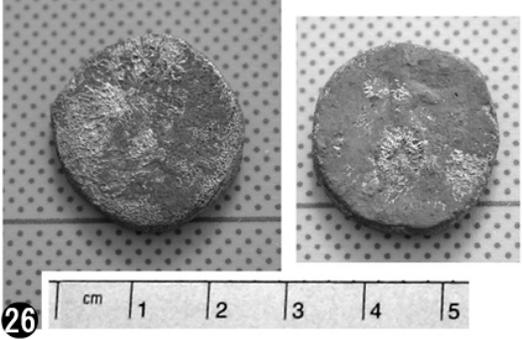
2010 年度 遺物 (2)

 <p><b>25</b></p>	
<p>7. 小水差し (6.3×3.2cm) [KΠ : 1194-2026]</p>	<p>8. 副葬品 (碗) ナウスAより出土 (×cm) [KΠ : 1194-1075]</p>
	
<p>9. 副葬品 (碗) ナウスAより出土 (2.6×6.8cm) [KΠ : 1194-1062]</p>	<p>10. 副葬品 (小水差し) ナウスA (9×3.4cm) [KΠ : 1194-1074]</p>
 <p><b>3</b></p>	 <p><b>5</b></p>
<p>11. 紡錘車 [KΠ : 1194-1084]</p>	<p>12. 紡錘車 [KΠ : 1194-1091]</p>

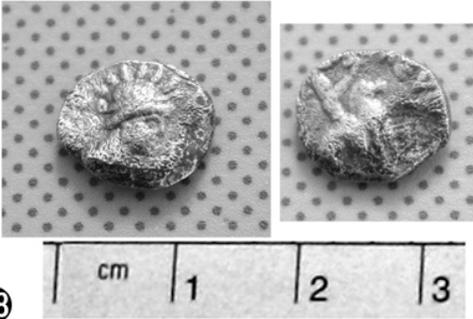
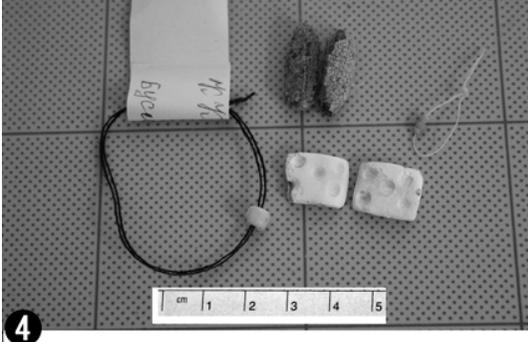
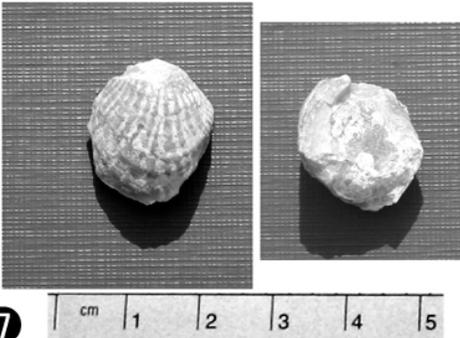
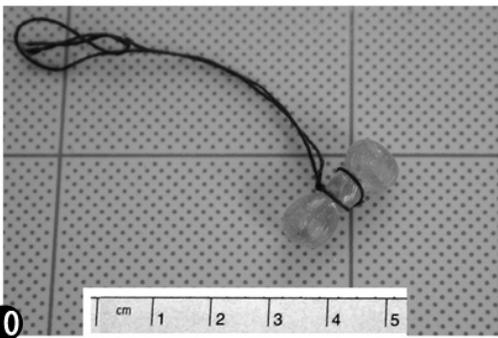
2010 年度 遺物 (3)

 <p>9</p>	 <p>22</p>
<p>13. 紡錘車 [KII : 1194-1092]</p>	<p>14. 紡錘車 [KII : 1194-2030]</p>
 <p>1</p>	 <p>12</p>
<p>15. 鈴の上部</p>	<p>16. 金属製ブレスレットの断片</p>
 <p>16</p>	
<p>17. 指輪の断片</p>	<p>18. 副葬品 (装飾具) ナウスAより出土</p>

2010 年度 遺物 (4)

 <p>17</p>	 <p>18</p>
<p>19. コイン</p>	<p>20. コイン</p>
 <p>20</p>	 <p>21</p>
<p>21. コイン</p>	<p>22. コイン</p>
 <p>24</p>	 <p>26</p>
<p>23. コイン</p>	<p>24. コイン</p>

2010 年度 遺物 (5)

 <p>28</p>	 <p>4</p>
<p>25. バクトリア・コイン (0.2×1.2cm)</p>	<p>26. 装身具</p>
 <p>7</p>	 <p>10</p>
<p>27. 装身具</p>	<p>28. 装身具 (ビーズ)</p>
 <p>15</p>	 <p>19</p>
<p>29. 羊角</p>	<p>30. 象牙管</p>

## 2011年度発掘調査

### 調査概要

2011年度はカラ・イ・カフィルニガン遺跡の南西にある丘状のエリア(チタデル・宮殿と見られている)の南西隅(KKF-XII)を新たに発掘した。ただし、丘のように見える南西部はKKF-XやKKF-XIとほぼ同じレベルであることが地形図作成の過程で判明している。

後に掲載した地形図からも明らかなように、遺跡の北西から丘状のエリアの手前にかけて緩やかな下り勾配となっている。したがって、手前の窪地のために相対的に丘状に見えるのである。このことから、KKF-XIIが宮殿に相当する遺構であるのか否かがあらためて問題となった。

2007年度から開始した地形図作成は要員確保が難しく、2年ほど休止していたが、2010年度からトータルステーションと自動コンタ計算ソフトを導入し、博物館研究員ホジ君の協力を得て今年度の調査で完成させることができた。

### 日程表

日曜	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜(休)	土曜
7/17 伊丹→成田 イスタンブール	7/18 ドシャンベ ホテル	7/19 現場へ エサンボイ村	7/20 発掘作業 地形図作成	7/21 発掘作業 地形図作成	7/22 測量データ 確認作業	7/23 発掘作業 地形図作成
7/24 発掘作業 地形図作成	7/25 発掘作業 地形図作成	7/26 発掘作業 地形図作成	7/27 発掘作業 地形図作成	7/28 発掘作業 地形図作成	7/29 データ整理	7/30 発掘作業 地形図作成
7/31 発掘作業 地形図作成	8/1 発掘作業 地形図作成	8/2 発掘作業 地形図作成	8/3 発掘作業 地形図作成	8/4 遺跡図化 調査終了	8/5 午前中荷造 移動	8/6 博物館で 遺物撮影
8/7 博物館で 遺物撮影	8/8 ドシャンベ→ イスタンブール	8/9 閑空着				

7月17日、5時に起床、昨晚は祇園の祭り囃子が下の松原通りを過ぎていった。身支度を済ませると阪急河原町駅へ急ぐ。いつも利用している地下道入り口は時間が早いのか閉鎖されている。高島屋まで行くと地下鉄入口が開いていた。五時半の梅田行き普通はかなりの人が乗っている。昨晚の宵山からの帰路のようである。若い男女の他にも年配の夫婦も混じっているようだ。時間が有ったので、ホーム端のトイレで用をたす。5時38分の普通梅田行きに乗る。伊丹空港は11番窓口で受け付けをしている。機械チェックインは国外線のゆえ実施していないようだ。

7月18日、ドシャンベ到着。午前3時すぎになっていた。手続きを済ませてロビーを出るとボボムロエフ館長が迎えに来ていた。現金で一万ドルを持っているので気がかりであったが、ひと安心である。一通りの挨拶をおえて、タジキスタンホテルへむかう。午前5時前後にフロントでチェックインを済ませる。18日と19日の二泊。一泊150ドルには恐れ入る。ただし、早朝に対応してくれるホテルはそう多くないので、安心料と考えるべきか。

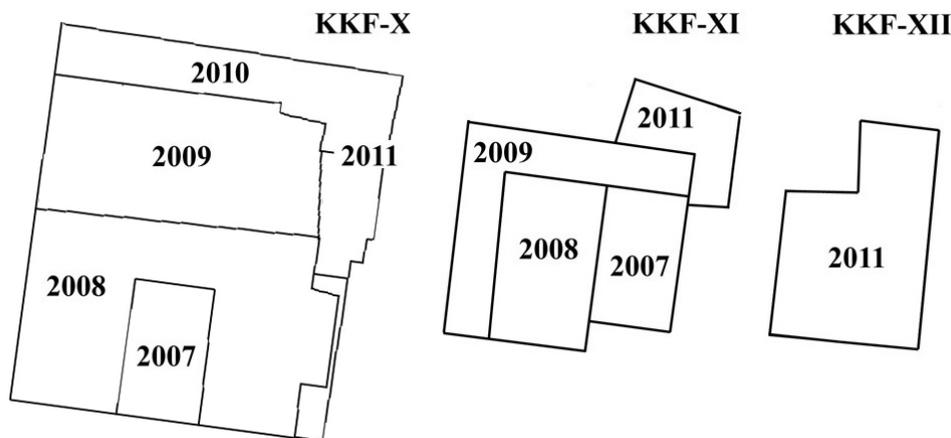
しばらく仮眠をとり、朝食を済ませ、11時頃にトルコ航空の事務所に出向いてリコンファームを

済ませる。去年、ヤヒヨ君に案内してもらったから今年は余裕である。ホテルから徒歩で10分程度である。これで帰りの便はOKだ。いつも連絡をとるのに苦労していたが、これだと確実である。少しばかり換金して店を見て回ると、赤チェブラーシカ(ソチ五輪の正式キャラクターだったと思う)があった。25ソモニのものを1個買う。

6時からボボムロエフ館長と夕食、其の前にSIMカードを買うとのことだったが、結局は彼のカードを借りることになる。できれば自前の物を手に入れたかったが、面倒な手続きが必要なようだ。50ソムニをチャージして受け取る。メールはこれで万全である。妻に連絡を入れておく。夕食はカバブとバルティカ7のビールとウツッカである。痛風の具合が心配ではあったが、せつかくだったので飲み食いする。ホテルへは歩いて帰ったが、そのままベッドに入って寝てしまったようだ。

## I 作業日誌

今年度の発掘範囲は以下の通り、KKF-XIは拡張せず、一部をさらに下層へと掘り下げた。



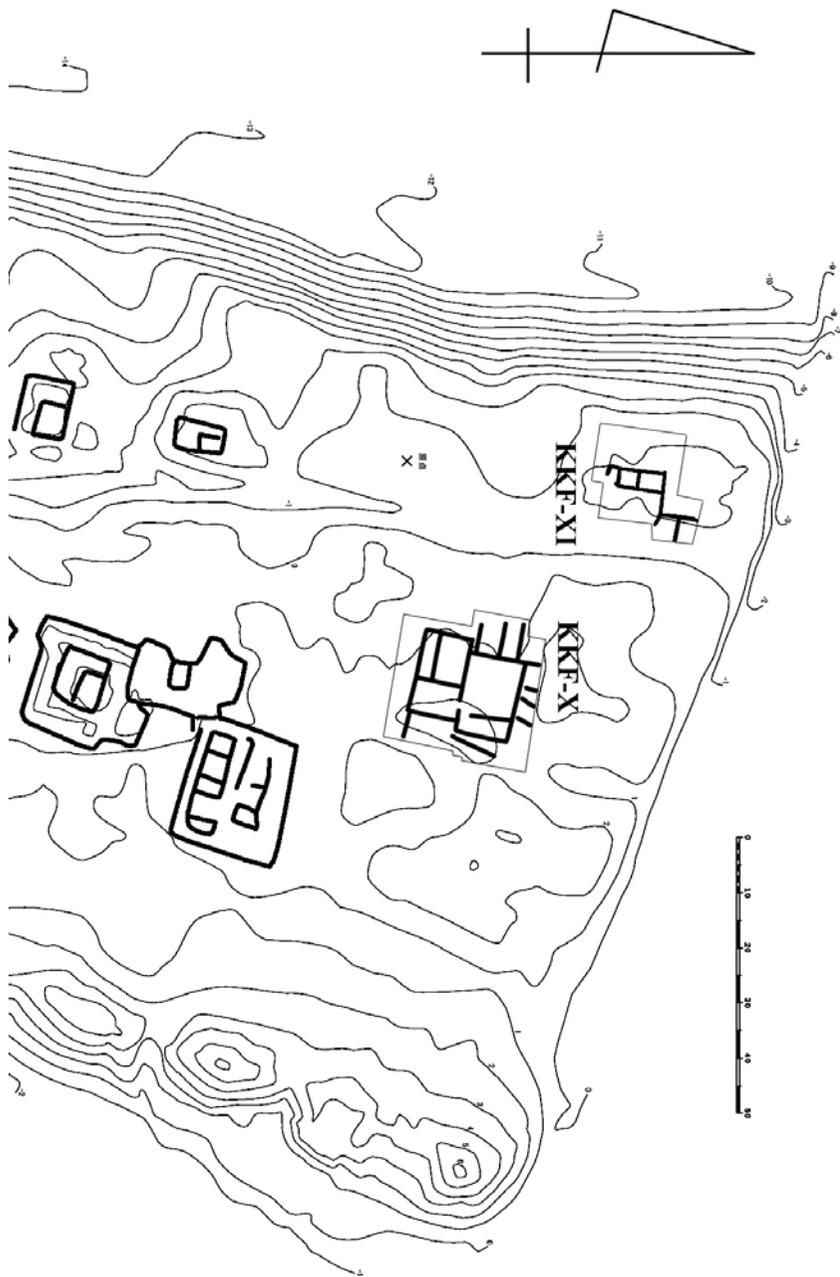
7月19日、5時起床。あれやこれやの充電を済ませて、準備をする。7時30分から朝食へ。明日からはエサンボイ暮らしである。しばらくは普通の食事ができないと思い、少し食べ過ぎてしまう。昨夜の酒のせいお腹具合が少々ゆるめで、行く前から腹を壊しては困ったものである。10時に迎えに来るということであったので、余裕をもってチェックアウトを済ませていると、9時半にはボボムロエフ館長がやって来る。すぐに荷物を積んで出発する。10時前後に郊外のバザールで食料品を買い込む。一行は、運転士のミルゾフ、ボボムロエフ館長、彼の三男マズド(アフラ・マズドのマズドだという)、それに蓮池の4名である。

12時にはエサンボイの借家に到着する。ボボ君、ヤヒヨ君、ホツジ君、それにサダフさんが迎えてくれる。今年度の調査は全員で7名の体制で実施のようである。午後5時から現場へ下見に行く。今年度から発掘するKKF-XIIでは、すでにかなり掘り下げているようで、まわりに廃土が積み上げられる前に、とにかく地形図を描いておきたい。KKFの原点とKKF-Xの2測点(発掘:図1、2)を確認することができた。鉄釘で設置した測点はなくなっているようである。

# カラ・イ・カフィルニガン遺跡地形図



等高線の間隔は 1 m



12時にはエサンボイの借家に到着する。ポボ君、ヤヒヨ君、ホッジ君、それにサダフさんが迎えてくれる。今年度の調査は全員で7名の体制で実施のようである。午後5時から現場へ下見に行く。今年度から発掘するKKF-XIIでは、すでにかなり掘り下げているようで(発掘:図45)、まわりに廃土が積み上げられる前に、とにかく地形図を描いておきたい。KKFの原点とKKF-Xの2測点を確認することができた。鉄釘で設置した測点はなくなっているようである。

午後8時頃から夕食、元区長コディルヴ・フジャンクルさんまでやってきてビールやコニャック(コーヒー味の代物)で二日連夜のアルコールである。困ったものだ。装備のチェックで、昨年預けていた一番重要な袋が来ていないことが分かった。白いザック地にトマト色の取手がある作業用バックで、トータルステーションとパソコンを接続する無線機、パソコンを持ち運ぶためのストラップなどを入れたものである。昨年帰るときにも念を押して預け、ロッカーに保管してもらった分である。ロッカーの品物の点検を忘れたものと考えられるが、今すぐどうにか出来るものでもない。しばらくはケーブルでつないで有線測定することになりそうである。電子平板を起動してKKFの原点と他3点の値を入力して明日の準備とする。

7月20日、5時起床。食事を済ませ、6時には現場へ移動する。機械の設定はホジ君にやってもらう。(発掘:図3、4、5)昨年でも手伝ってもらったので、要領は覚えているようである。以下の測点をKKF原点( $x=0, y=0, z=0$ )から測定し、地形図作成の準備作業を行う。

150メートルほど離れた遺跡南西地点にKKF-XIIの基準点を設置する。レベルとしてはKKF原点より1メートル高いだけである。

KKF-XII zero( $x=-133.377, y=-52.456, z=0.910$ )

この基準点からKKF-XIIの南側に機械点KKF-XII-T0を設置する。

KKF-XII-T0( $x=-155.734, y=-63.681, z=1.658$ )から、KKF-XIIのアウトライン(東西5m×南北10m)を描き、その後、周辺の地形の測量を開始する。午前は6時30分から9時15分まで、午後は17時20分から17時50分まで、丘状エリアの地形とリトヴィンスキー発掘部分の測定を実施する。並行して地形測量では測点1から測点220までを観測する。

7月21日、5時起床、6時から作業開始。KKF-Xで拡張部分のアウトラインを記入する。一昨年の機械点(西側中央部)を発見したので、以下の測点として観測する。

pt\_24( $x=11.841, y=28.474, z=0.325$ )

午前7時すぎにKKF-XIIへ移動、KKF-XII-T0に機械点を設置し、発掘の図化作業を行う。東西5メートル、南北10メートルの試掘溝で壁の遺構が検出されている。試掘溝南端から3m、東西に伸びる壁遺構と試掘溝北西端の日干し煉瓦遺構を図化する。その後、午前9時から10時まで、丘状エリア北東側斜面の測量、午後は17時30分から18時15分まで、丘状エリア北東谷部周辺の地形を測量する。測点221から測点535までを観測する。午後の発掘でKKF-X、庭3の南東隅付近から宝冠を付けた菩薩像らしきテラコッタが出土する。出土地点は明後日に測定することになるが、なんとも残念な感がする。遺物の取り上げ前の記録が行われていない。

7月22日、休日、バザールにも出かけず、機材の点検及び、休養日に充てる。

7月23日、5時起床、6時に作業開始。KKF-XIに機械設置。一昨日出土のテラコッタと紡錘車の出土場所の測定を行う。昨年の発掘作業でかなり深い床面まで下がっていて、プリズムターゲットの高さ1メートルでは測定できない。50cmのポールとコンベックスで50cmを継ぎ足して観測する。したがって測定値を-1メートル修正する必要がある。

KKF-X

出土番号01:テラコッタ菩薩像? [KII : 1194-2011](遺物:図1)、出土番号02:紡錘車  
午前7時半、KKF-XIIIに移動して待機(発掘:図47、48、49、50)、南東隅より木片出土。

KKF-X II

出土番号03:木製品(発掘:図46)

土器数点が出土しているとの連絡があり、KKF-XIへ移動する。KKF-XIの昨年の機械点は結局なくなっており、KKF\_0点とKKF-Xの機械点をもとに、北東位置に機械点を新設し、昨年までの外郭線を作図する。測点移動を繰り返したため、時間がかかってしまう。

午前10時10分頃、写真撮影(発掘:図13、14)と出土地点の測定を行う。

KKF-XI

出土番号04:土器(発掘:図15)、

出土番号05:土器 [KII : 1194-2083](発掘:図16、遺物:図44)、

出土番号06:土器(発掘:図17)、出土番号07:土器(発掘:図18)、

出土番号08:土器[KII : 1194-2074](発掘:図19、遺物:図43)

午前の地形測量は発掘状況を記録するために実施できなかった。午後には、KKF-原点(x、y、z=0)を手入力して、昨年度測定範囲に続く南側領域を測定する。17時30分から18時30分まで、測点538から761まで観測する。

明日、早朝にボボ君がドシャンベへ一旦戻ると言うことで、無線機器をいれた袋を持ってくるように依頼する。京都の瀬田研究部にテラコッタ画像を送信し、理工学部の岡田教授のメールアドレスを訊ねた。出土したテラコッタの画像資料からレプリカが作成できないかを相談しようと考えたからである。

7月24日、5時起床、朝食前にボボ君はドシャンベへ帰る。6時に作業開始。KKF-XIIの機械点T0Iに設置する。6時40分、KKF-XIIの第一次拡張部分(東へ5m×10m)を描き、これまでの発掘状況を作図する。その後、8時30分から9時20分まで、KKF\_0点の南部分の地形測量、丘状エリア北東部分まで、測点762から測点907までを観測する。

10時10分、再度KKF-XIIで第二次拡張部分(北へ5m×5m)を作図する。

午後にはKKF-T0を機械点として、チェックするためにKKF原点を視準する。

観測値は、x=0.05、y=-0.073、z=-0.011となり、X軸では5cm、Y軸では7cm、Z軸では1.1cmのずれがあった。念のために、KKF-XIIの原点をチェックするが、この測点での誤

差はでなかった。おそらく、KKF-XII-T0を設置するときに正しくセッティングができていなかったと考えられる。したがって、地形測量ではこの機械点を使用せず、KKF12の遺跡平面図作成に限りて使用することにする。

午後は誤差の解析の為、地形測量は実施できなかった。

7月25日、5時起床、朝食前にマズド君がいなくなっている。ドシャンベへ帰ったとのことである。KKF-XIIに機械点KKF-XII-T3を設置する。発掘範囲の拡張によって観測しにくい場所が出てきたためである。その後、6時50分から9時30分まで、遺跡南東部分、およびリトビンスキー発掘跡の計測を行う。午後17時30分から18時10分まで、同じ領域を地形測量する。

測点は908から1409までとなる。

終了間際、KKF-XIから象牙の遺物などが出たので、計測して欲しいとの連絡があり、KKF-XIへ移動する。新設の機械点は拡張のためなくなっており、新たに第二次の機械点をKKF-XI南東に設置すしなければならなかった。4点の文物は一か所から出土したということで、一点だけを計測する。撮影時刻、18時50分頃。

KKF-XI

出土番号09a:象牙管 [KII : 2048-2011](発掘:図20、遺物:図30)、

出土番号09b:土器杯(発掘:図21)、

出土番号09c:土器片(発掘:図22)、出土番号09d:紡錘車(発掘:図23)

7月26日、5時起床、午前は6時30分から10時まで、午後は17時30分から18時40分まで、地形測量を行う。昨年までの地形図と結合するための領域と東側城壁部分の斜面を計測する。午後は南東部斜面を計測する。昨年までの測量と合わせ、遺跡東を通る道路に沿った領域の測量が完了する。斜面を横断するようにして測点を置いていく作業では、時として滑落の危険もあり、足に負担がかかる。痛風病みの蓮池としては、つらい作業である。午後には役割を交代して、蓮池は機械操作を、ホジ君にはターゲット持ちをやってもらうことにする。ホジ君はすぐに要領を得て、順調に計測をすすめることができた。

7月27日、5時起床、午前は6時20分から10時30分まで、丘状エリア北西斜面の地形測量を行う。崖面でかなり急な斜面であり、用心しながら計測する。特に、北西隅の崖面は入り組んでいて、測点を確保するのに苦労する。足場に注意しながら作業しなければならなかった。昼過ぎにはマズド君が戻ってきており、無線機器も揃うことになる。午後は17時30分から18時20分まで、丘状エリア南西の斜面の地形測量を行う。昨日と同様、ホジ君にターゲット持ちをやってもらう。

日中はかなりの暑さになり、ホジ君もだいぶ疲れてきているようである。

7月28日、5時起床、昨日来た無線機器をつなぎ、パソコンを専用ホルダーで装着し、地形測量が楽に実施できるようになる。午前6時30分から、遺跡中央部分の測量を行うが、7時で中断さ

せられる。KKF-XIIで壁遺構を一部撤去したいので記録してほしいとの要請がある。7時20分から30分ほど、日干し煉瓦と礎石の図化(発掘:図51、52)を行なう。その後、KKF-XIで拡張部分(発掘:図24)を図化するために移動する。KKF-XIの北東隅に南北7m・東西8mの拡張部分を記録する。9時には、KKF-XIからコイン1個、9時45分には小型壺が出土する。出土地点測量と写真撮影を行う。ただし、コインは後日撮影。

KKF-XI

出土番号10:コイン(遺物:図21)、出土番号11:小型壺 [KII:1194-2099](遺物:図49)

出土番号12:テラコッタ断片(神像)[KII:1194-2045](遺物:図25)

午後は17時30分から18時30分まで、地形測量を継続する。遺跡中央部分とリトヴィンスキー発掘部分の図化を行なう。

7月29日、休日、バザールで材料を購入する。ターンテーブルの工作用にノコギリ等を探す。粘土の代用として台所用品のスポンジを購入する。自動レベルの上にプラスチック筒を接着し、スポンジを加工して資料の台座を作る。資料が倒れて損傷しないように、厚みをつけ、カッターで切り込みを入れて、資料を固定できるように工夫する。自動レベルには360度の目盛りが刻まれており、正確に角度を設定できる。岡田理工学部教授の指示にある15度ごとの写真を撮影するには支障がない。特別な撮影に使用するダンボール片とLED懐中電灯もバザールで入手できた。ただし、LED照明を30cmの距離で、15度、45度の角度で照らすことについては、満足できる設定はできなかった。一人で撮影し、十分な機材もない中、致し方ないことである。

携帯電話のEメールが使えなくなる。ポボムロエフ館長から借りたSIMカードの50ソムニが尽きたようだ。ヤヒヨ君に連絡してもらって、ポボムロエフ館長のSIMカードに50ソムニをチャージするようにポボ君に依頼する。

7月30日、5時起床、6時よりKKF-XI遺構の図化作業を行う。8時ころから、KKF-XI北東隅部屋5の礎石と炉、および日干し煉瓦のソファーを図化する。(発掘:図26、27)部屋4の南側壁を撤去するにあたって、図化記録する。8時30分から8時40分まで、壁遺構と入り口の遺構を図化する。機械点からは高さ1mのターゲットが視準できないので、1mのポールを付け足しての計測となる。

wl\_a、wl\_b、entrance、以上の測定値は、[実測値-1.0]となる。

二重壁遺構:(発掘:図28)

昼過ぎにはポボ君が戻ってくる。SIMカードの追加料金、50ソムニを支払う。メールを多用するには一月あたり100ソムニほどは必要なのである。

午後、KKF-Xの図化作業(発掘:図7、8、9、10、11、12)を行う。17時20分から18時まで、石組みの遺構を図化するが、全てを描くのは断念する。

7月31日、5時起床、6時よりKKF-XIIで図化作業を行う。6時30分から7時10分まで、礎石を中

心に図化を進める。KKF-XIで龕(ニッチ)が見つかったとの連絡があり、移動する。

部屋6の東側壁中央に幅65cm、奥行き75cmほどの龕(ニッチ)が検出されており、鉄製のスコップ状遺物が見える。

KKF-XI・部屋6・龕(ニッチ)(発掘;図29、31、32)

午後、17時15分から17時40分まで、KKF-XIIで図化作業を継続する。壁遺構を中心に図化。

夕食後、明日からラマザンに入るがどうするかとの話があった。運転手のミルゾフ氏は篤信のムスリムであり、断食をしたいということであった。ポボムロエフ館長も断食をするとのことで、蓮池はどうするか、異教徒だから無理に断食することもない、とのやりとりがあった。仏教の修行にも断食はあると強がりを言って、断食に参加すると宣言してしまった。

8月1日、ラマザン月に入る。午前2時半頃、湯を沸かし食卓が用意されている。ポボムロエフ館長とミルゾフ氏が起き出してお茶とナンを食べている。蓮池も軽く食事をして、それからどうするかと見ていると、また就寝する。しかし、その時間からあとは何も口にはいけない。日没まで我慢して、さらに八時半まで我慢して、それでやっと夕食である。日に二回の食事の間、つまり夜間は何回でも物を食べていいということではあるが、そんなに食べられるものでもない。

5時起床、朝食はなし、手持無沙汰で6時には現場に移動する。KKF-XIIで図化作業を始めるが、KKF-XIで出土品が見つかり、そちらへ移動する。KKF-XI・部屋6の南端から数点の遺物が出土する。いずれも機械点から視準するのが困難な位置であり、メジャで0.5mを足して計測する。

KKF-XI

出土番号13:土器製台座部分[KII:1194-2033](発掘:図33、遺物:図54)

出土番号14:テラコッタ人物像[KII:1194-20101](発掘:図34、遺物:図26)

出土番号15:ビーズ(発掘:図35、遺物:図31)、出土番号16:貴石(発掘:図36)

出土番号17:装飾紡錘車[KII:1194-345](遺物:図18)

出土番号18:土器片[KII:1194-2086](遺物:図60)

出土番号19:土器基部[KII:1194-2095](遺物:図65)

結局、ラマザンはこの日一日は継続した。しかし、断食の間じっとしているわけではなく、発掘調査を続けるわけで、50度前後の炎天下ではすぐに干上がってしまう。自覚症状として体温が高くなっていくことも分かるし、気力もなくなってぐったりしてしまう。痛風持ちの蓮池としては、このまま続けるのは危険だと思っていたが、タジキスタンの研究員たちや発掘の作業員たちも参っているようで、トレンチの底の日陰で横になったままで仕事にはならない。

夕食後、断食は一日だけであとは普段と同じ生活に戻すということになった。作業員たちはそのまま断食を続けるものもいるが、それは認めざるを得ないということであった。

やれやれという思いではあったが、同時にイスラーム信仰の本質もなんとなく分かったような気がした。それは、神の指示のまま、空腹と渇きの中で、人間の能力のちっぽけさを実感し、神の奴隷として生きていることを確認することである。そして、一か月を耐えてその空腹と渇きから

解放された時、神の赦しを喜ぶ。神の指示のままに生きることができれば、それは神の審判にかなうことになるわけだ。

のどの渇きをいやすため、お茶をたくさん飲んで就寝。夜中に何度かトイレへ行く羽目になる。

8月2日、5時起床、食事。6時よりKKF-XIIの図化作業を行う。7時に灯明皿(チラク)、8時40分にマジマル、10時頃にコインと灯明皿(チラク)が出土する。

KKF-XII

出土番号20: 灯明皿(チラク) [KII : 1194-20115](発掘: 図53、遺物: 図75)

出土番号21: マジマル [KII : 1194-20117](発掘: 図54、遺物: 図69)

出土番号22: コイン(発掘: 図55、遺物: 図22)

出土番号23: 灯明皿(チラク) [KII : 1194-20113](発掘: 図23、遺物: 図68)

午後は17時53分まで図化作業を行う。

8月3日、5時起床、6時よりKKF-XIIにおいて部屋6周辺の図化作業を行う。部屋6の西側壁面には日干しレンガが明瞭に保存されている。厚さ11cm、長さ34cmで五層になっているのが確認できる(発掘: 図40、42)。部屋の南には幅85cmの入口があり(発掘: 図41)、部屋1への通路となっていたと考えられる。7時に部屋6の東側で三脚の金属製小容器(発掘: 図24、25)が出土する。

KKF-XI

出土番号24: 金属製容器(遺物: 図80)

9時にKKF-XIIへ移動し、図化作業(発掘: 図57、58、59、60)を行う。午後もKKF-XIIの図化作業を継続する。すでに数点の遺物が出土しており、土器のカップ、石製円盤、紡錘車などの出土地点を記録する。

KKF-XII

出土番号25: <22: 土器カップ [KII : 1194-20121](遺物: 図79)

出土番号26: <26: 紡錘車 [KII : 1194-20114](遺物: 図74)

出土番号27: <23: 石製円盤 [KII : 1194-20122](遺物: 図76)

日干しレンガ、パフサの壁と床を作図するが、輪郭が壊れているものもあり、全てを正確に描くことは困難である。平面図にはその旨を注記している。最後に、床や壁のレベルを記録して、18時10分に作図作業を終了する。宿舎に戻る途中で区長さんの家にスコップ・ツルハシなどの器材を預ける。

8月4日、5時起床、午前中は出土遺物の撮影を行う。機材の清掃と収納作業。午後は撮影済みの写真をコンパクトフラッシュに記録してボボムロエフ館長に提出。ビデオのファイルもSDカードで引き渡す。電子平板のデータはPDFファイルの形式に変換してKKF-X、KKF-XI、KKF-XII、及び遺跡地形図として提出する。

8月5日、7時起床、朝食後、荷造りを開始する。ロシア製のジープには後部座席とトランク、さらに車上部荷台に家財道具と調査機材が満載される。ミルゾフ氏とボボムロエフ館長はジープに乗り、ヤヒヨ君とサダフさん、ホジ君それに蓮池はバザールで拾ってきた乗り合いタクシーに便乗する。

10時前後には宿舎を出発する。途中何か所かで停車しながら、ドシャンベ市内に入るが、途中の路上でガソリンを量り売りしているのに何度も出合った。ガソリンが高騰しているとのことで、そのような商売も成り立っているようである。市内の住宅地でサダフさんが下車、残り3人も戦車がある記念碑の近くで下車して、徒歩で博物館へ向かう。博物館にはジープが到着しており、収蔵庫への器材の搬入に立ち会う。来年までそのまま放っておかれるのだろう。掃除も調整もなしに……。無線機材はヤヒヨ君に責任を持って預かってもらうことにする。一通りの作業が終わって、ミルゾフ氏とボボムロエフ館長と一緒に食事に出かけるが、ラマザン中というのでメニューも限られている。しかし、バルチカ7ビールと地ワットカを飲みながら、カバブを食べる。食後、空港へ向かう路線沿いのアパート、A. ドニシュ通り15の第2棟13号室に落ち着く。久しぶりの温かいシャワーを浴び、調査中の汚れを落とすことができた。ミネラルウォーター5リッターを1本とガス入り水1.5リッターを2本、コーラを1本差し入れてもらう。後は近くの食料品店で好きなものを買って、3日分の食糧とする。

夕方、住民調査に警官がやって来る。携帯電話でボボムロエフ館長に連絡して、電話口で話をしてもらう。そうこうしているうちに、ボボ君とボボムロエフ館長が駆けつけてくれた。それでこと無きをえたが、空港へ向かう路線に面しているということで、セキュリティ一面でのチェックが厳しいとのことである。こんなときには、携帯電話がなければ途方に暮れてしまうだろう。

8月6日、午前中にタジキスタンホテル周辺の土産物店をのぞく。大統領府前のツウムで物色していると、骨董屋の店先にチェブのバッジ類が置いてある。1個20ソムニは少々高いとは思ったが、5個ほど選り出して購入する。先日の赤チェブの店では2体(@25ソムニ)を追加購入する。往復の足は白タクの8番で、1回の乗車あたり3ソムニである。夕方は、日本大使館の小松氏と会食する。韓国料理のアリランで6時から約2時間食事をする。ヤヒヨ君も同席する。

大使館員とジャイカ隊員も参加して10人ほどの会食であった。ビールをかなり飲んだので、痛風が気がかりだったが、アパートまで送ってもらうとあとは良く覚えていない。ただ、小松氏の運転手がアドブル？という名前で、2005年のイシュカシム調査に同行していた運転手であることが判り、感慨深いものがあった。久しぶりに、メフラニー氏やナザロフ将軍の名前も記憶の底から蘇ったものである。

8月7日、今日も土産物を買うつもりで市街地に出ると日曜日で閉店である。早々に帰宅し、アパート付近の店をのぞいているとワニのゲーナのぬいぐるみが30ソムニで出ている。

る。迷った挙句、購入する。ヤヒヨ君の訪問、ボボムロエフ館長の娘と共に6時頃にやってくる。日本に留学している女性に届けてくれるようにと、ナン五個とヒマワリの種を託される。夜、ボボムロエフ館長から電話があり、3時前に迎えにくるとの確認。

8月8日、午前3時にボボムロエフ館長が迎えに来る。車があるのかと思っていると、表通りまでスーツケースを運んで行く。タクシーを拾うのか？こんな時間に拾えるのか？と思ったが、空港への一本道だからだろう、すぐに乗り合いで乗ることができた。空港までは10分ともかからない。ボボムロエフ館長直々、空港入り口まで荷物を運んでくれる。ボボ君は急遽エサンボイに出かけた？というようなことを言っていたから、そのかわりに付き合ってくれたのだろう。エサンボイでなにがあったかも気になるが、来年の再開を期して別れる。空港では荷物の追加料金を支払わされたが、なにやら胡散臭い顛末だった。来年はトータルステーションは機内持ち込みにすべきか？そのようなことも考えた次第である。その後はいつもの通りの帰路であった。

## II 遺跡

### トハーラ期遺構

#### 1) KKF-X

各部屋の特徴については2009年度の記録を参照してほしい。2011年度の調査では庭3、庭4、さらに部屋7と部屋8の拡張部分を発掘した。

7月21日、午後、庭3の南東隅付近でテラコッタを検出する。宝冠を戴く菩薩の姿にも見える。右手に何かを掲げているのは判断できるが左手は不明瞭。

#### 2) KKF-X I

部屋2、部屋4と拡張部分（部屋5、部屋6、部屋7）を発掘した。部屋3は2011年度発掘で日干し煉瓦も全て取り上げたので（部屋3）と表記している。

#### 3) KKF-X I I

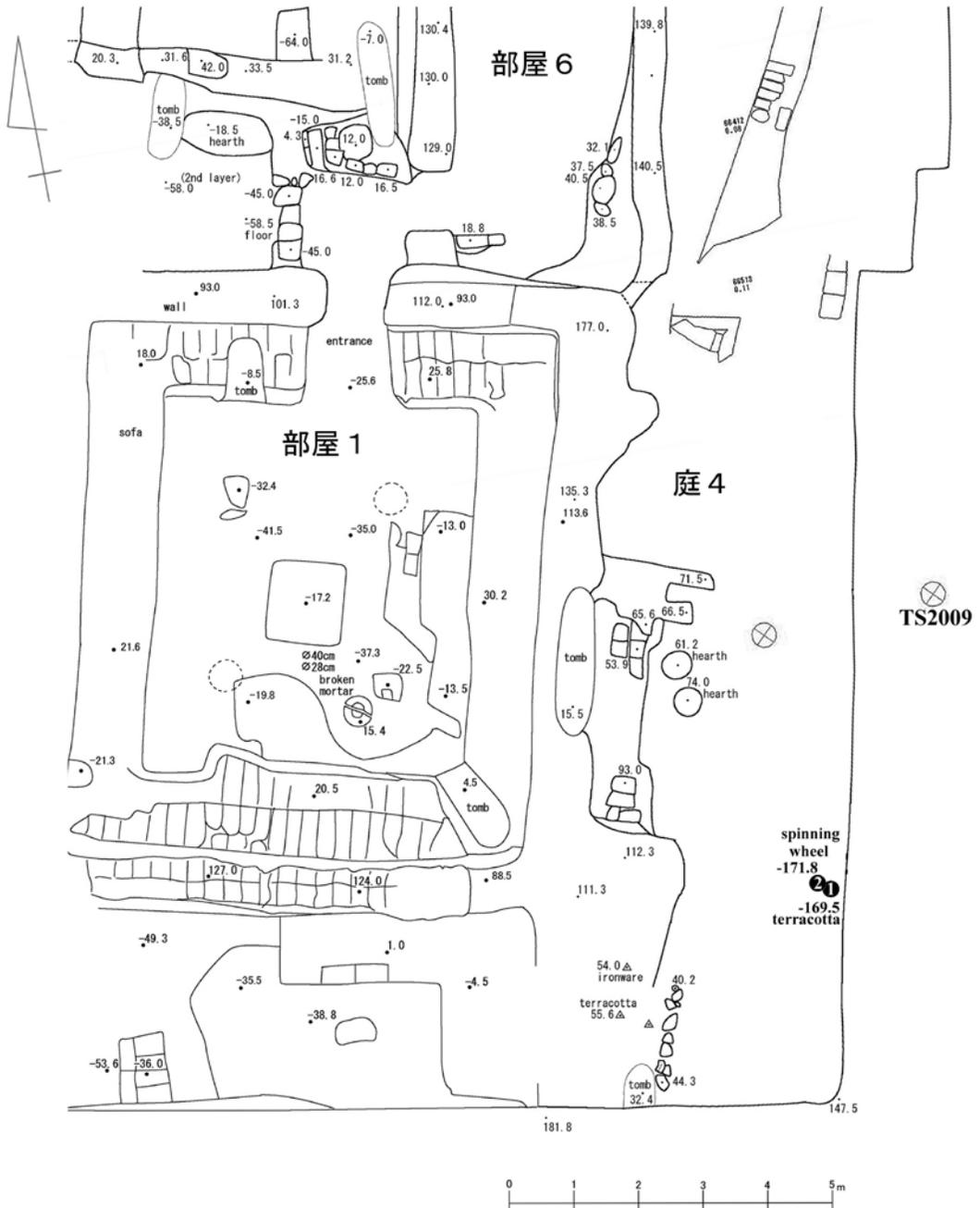
部屋を仕切る壁は検出できているが、2011年度ではまだ部屋番号を割り当てていない。

## III 遺物

2011年度の調査は3ヶ所にわたり、さらに地形図を完成するための測量を並行して実施したために十分な記録を残すことができなかった。各発掘現場から重要な遺物が見つかるたびに要請を受けて機材を移動する必要があった。

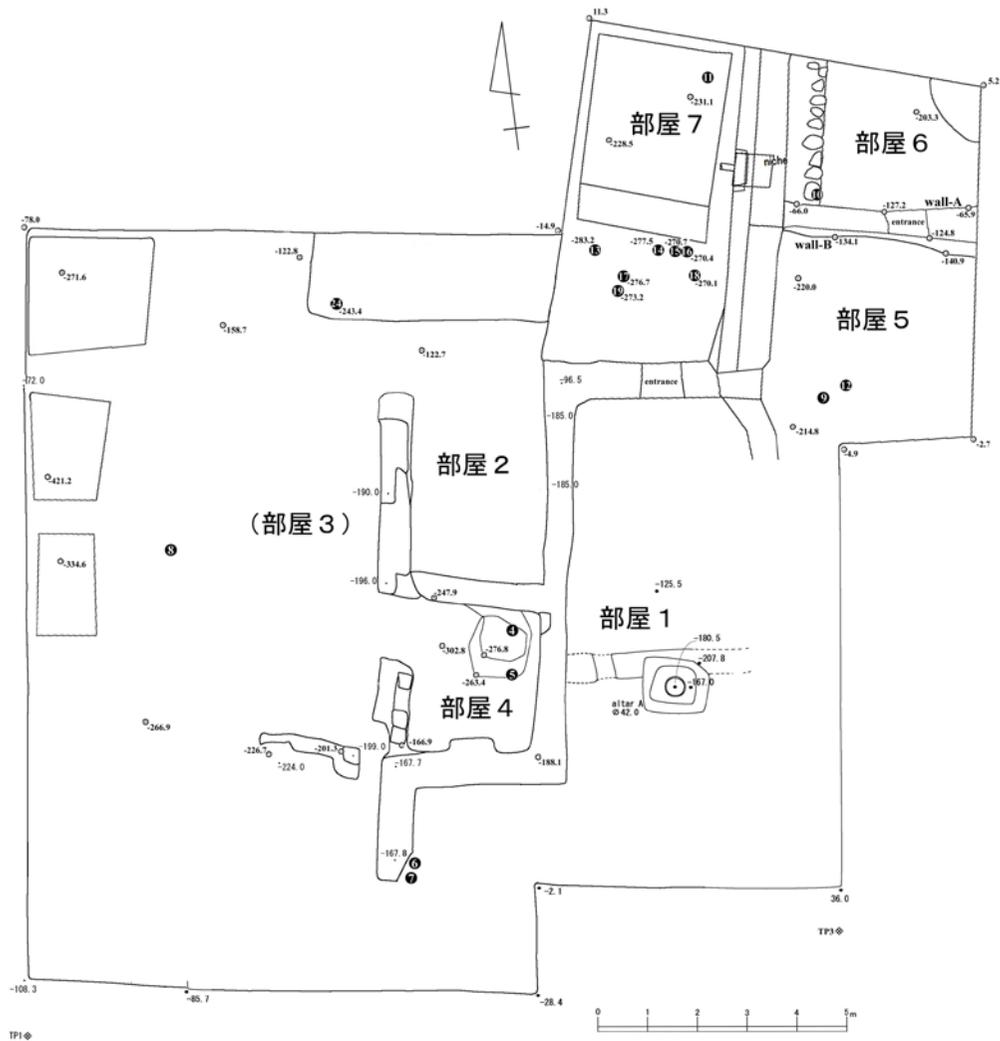
それぞれの平面図の上に出土場所を書き込んだ遺物出土位置を以下のページに掲載する。黒丸に白抜き数字が出土順（2011年度発掘における出土した順番）である。その横に付記したのはレベルである。単位はcmで表している。

2011 年度 KKF-X 遺物出土位置



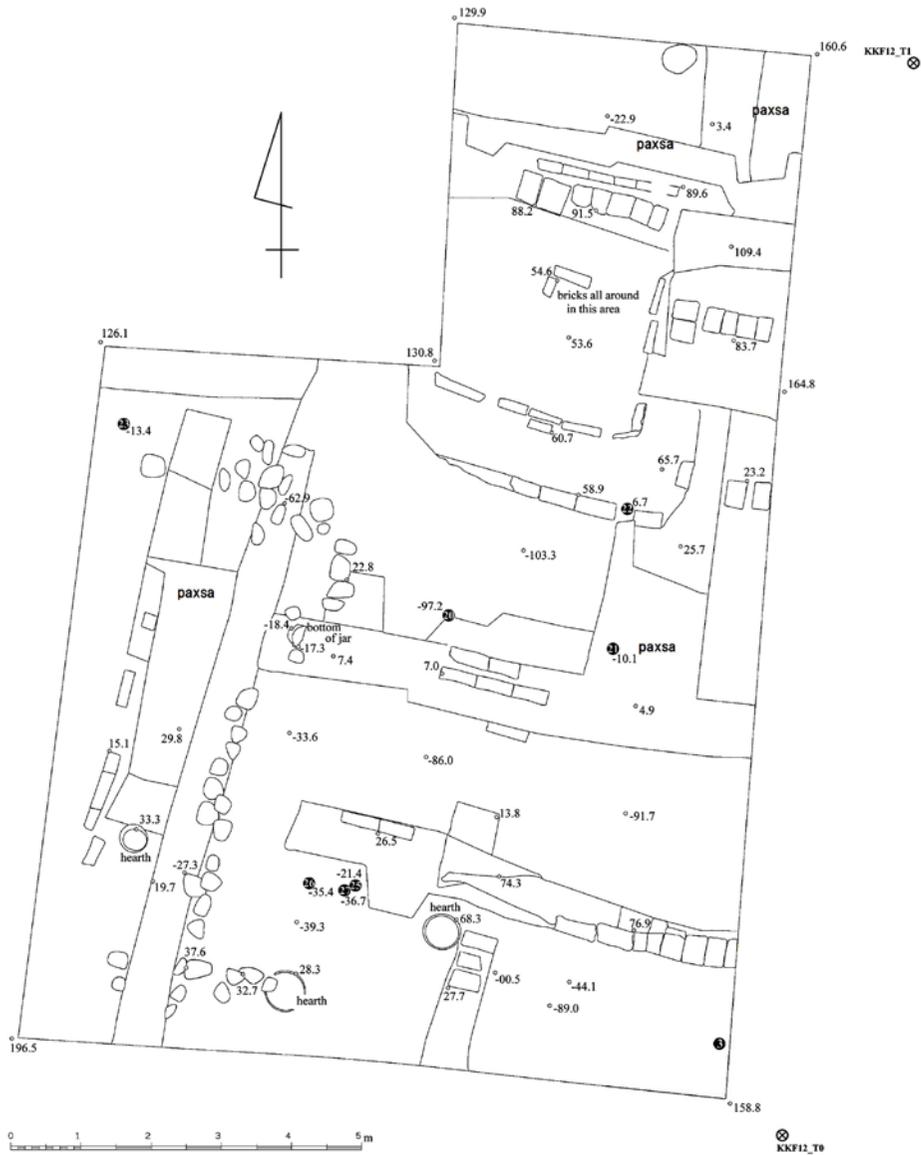
- 1: テラコッタ菩薩像? [KII : 1194-2011] (遺物: 図1)、  
 2: 紡錘車

2011年度 KKF-XI 遺物出土位置



4:土器(発掘:図15)、5:土器[KII:1194-2083](発掘:図16、遺物:図44)、6:土器(発掘:図17)、7:土器(発掘:図18)、8:土器[KII:1194-2074](発掘:図19、遺物:図43)、9a:象牙管[KII:2048-2011](発掘:図20、遺物:図30)、9b:土器杯(発掘:図21)、9c:土器片(発掘:図22)、9d:紡錘車(発掘:図23)、10:コイン(遺物:図21)、11:小型壺[KII:1194-2099](遺物:図49)、12:テラコッタ断片(神像)[KII:1194-2045](遺物:図25)、13:土器製台座部分[KII:1194-2033](発掘:図33、遺物:図54)、14:テラコッタ人物像[KII:1194-20101](発掘:図34、遺物:図26)、15:ビーズ(発掘:図35、遺物:図31)、16:貴石(発掘:図36)、17:裝飾紡錘車[KII:1194-345](遺物:図18)、18:土器片[KII:1194-2086](遺物:図60)、19:土器基部[KII:1194-2095](遺物:図65)、24:金属製容器(遺物:図80)

2011年度 KKF-XII 遺物出土位置



3 : 木製品(発掘: 図46)、20: 灯明皿(チラク) [KII : 1194-20115](発掘: 図53、遺物: 図75)、  
 21: マジマル [KII : 1194-20117](発掘: 図54、遺物: 図69)、22: コイン(発掘: 図55、遺物:  
 図22)、23: 灯明皿(チラク) [KII : 1194-20113](発掘: 図23、遺物: 図68)、25: 土器カップ  
 [KII : 1194-20121](遺物: 図79)、26: 紡錘車 [KII : 1194-20114](遺物: 図74)、27: 石製円盤  
 [KII : 1194-20122](遺物: 図76)

2011 年度 KKF 調査へ (1)



1. 7月19日、エサンボイ村への途中、バザールで買い出し



2. 7月19日、バザールの肉屋にて、右端:ボボムロエフ館長



3. 7月19日、肉屋にて



4. 7月19日、果物屋でスイカとハルブズ(メロンの一種)を買い入れ



5. 7月19日、雑貨屋にて



6. 7月19日、エサンボイの宿舎にて、手前が研究員兼ドライバーのミルゾフ氏

2011 年度 KKF 調査へ (2)



7. 7月20日、現場へ移動、宿舎の外壁



8. 7月20日、現場へ移動、隣家の日干し煉瓦塼



9. 7月20日、現場へ移動、右端の白い建物は国境警備隊の屯所



10. 7月20日、現場へ移動、この地域の代表的民家。右の丘が発掘現場



11. 7月20日、現場へ移動、丘へ急ぐ青年。彼も発掘作業員。



12. 7月20日、現場へ移動、遺跡西側のマウンド。遺跡の城壁址。

## 2011 年度 KKF-X 発掘(1)



1. 7月19日、調査開始にあたり KKF の原点を確認する。



2. 2010 年度設置の KKF-X の機械点の一つを確認する。



3. 7月20日、ホジ研究員にトータルステーションの設置をまかせる。



4. 調整ネジを回して機械が水平になるように調整する。



5. 水平になってかつ測点の真上に機械の中心軸がくるように調整する。



6. デジタル平板とトータルステーションは無線で連動。「観測終了！次へ！」

2011 年度 KKF-X 発掘 (2)

	
<p>7. 7月30日、KKF-Xの部屋8の石組み遺構</p>	<p>8. 7月30日、左図の壁の拡大写真</p>
	
<p>9. 7月30日、KKF-X、部屋6</p>	<p>10. 7月30日、KKF-X、部屋5と東壁</p>
	
<p>11. 7月30日、KKF-X、部屋8の床面</p>	<p>12. 7月30日、左図の拡大</p>

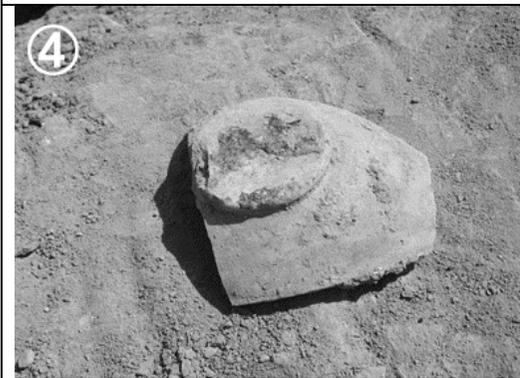
2011 年度 KKF-XI 発掘(1)



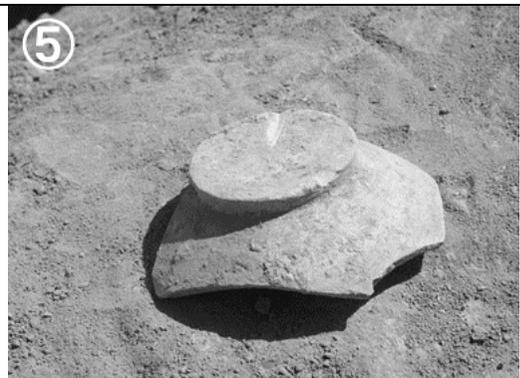
13. 7月23日、左：部屋2、右：部屋3、ここから多くの土器出土



14. 7月23日、部屋1の北側



15. 7月23日、部屋4から土器断片出土



16. 7月23日、部屋4から土器断片出土



17. 7月23日、部屋4の南側から土器断片出土

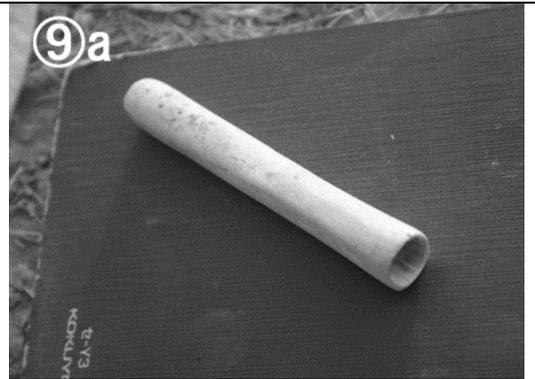


18. 7月23日、部屋4の南側から土器断片出土

2011 年度 KKF-XI 発掘(2)



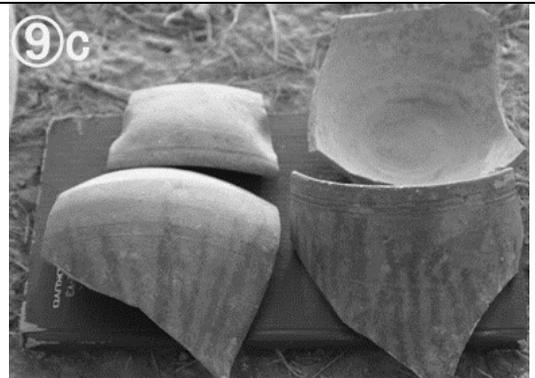
19. 7月23日、部屋1の西側より土器・杯断片出土



20. 7月25日、部屋5南西隅より象牙管出土



21. 7月25日、部屋5南西隅より土器・杯断片出土



22. 7月25日、部屋5南西隅より土器断片出土

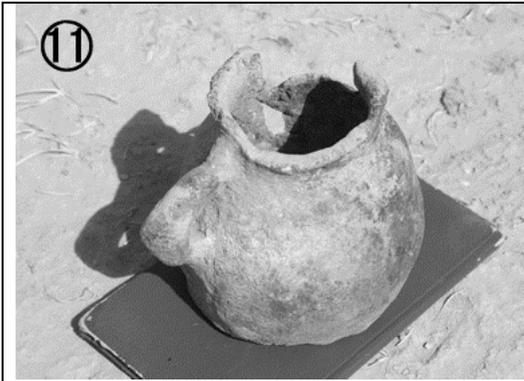


23. 7月25日、部屋5南西隅より紡錘車出土



24. 7月28日、部屋6の南東隅の発掘

2011年度 KKF-XI 発掘(3)



25. 7月28日、部屋7から取手付き壺出土



26. 7月30日、部屋6の西壁下の礎石



27. 7月30日、図26の炉の拡大図



28. 7月30日、部屋6、新旧の壁の層、指示した部分が境界線



29. 7月31日、部屋6東壁中央にニッチ（竈、幅65cm 深さ75cm）を検出する。



30. 7月31日、KKF-XI の部屋5と部屋6

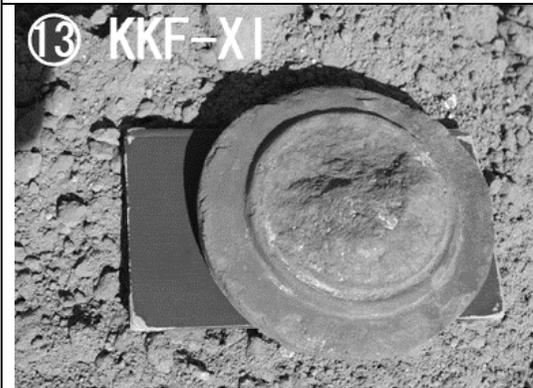
2011 年度 KKF-XI 発掘(4)



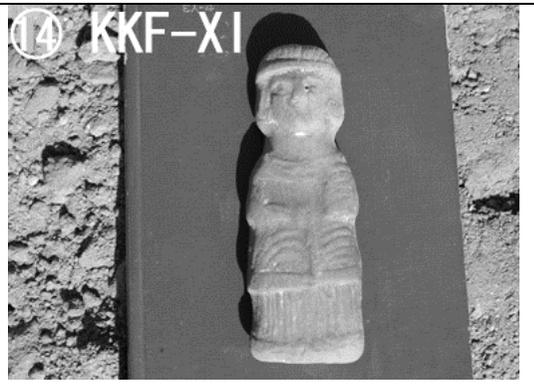
3 1. 7月31日、ニッチ（龕）の拡大写真、シャベルの取手状遺物を検出する。



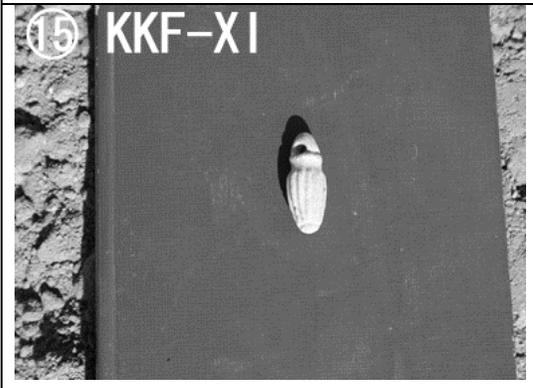
3 2. 壁とニッチ（龕）



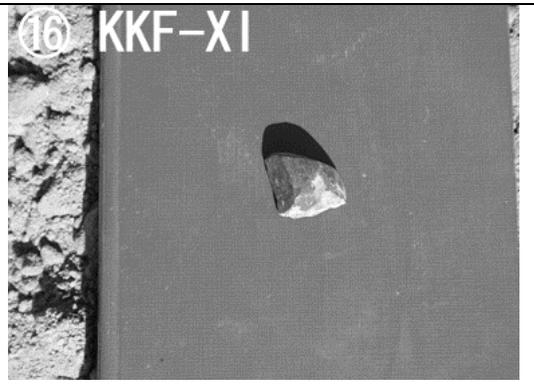
3 3. 8月1日、部屋6南縁から土器製基部、



3 4. 8月1日、部屋6南縁から人物像テラコッタ



3 5. 8月1日、部屋6南縁からビーズ等が出土する。



3 6. 8月1日、部屋6南縁から貴石、

2011 年度 KKF-XI 発掘(5)

<p>②4 KKF-XI</p> 	
<p>37. 8月3日、部屋6の東部分から三脚の金属製容器出土</p>	<p>38. 8月3日、出土した三脚の金属製容器とボボムロエフ館長</p>
	
<p>39. 8月3日、部屋6の全景、左の壁にニッチが開かれている。</p>	<p>40. 8月3日、日干し煉瓦の壁、長さ34cm厚さ11cmの日干し煉瓦五層。</p>
	
<p>41. 8月3日、部屋6の幅85cmの入り口、部屋1へ通ずると見られる。</p>	<p>42. 日干し煉瓦（発掘40）の拡大</p>

2011 年度 KKF-XII 発掘 (1)



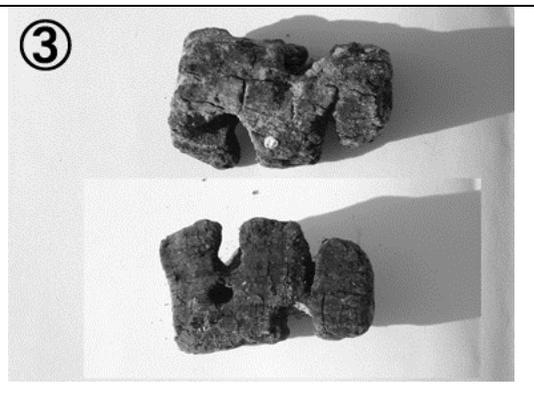
43. 7月19日、丘状の遺跡、遠景



44. 7月19日、KKF-XII に機械点 KKF-12\_T0 を設置した。



45. 7月19日、試掘溝の北縁に日干し煉瓦の遺構が現われる。



46. 7月23日、試掘溝の南東縁より木製品の断片が出土する。



47. 7月23日、試掘溝の東から西へ5m、北から南へ10mの所に壁遺構



48. 7月23日、日干し煉瓦壁(図47)を見下ろす

2011 年度 KKF-XII 発掘 (2)



49. 7月23日、ボボ研究員が二つの日干し煉瓦遺構を検出する。



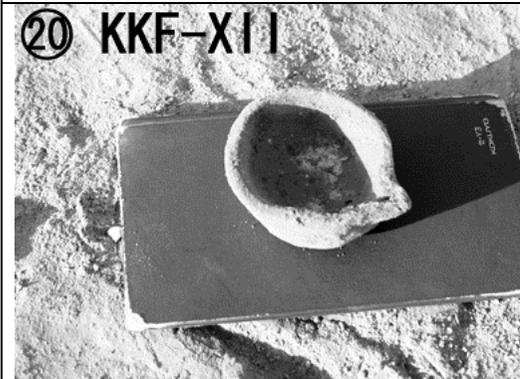
50. 7月23日、土器カメ出土



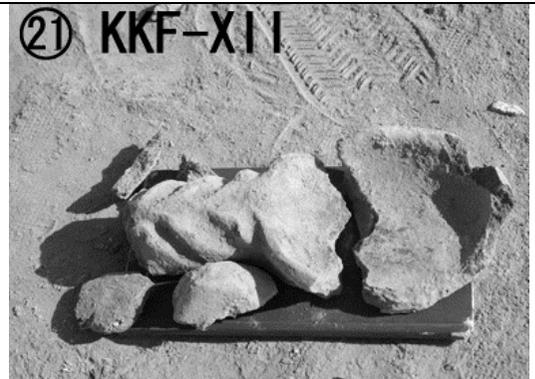
51. 7月28日、KKF-XIIの全景、南側より撮影



52. 7月28日、KKF-XIIの北側エリア

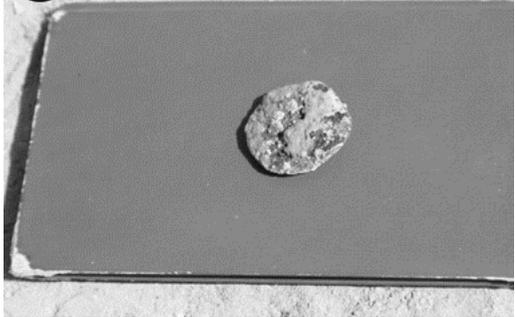


53. 8月2日、土器、灯明皿(チラク)出土

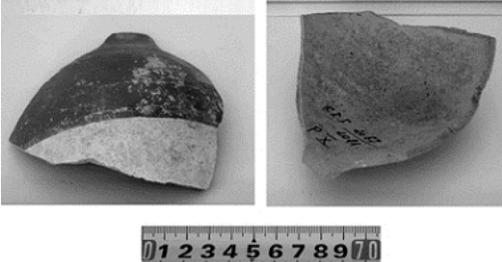


54. 8月2日、携帯拝火炉(マジマル)出土

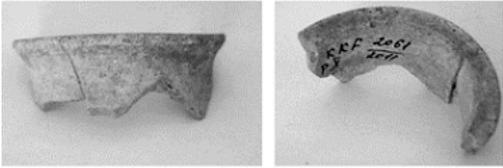
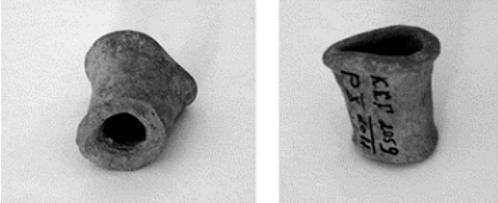
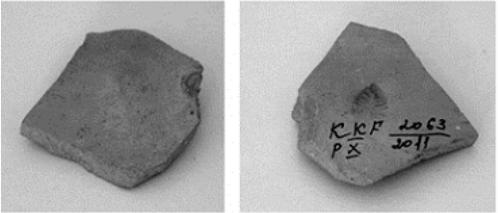
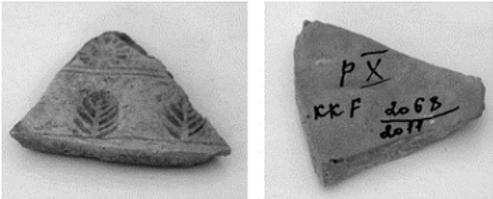
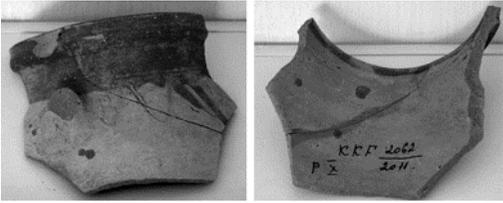
2011 年度 KKF-XII 発掘 (3)

<p>②② KKF-XII</p> 	<p>②③ KKF-XII</p> 
<p>55. 8月2日、コイン出土、</p>	<p>56. 8月2日、土器・灯明皿（チラク）出土</p>
	
<p>57. 8月3日、東西にわたる中央の壁</p>	<p>58. 8月3日、壁の礎石</p>
	
<p>59. 8月3日、KKF-XII の西側エリア</p>	<p>60. 8月3日、KKF-XII の東側エリア</p>

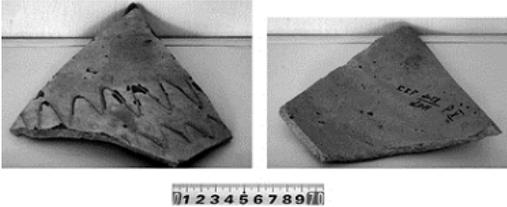
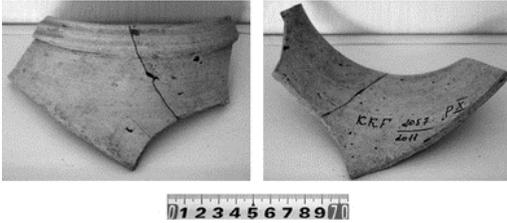
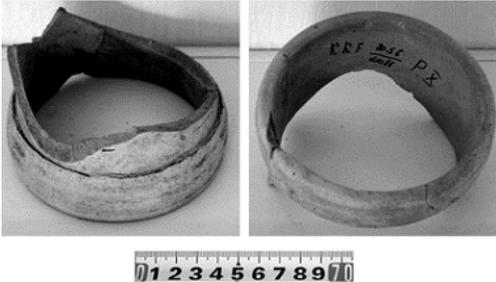
2011 年度遺物 (1)

	
<p>1. 土器壺[КП : 1194-2047] KKF-X 出土</p>	<p>2. 土器片[КП : 1194-2027] KKF-X 出土</p>
	
<p>3. 土器片[КП : 1194-2066] KKF-X 出土</p>	<p>4. 土器片[КП : 1194-2055] KKF-X 出土</p>
	
<p>5. 土器片[КП : 1194-2065] KKF-X 出土</p>	<p>6. 土器片[КП : 1194-2060] KKF-X 出土</p>

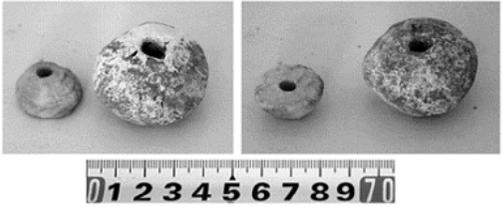
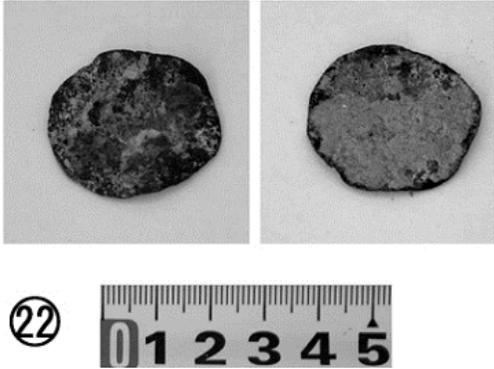
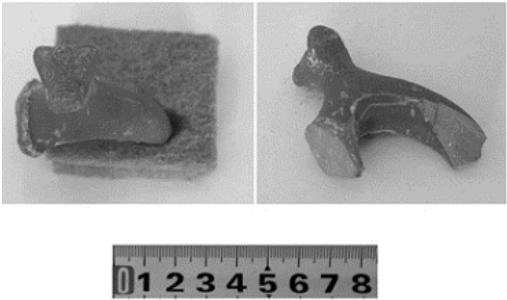
2011 年度遺物 (2)

 	 
<p>7. 土器片 [KII : 1194-2061] KKF-X 出土</p>	<p>8. 土器片 [KII : 1194-2059] KKF-X 出土</p>
 	 
<p>9. 土器片 [KII : 1194-2064] KKF-X 出土</p>	<p>10. 土器片 [KII : 1194-2063] KKF-X 出土</p>
 	 
<p>11. 土器片 [KII : 1194-2068] KKF-X 出土</p>	<p>12. 土器片 [KII : 1194-2062] KKF-X 出土</p>

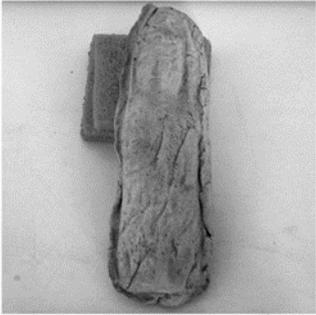
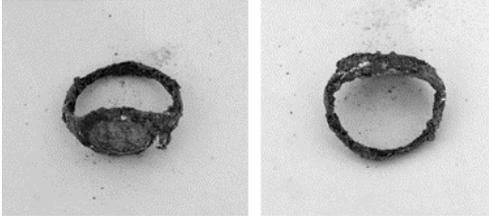
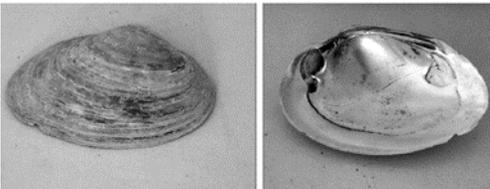
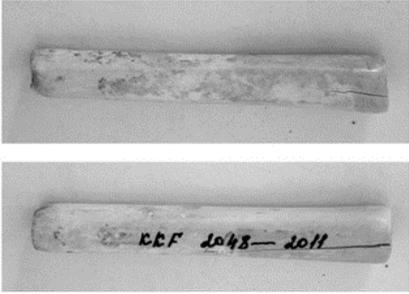
2011 年度遺物 (3)

	
<p>1 3. 土器片 [KII : 1194-2058] KKF-X 出土</p>	<p>1 4. 土器片 [KII : 1194-2057] KKF-X 出土</p>
	
<p>1 5. 土器片 [KII : 1194-2056] KKF-X 出土</p>	<p>1 6. 土器片 [KII : 1194-2057] KKF-X 出土</p>
	
<p>1 7. テラコッタ・羊 [KII : 1194-20107] KKF-XI 出土</p>	<p>1 8. 裝飾紡錘車 [KII : 1194-345]</p>

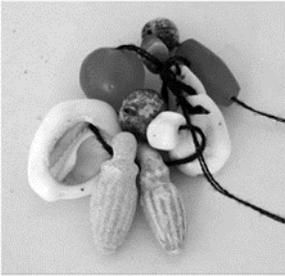
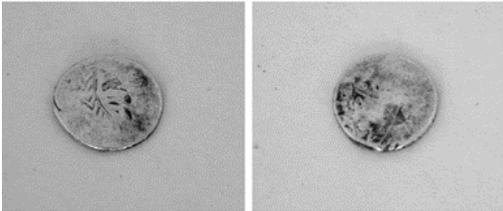
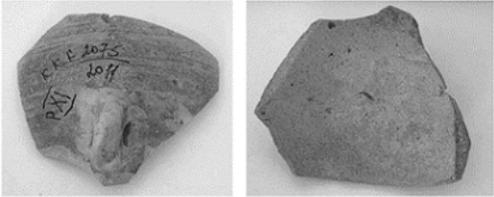
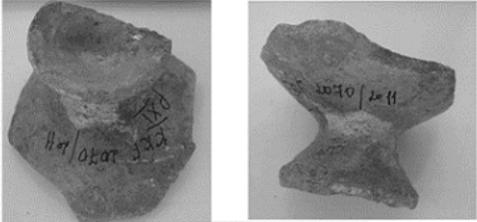
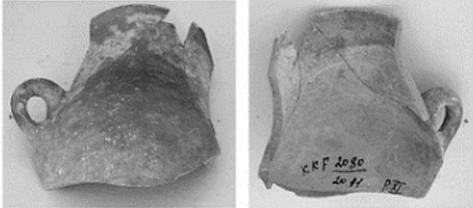
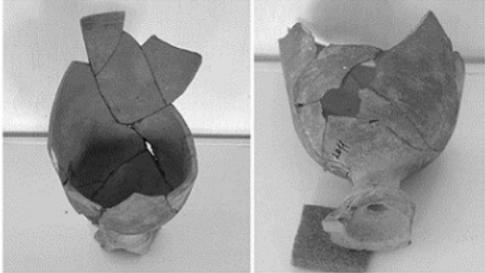
2011 年度遺物 (4)

	
<p>19. 土器片</p>	<p>20. 紡錘車</p>
	
<p>21. コイン</p>	<p>22. コイン</p>
	
<p>23. 鉄製品</p>	<p>24. 土器片・取手 (犬頭部) [KII : 1194-20106] KKF-XI 出土</p>

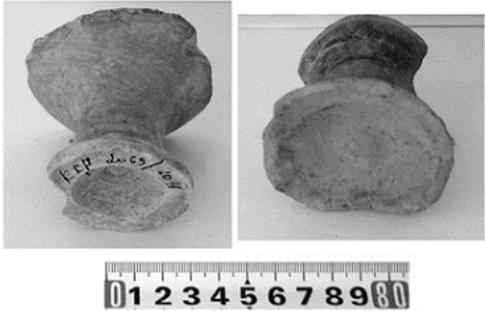
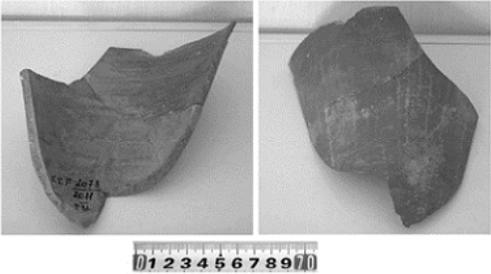
2011 年度遺物 (5)

 <p>⑫</p>	 <p>⑭</p>
<p>25. テラコッタ・神像[KII : 1194-2045] KKF-XI 出土</p>	<p>26. テラコッタ・人物[KII : 1194-20101] KKF-XI 出土</p>
 <p>①</p>	 <p>① 2 3 4 5</p>
<p>27. テラコッタ・菩薩[KII : 1194-2011] (11.9x3.8x3) KKF-X 出土</p>	<p>28. 指輪</p>
 <p>① 2 3 4 5 6 7 8 9 10</p>	 <p>⑨ ① 2 3 4 5 6 7 8 9 10</p>
<p>29. 貝殻</p>	<p>30. 象牙管[KII : 2048-2011] (8x1cm) KKF-XI 出土</p>

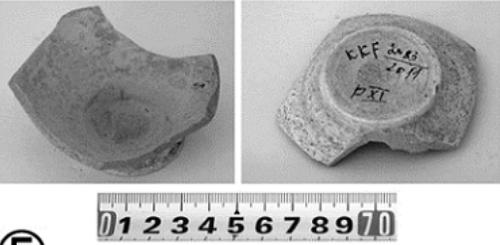
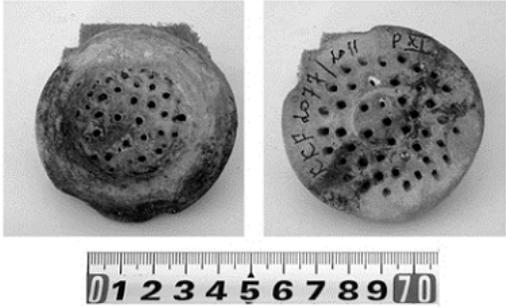
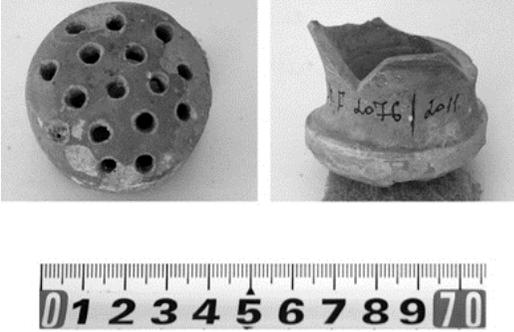
2011 年度遺物 (6)

 <p>⑮</p>	
<p>3 1. 装身具</p>	<p>3 2. コイン?</p>
	
<p>3 3. 土器片 [KII : 1194-2075] KKF-XI 出土</p>	<p>3 4. 土器片 [KII : 1194-2070] KKF-XI 出土</p>
	
<p>3 5. 土器片 [KII : 1194-2080] KKF-XI 出土</p>	<p>3 6. 土器片 [KII : 1194-2071]</p>

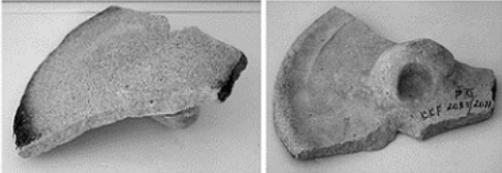
2011 年度遺物 (7)

	
<p>37. 土器片 [KII : 1194-2072] KKF-XI 出土</p>	<p>38. 土器片 [KII : 1194-2069]</p>
	
<p>39. 土器片 [KII : 1194-2079] KKF-XI 出土</p>	<p>40. 土器片 [KII : 1194-2078] KKF-XI 出土</p>
	
<p>41. 土器片 [KII : 1194-2082]</p>	<p>42. 土器片 [KII : 1194-2073] KKF-XI 出土</p>

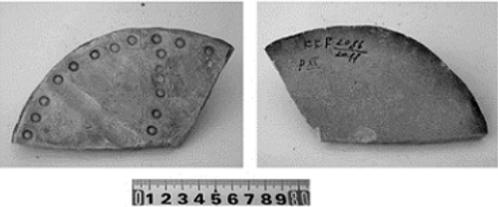
2011 年度遺物 (8)

 <p>⑧</p>	 <p>⑤</p>
<p>4 3. 土器片 [KII : 1194-2074] KKF-XI 出土</p>	<p>4 4. 土器片 [KII : 1194-2083] KKF-XI 出土</p>
	
<p>4 5. 土器片 [KII : 1194-2083] KKF-XI 出土</p>	<p>4 6. 土器・漉器 [KII : 1194-2077] KKF-XI 出土</p>
	
<p>4 7. 土器片 [KII : 1194-2082] KKF-XI 出土</p>	<p>4 8. 土器・漉器 [KII : 1194-2076]</p>

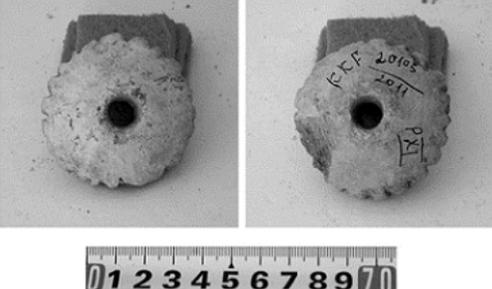
2011 年度遺物 (9)

 <p>⑪</p>	
<p>49. 土器・取手付き壺[КП : 1194-2099] KKF-XI 出土</p>	<p>50. 土器・柱基部[КП : 1194-2092] KKF-XI 出土</p>
	
<p>51. 土器片・取手付蓋[КП : 1194-2072] KKF-XI</p>	<p>52. 柱基部[КП : 1194-2097] KKF-XI 出土</p>
	 <p>⑬</p>
<p>53. 土器片[КП : 1194-2094] KKF-XI 出土</p>	<p>54. 土器片[КП : 1194-2033] KKF-XI 出土</p>

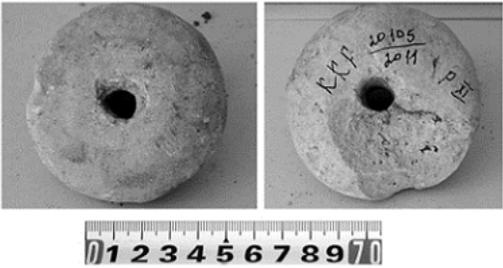
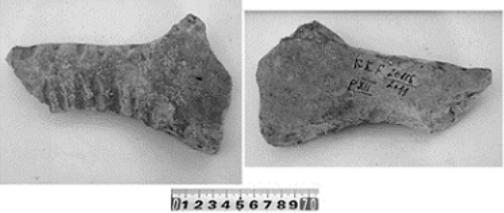
2011 年度遺物 (10)

	
<p>55. 土器片 [KPI : 1194-2087] KKF-XI 出土</p>	<p>56. 土器片 [KPI : 1194-2088] KKF-XI 出土</p>
	
<p>57. 土器・カップ [KPI : 1194-2094] KKF-XI 出土</p>	<p>58. 土器片 [KPI : 1194-2098] KKF-XI 出土</p>
	
<p>59. 土器片 [KPI : 1194-2084] KKF-XI 出土</p>	<p>60. 土器片 [KPI : 1194-2086] KKF-XI 出土</p>

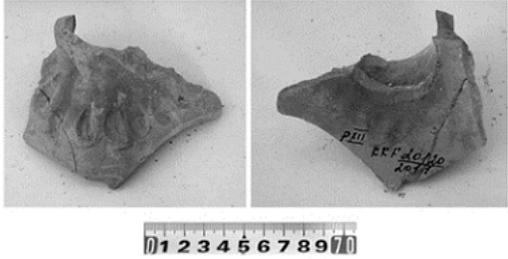
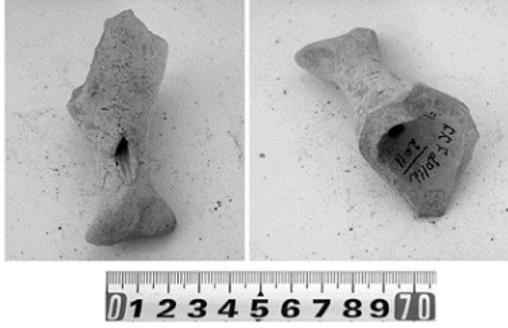
2011 年度遺物 (11)

	
<p>6 1. 土器片 [KII : 1194-2096]</p>	<p>6 2. 土器片 [KII : 1194-20101] KKF-XI 出土</p>
	
<p>6 3. 土器片 [KII : 1194-2089] KKF-XI 出土</p>	<p>6 4. 土器片 [KII : 1194-2030] KKF-XI 出土</p>
	
<p>6 5. 土器片 [KII : 1194-2095] KKF-XI 出土</p>	<p>6 6. 土器片 [KII : 1194-20105] KKF-XI 出土</p>

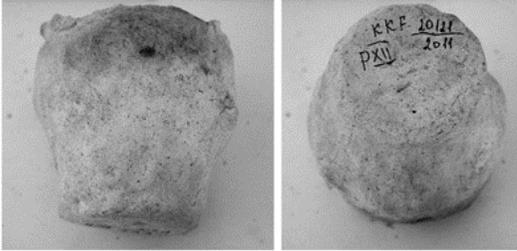
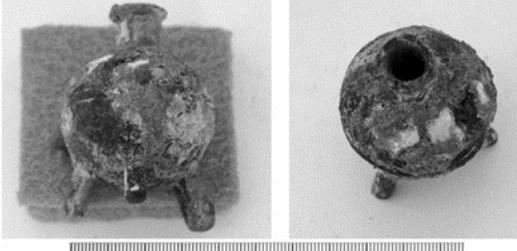
2011 年度遺物 (12)

	
<p>67. 土器・紡錘車? [KII : 1194-20105] KKF-XI 出土</p>	<p>68. 土器・チラク (灯明皿) [KII : 1194-20113] KKF-XII 出土</p>
	
<p>69. 土器・マジマル (携帯拝火炉) [KII : 1194-20117] KKF-XII 出土</p>	<p>70. 土器片 [KII : 1194-20119] KKF-XII 出土</p>
	
<p>71. 土器片・マジマル (携帯拝火炉) [KII : 1194-20118] KKF-XII 出土</p>	<p>72. 土器片・マジマル (携帯拝火炉) [KII : 1194-20116] KKF-XII 出土</p>

2011 年度遺物 (13)

	
<p>7 3. 土器片 [KII : 1194-20120] KKF-XII 出土</p>	<p>7 4. 土器・紡錘車? [KII : 1194-20114] KKF-XII 出土</p>
	
<p>7 5. 土器・チラク (灯明皿) [KII : 1194-20115] KKF-XII 出土</p>	<p>7 6. 石器輪 [KII : 1194-20122] KKF-XII 出土</p>
	
<p>7 7. 土器片 [KII : 1194-20114]</p>	<p>7 8. 土器片 [KII : 1194-20123] KKF-XII 出土</p>

2011 年度遺物 (14)

 <p>②5</p>	 <p>②4</p>
<p>79. 土器・碗[KII : 1194-20121] KKF-XII 出土</p>	<p>80. 金属製小型鼎 KKF-XI 出土</p>

## 2012年度発掘調査

### 概要

2012年の4月から5月にかけて、タジキスタンのKKF-XIとKKF-XIIにおける第6次の発掘調査を実施した。前年度調査の際に8月から9月の発掘調査は気温が高く、土壌も乾燥して発掘作業が困難だと指摘があった。また、ボボムロエフ館長も9月には行事や会議が多くて度々現場を離れる必要があるとのことで、それらの点を考慮して初夏の時期に調査を実施することになっていた。

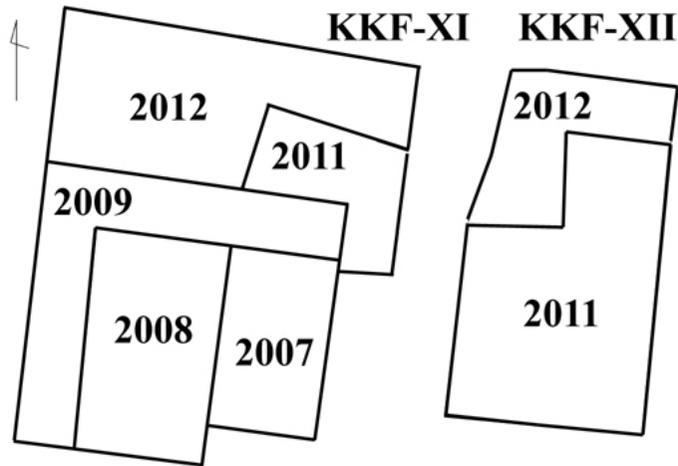
しかし、タジキスタンでは春季に天候不順で雨が多く、十分な発掘作業ができないことがわかった。特にこの年は4月下旬にも雨が続き発掘も実施できなかった。昨年と同じく、この地区の区長を数年前まで務めたコディオフ・フジャンクル氏の家に間借りをしての調査となる。タジキスタン側の研究者はボボムロエフ館長とその息子ボボムロ、ルスタン研究員、マルチェル研究員の4名である。彼等は私の到着前から現地入りし、発掘を進めていた。5月2日から5月9日までではカラ・イ・カフィルニガン遺跡において発掘調査(タジキスタン側研究員は4月15日より発掘作業を開始)、出土文物の記録・遺構の図化作業を実施した。

さらに5月10日から5月13日までは、ドゥシャンベ市内のタジキスタン博物館で写真撮影を実施。特に、2007年以降の出土文物の図録作成のため、該当する文物の全てを撮影する。一定の背景で、カラー・コントロール・パッチを写し込む作業で、一点につき複数枚の写真を撮影する必要があり、相当時間を要した。図録は科研費の成果発表として出版費を支出することを確認し、今後の日本からの送金やタジキスタンからの出版物及び領収書の航空便による送付に関して話し合いを行う。帰国に際して、図録記載予定の遺構内の各部屋に関して、タジキスタン側から、実測値(縦横の長さや壁の高さなど)や日干し煉瓦の規格についての問い合わせがあり、図面から読み取れる範囲については回答し、それ以外については過去の野帳を確認してEメールで回答する旨を伝える。平面図から実測値を読み取るといった基本的方法について理解を進めてもらう必要性を痛感した。

### 調査日程

日曜	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜(休)	土曜
4/29 出国 関空	4/30 イスタンブール →ド'ジャンベ'	5/1 発掘作業 遺構測量	5/2 発掘作業 遺構測量	5/3 発掘作業 遺構測量	5/4 休み	5/5 発掘作業 遺構測量
5/6 発掘作業 地形測量	5/7 雨天	5/8 警備隊巡回 撤収	5/9 移動日 →ド'ジャンベ'	5/10 博物館 遺物撮影	5/11 博物館 遺物撮影	5/12 博物館 遺物撮影
5/13 博物館 遺物撮影	5/14 ド'ジャンベ'→ イスタンブール	5/15 帰国 関空				

以下の図は今までの発掘進捗状況である我々は昨年広げた領域をさらに深く掘り下げ、北へ領域を拡張した。



## I 作業日誌

5月2日、KKF-XIIで8時から30分ほど測点とアウトラインを入力する。往路の飛行機内でインフルエンザにかかってしまい、まだ寒気がして十分な体調とは言えない。早々に借家に戻り、ベッドに横になる。これまでに出土した遺物の写真と特徴を記録する。それぞれの出土場所を記録するための準備である。その後、食事を取らずにそのまま就寝する。

5月3日、午前中にKKF-XIで測点とアウトラインの入力をする。昨年使った測点であるKKF\_0 (KKF 原点)と測点KKF-XI\_01と測点KKF-XI\_02を手入力で記録し、新しい観測点TS\_01を設定する。KKF-XIのアウトラインと第5室の西にイスラーム期の墓(tomb1)を記録した。壁を記録し、第5室の北東外側に別の墓(tomb2)を記録した。

午後は、16時半から18時までKKF-XIで平面図を作成、KKF-XI出土番号1のデジマル(土器燭台)(遺物:図1)出土位置を記録する。

KKF-XI

出土番号11、土器(土器製燭台、デジマル) [KII : 1194-2130]、

5月5日、午前中に、KKF-XIIですでに発掘済みの出土番号1から10までの出土位置を研究員ボボ君に尋ねながら測定し入力する。この日出土した土器製の小さなポット(出土番号12)の出土場所を記録し、さらに金属製品と奥歯(出土番号13)が出土する。また、漆喰の断片(出土番号14)の位置を記録する。

午後には KKF-XI でポット(出土番号14)の位置を測定する。16時頃に雨が降りだし、しばらく待機する。トータルステーションなどの電子機器にとって雨は大敵である。

#### KKF-XII 出土

- 出土番号1、土器(マジマル),  $z = -0.011$ , (遺物: 図4) (4月27日出土)
- 出土番号2、テラコッタ断片,  $z = -0.186$ , (遺物: 図5) (4月27日出土)
- 出土番号3、紡錘車,  $z = -0.096$ , (遺物: 図6) (4月27日出土)
- 出土番号4、土器(碗),  $z = -0.547$ , (遺物: 図7) (4月27日出土)
- 出土番号5、土器(小ポット),  $z = -0.335$ , [KII : 1194-2140], (遺物: 図8) (4月28日出土)
- 出土番号6、紡錘車,  $z = -0.362$ , [KII : 1194-2126], (遺物: 図9) (4月28日出土)
- 出土番号7、土器,  $z = 0.229$ , (遺物: 図10) (4月30日出土)
- 出土番号8、土器,  $z = 0.297$ , (遺物: 図11) (4月30日出土)
- 出土番号9、テラコッタ,  $z = -0.140$ , (遺物: 図12) (5月3日出土)
- 出土番号10、鉄塊,  $z = 0.740$ , (遺物: 図13) (5月3日出土)
- 出土番号12、土器(小ポット),  $z = -0.272$ , (遺物: 図14)
- 出土番号13、金属製品と奥歯,  $z = 0.038$ , (遺物: 図15)
- 出土番号14、白漆喰の断片,  $z = 0.021$ , (遺物: 図16)

#### KKF-XI

- 出土番号15、土器(ポット),  $z = -1.189$ , (遺物: 図2)

5月6日、午前中に KKF-XII で作業。途中で KKF-XI に移動してカメラ3個の位置を測定する。カメラAの底中心のレベルは $z = -1.874\text{m}$ 、カメラBの底中心のレベルは $z = -1.142\text{m}$ 、カメラCは外側の直径が0.3m、口径が0.2mであった。カメラCは遺物(出土番号16)として取り上げた。その後、館長からの依頼があり、KKF-XII へ移動して、漆喰が塗られた壁を測定、KKF-XII 出土番号17のナイフも1点記録する。

午後にも KKF-XII で作業。水差し(出土番号18)1点が出土する。

さらに KKF-XII 出土番号19aの穀物米と KKF-XII 出土番号19bの鉄製品(鏃)を記録した。

#### KKF-XI 出土

- 出土番号16、土器(カメラ) (遺物: 図3)

#### KKF-XII 出土

- 出土番号17、鉄ナイフ、(遺物: 図17)
- 出土番号18、土器(水差し)、(遺物: 図18)
- 出土番号19a、穀物、(遺物: 図19)、出土番号19b、鉄製品(鏃)、(遺物: 図20)

5月7日、雨天のため、作業中止。

5月8日、7時から8時まで KKF-XI で作業。発掘エリアの北東にイスラーム期の墓(tomb3)を測定し、さらに続いて北西の墓(tomb4)を記録する。

8時40分に KKF-XII でコイン(遺物番号20)が出土したとのことで移動・記録する。ただし、写真を撮影する前に、9時過ぎに国境警備兵が巡回するとのことで急遽宿舎に退避する。したがって、コインの影像資料はない。

5月9日、予定を切り上げてドシャンベへ戻る。残る日程はカタログ作成のための遺物撮影に当てることとなった。天候も不順な状態が続き、撮影のための露光も乏しい日が多かった。

## II. 遺跡

遺構については 2009 年度の記録を参照のこと

## III. 遺物

テラコッタ:

出土番号2、9

土器:

出土番号1、4、5、7、8、11、12、15、16、18

石器・紡錘車:

出土番号3、6

金属製品・鉄:

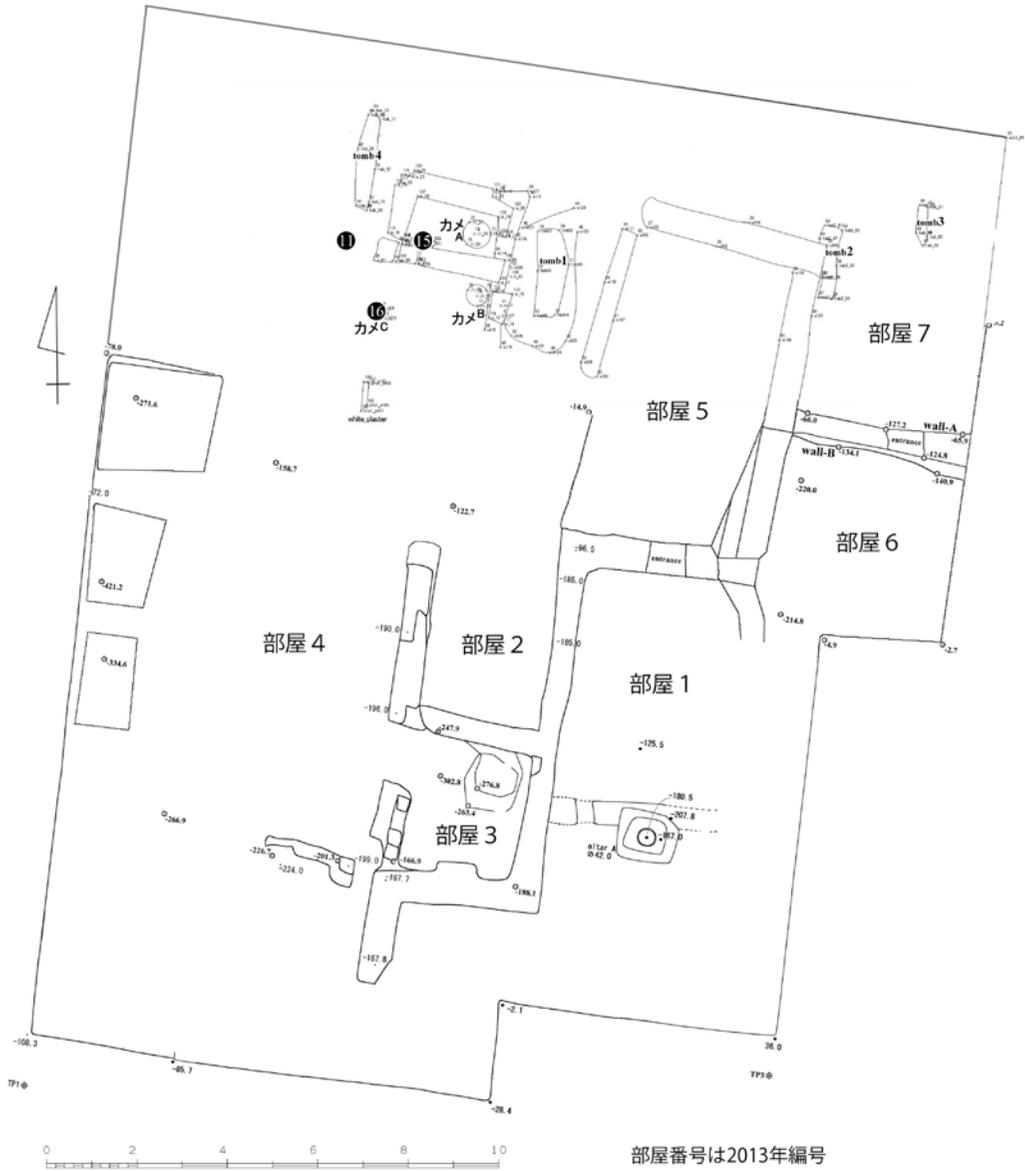
出土番号10、13、17、19b

その他

出土番号14、19a

2012 年度出土遺物の出土位置を KKF-XI と KKF-XII の平面図上に出土番号(2012 年度に出土した順)によって示す。●に白抜きの番号が出土番号である。

2012年度 KKF-XI 出土分布図

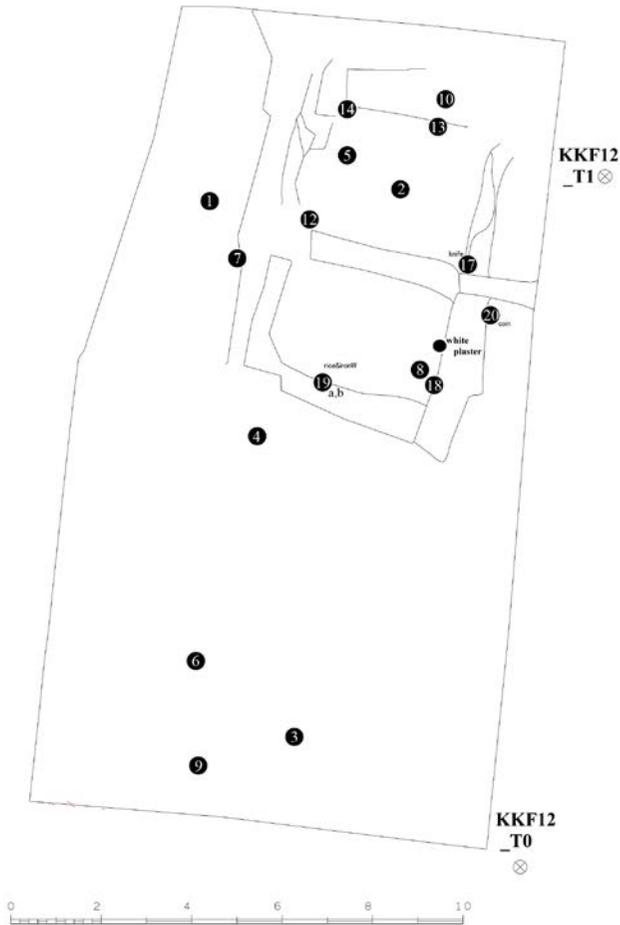


出土番号11、土器(土器製燭台、デジマル)

出土番号15、土器(ポット)

出土番号16、土器(カメ)

2012 年度 KKF-XII 出土分布図



1. 土器(マジマル),  $z = -0.011$ 、2. テラコッタ断片,  $z = -0.186$ 、3. 紡錘車,  $z = -0.096$ 、  
 4. 土器(碗),  $z = -0.547$ 、5. 土器(小ポット),  $z = -0.335$ 、6. 紡錘車,  $z = -0.362$ 、  
 7. 土器,  $z = 0.229$ 、8. 土器,  $z = 0.297$ 、9. テラコッタ,  $z = -0.140$ 、10. 鉄塊,  $z = 0.740$ 、  
 12. 土器(小ポット),  $z = -0.272$ 、13. 金属製品と奥歯,  $z = 0.038$ 、  
 14. 白漆喰の断片,  $z = 0.021$ 、17. 鉄ナイフ、(遺物: 図17)  
 出土番号18、土器(水差し)、(遺物: 図18)  
 出土番号19a、穀物、(遺物: 図19)、出土番号19b、鉄製品(鏃)、(遺物: 図20)

## 2012 年度 KKF-XI 発掘



1. 5月3日、イスラーム墓1、5室の西から出土



2. 5月3日、KKF-XI 全景、北側から撮影



3. 5月5日、KKF-XI の5室の周囲を掘り下げる。



4. 5月5日、KKF-XI の北部分を東側から撮影

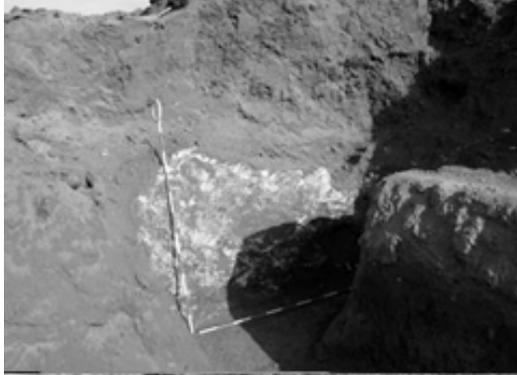


5. 5月6日、壺B出土、イスラーム墓1の西側から出土、直径約35cm



6. 5月6日壺A出土、イスラーム墓1の西側から、直径約45cm

2012 年度 KKF-XII 発掘

	
<p>1. 5月6日、KKF-XII 遺構、南東からの全景</p>	<p>2. 5月6日、KKF-XII 北部分</p>
	
<p>3. 5月6日、KKF-XII 遺構、南西からの全景</p>	<p>4. 5月8日、漆喰の壁出土、ただし壁画は確認できず。</p>
	
<p>5. 5月8日、日干し煉瓦の積み上げ層</p>	<p>6. 5月8日、日干し煉瓦の積み上げ層</p>

2012 年度 KKF-XI 遺物



1. 5月3日、土器製燭台、z=-1.050、  
[KII : 1194-2130]

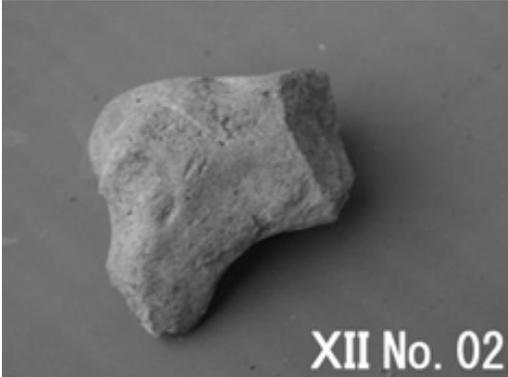
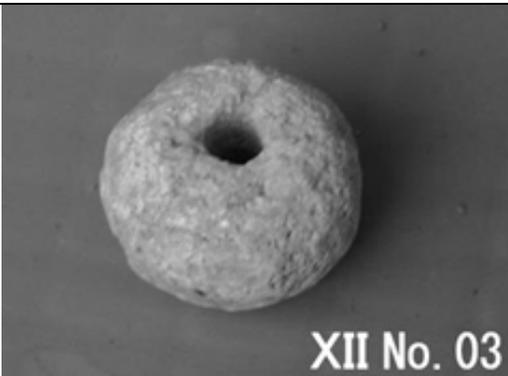
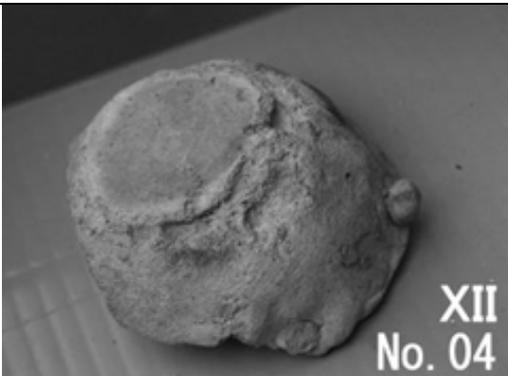
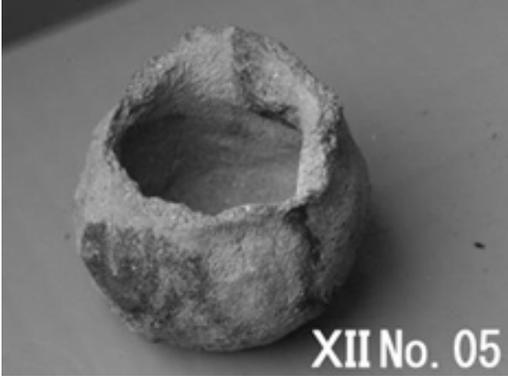
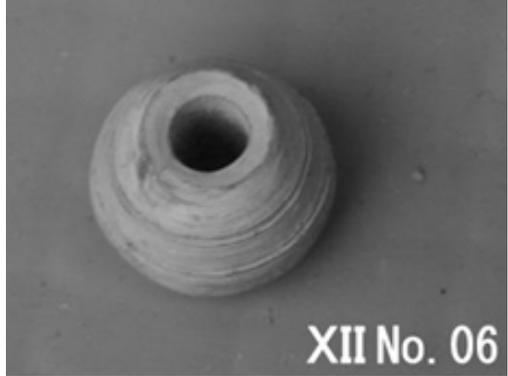


2. 5月5日、Obj\_02、土器（水差し）  
z=-1.189、[KII : 1194-2183]

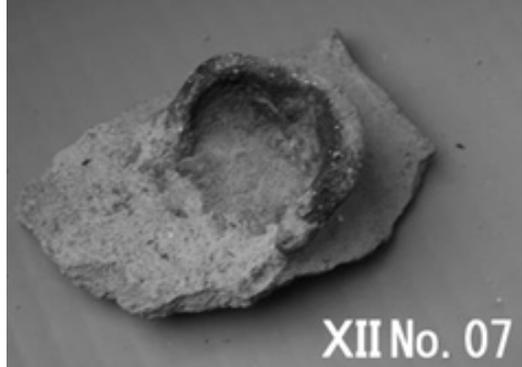


3. 5月6日、土器製壺、  
z=-1.010

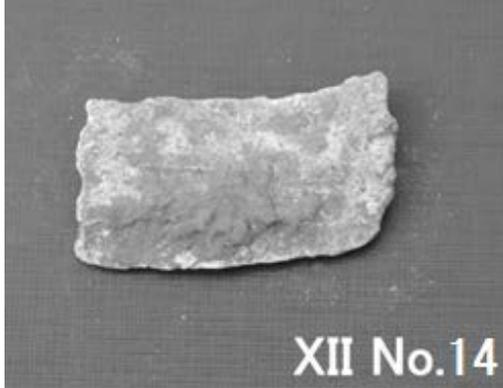
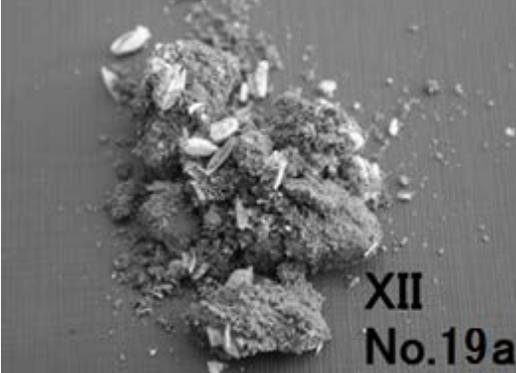
2012年度 KKF-XII 遺物 (1)

 <p>XII NO. 01</p>	 <p>XII No. 02</p>
<p>4. (4月27日) マジマル、<math>z = -0.011</math></p>	<p>5. (4月27日) テラコッタ断片、<math>z = -0.186</math></p>
 <p>XII No. 03</p>	 <p>XII No. 04</p>
<p>6. (4月27日) 紡錘車、[KII : 1194-2127]、<math>z = -0.096</math></p>	<p>7. (4月27日) 土器、<math>z = -0.547</math></p>
 <p>XII No. 05</p>	 <p>XII No. 06</p>
<p>8. (4月28日) 土器、[KII : 1194-2140]、<math>z = -0.335</math></p>	<p>9. (4月28日) 紡錘車、[KII : 1194-2126]、<math>z = -0.362</math></p>

2012年度 KKF-XII遺物(2)

 <p>XII No. 07</p>	 <p>XII No. 08</p>
<p>10. (4月30日) 土器片、z=0.229</p>	<p>11. (4月30日) 土器片、z=0.229</p>
 <p>XII No. 09</p>	 <p>XII No. 10</p>
<p>12. (5月1日) 土器片、z=-0.140</p>	<p>13. (5月3日) 鉄滓 鉄滓、z=0.740</p>
 <p>XII No.12</p>	 <p>XII No. 13</p>
<p>14. 5月5日 土器、[KII:1194-2128]、z=-0.272</p>	<p>15. 5月5日 金属製品断片と奥歯、z=0.038</p>

2012年度 KKF-XII 遺物 (3)

 <p style="text-align: right;"><b>XII No.14</b></p>	 <p style="text-align: right;"><b>XII No.17</b></p>
<p>16. 5月5日 土器片、<math>z = 0.021</math></p>	<p>17. 鉄製品 (ナイフ)、<math>z = -0.051</math></p>
 <p style="text-align: right;"><b>XII No.18</b></p>	 <p style="text-align: right;"><b>XII No.19a</b></p>
<p>18. 土器 ポット、[KII : 1194-2129]、<math>z = -0.297</math></p>	<p>19. 穀物、<math>z = -0.353</math></p>
 <p style="text-align: right;"><b>XII No.19b</b></p>	
<p>20. 鉄製品 鍔、<math>z = -0.353</math></p>	

## 2013年度発掘調査報告

2013年の4月から5月にかけて、第七回目のタジキスタンのカラ・イ・カフィルニガンの遺跡発掘調査を実施した。昨年の五月は天候不順のため雨が多く、十分な調査が実施できなかった。今年も4月末には雨が続いたがどうにか調査を実施することができた。借家は去年と同じく、この地域の区長を務めたコディロフ・フジャンクル氏の住居に間借りした。タジキスタンの研究員はボボムロエフ博物館長とその息子ボボムロ、研究員のルスタン氏・マルチェル氏・タフミナ女史の五人である。彼らは蓮池が合流するまえから発掘調査を開始していた。以下の図がこれまでのKKF-XI遺跡の発掘進捗状況である。昨年の範囲をさらに掘り下げるとともに、今年は東方向に5mほど拡張し、状況次第で北へ拡張する予定であった。

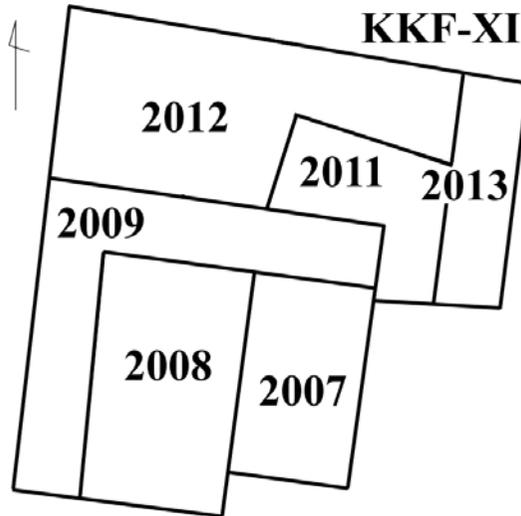
日程表

日曜	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜(休)	土曜
						4/27 閑空発 イスタンブール
4/28 イスタンブール 待機→	4/29 ドシャンベ ホテル	4/30 博物館 打合せ	5/1 現場へ エサンボイ	5/2 測点確保	5/3 測量データ 確認作業	5/4 ナウスまで トラバース
5/5 発掘作業 地形測量	5/6 発掘作業 遺構測量	5/7 発掘作業 遺構測量	5/8 発掘作業 遺構測量	5/9 発掘作業 遺構測量	5/10 データ整理	5/11 発掘作業
5/12 発掘作業	5/13 発掘作業 遺構測量	5/14 KKF-X 北側	5/15 現場終了 →ドシャンベ	5/16 博物館	5/17 データ整理	5/18 博物館で 遺物撮影
5/19 博物館で 遺物撮影	5/20 ドシャンベ イスタンブール	5/21 閑空着				

4月27日、京都大宮学舎で午前1講、午後2講の補講を済ませて、午後6時に京都駅に到着、はるかに乗車する。チェックインは8時30分の予定だったが、出発時間が15分早まったということで、少々慌てる。出発が遅くなることは度々あったが、早くなるのは初めてのことである。4月28日、早朝にイスタンブールに到着する。日本からの観光客も多く添乗員が年配のグループを誘導している。乗り継ぎ客も多くカウンターは混雑している。午後9時過ぎの出発であるから、半日は空港で過ごさねばならない。発着案内の掲示板にゲートの案内ができるまで、空いたゲートのベンチを転々として時間をつぶすしかない。朝昼晩の食事を終えて、やっとゲートが掲示され、ドシャンベ行きに搭乗する。狭い機内で昨年のインフルエンザ感染の記憶がよみがえるが、今回は大丈夫だった。

4月29日、早朝にドシャンベ空港に到着する。雨である。入国審査を終えると機内預けの荷物はベルトコンベアーの上を一回りした状態であった。荷物を受け取り、空港を出ても誰も迎

えに来ていない。電話でポボムロエフ館長に連絡し、ほどなくタクシーで迎えに来てくれる。館長の自宅は空港から10分ほどの住宅街にある。



2013年度は北東部分を拡張、さらにこれまでの部分を掘り下げた。

## I. 作業日誌

5月2日、基準点の確認、及び昨年の測点 TS\_01 を確認した。基準点は草に覆われて隠れた状態であった。確認しやすくするために副指標の石4個を埋設した。午後にトータルステーションを設置した。測点2点を視準して TS\_02、TS\_03 とし、改めて手入力で座標を作成した。出土番号01の鉄製鏃の出土地点を記録する。さらに出土番号02のテラコッタ・紡錘車・羊の骨(玩具)の位置を記録した。出土番号03の鏃の位置を記録する。2012年の発掘範囲を東に3m 拡張して発掘した。今年の作業はこれまでの範囲をさらに掘り下げてクシャーン期の層まで調査することになっている。

出土番号01: 鉄製品(矢じり),  $z=-1.601$ 、出土番号02a: テラコッタ(動物),  $z=-2.174$

出土番号02b: 紡錘車,  $z=-2.174$ 、出土番号02c: テラコッタ(菩薩像か?),  $z=-2.174$

出土番号03: 鉄製品(矢じり),  $z=-2.128$

5月4日、KKF-XI のアウトラインを入力した。午前中に出土番号04から出土番号11までを記録した。また、北西付近で瓶が出土、上部断面6点と底辺3点と中心1点を記録した。

出土番号04: 石器,  $z=-1.868$ 、出土番号05: 土器,  $z=-1.886$

出土番号06: 紡錘車,  $z=-1.802$ 、出土番号07: 貴石,  $z=-2.514$

出土番号08: 羊骨(玩具),  $z=-1.695$ 、出土番号09: 土器(カップ),  $z=-2.087$   
出土番号10: 土器(灯明皿),  $z=-1.598$ 、出土番号11: 石器,  $z=-2.032$

午後の発掘では出土番号12から開始した。

出土番号12: ビーズ(縞模様),  $z=-2.370$

作業時間終了間際、助手をしていた作業員が気を利かせて電源を切ってしまった。そのため、出土番号13の記録は翌日にのばした。

5月5日、昨日の続きで出土番号13から記録した。途中でバッテリーがなくなり、出土番号15と16のデータが消えたが、バックアップファイルから復元することができた。今回の調査では機械操作をしながら測点を指示するという二人分の仕事をやらねばならず、無駄な時間を要している。館長と相談して遺跡の部屋番号を定めた。第一部屋から第九部屋までを図に記入した。午前には、出土番号13から16までを記録した。

出土番号13a: サンゴ,  $z=-2.352$ 、出土番号13b: ネックレス断片,  $z=-2.352$

出土番号14: 青銅製鈴,  $z=-1.988$ 、出土番号15: 鉄製品(矢じり),  $z=-2.490$

出土番号16: 貴石と青銅製鈴(2),  $z=-2.332$

午後からは、出土番号17から22までを記録した。

出土番号17: 紡錘車,  $z=-1.877$ 、出土番号18: コイン,  $z=-2.632$

出土番号19: 歯,  $z=-2.711$ 、出土番号20: ビーズ(2),  $z=-2.592$

出土番号21: 土器(カップ),  $z=-2.632$ 、出土番号22: テラコッタ(羊),  $z=-2.641$

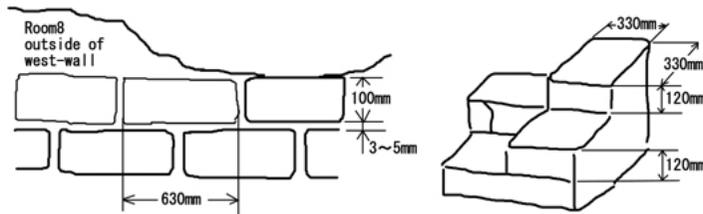
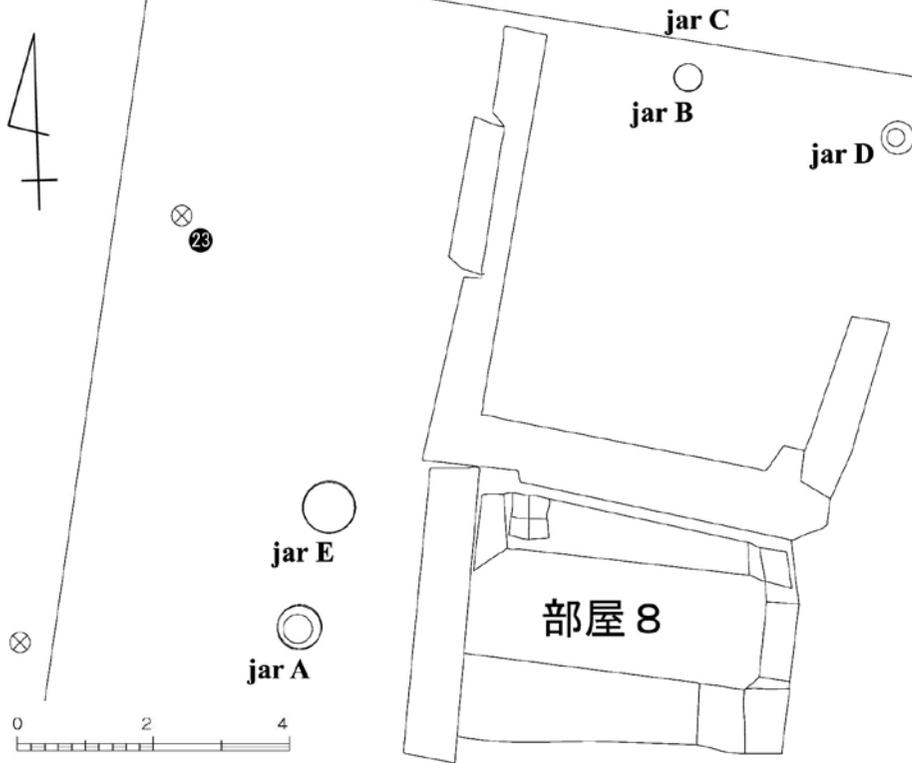
5月6日、西側トレンチの発掘がバクトリア期の地表面に達した。(口絵参照)その深さをトータルステーションで測定する。トータルステーションの視準角度を水平にしてレベルとして使用する。機械点は $-0.819\text{m}$ 、機械高は $1.55\text{m}$ で測定する。 $5\text{m}$ のスタッフとコンベックス $0.305\text{m}$ で、 $5.305\text{m}$ である。計算すると底のレベルは、 $-4.574\text{m}$ となる。

部屋8の西外側に日干しレンガ6段を確認した。高さ $10\text{cm}$ 、長さ $63\text{cm}$ で間が $3\sim 5\text{mm}$ の構造である。内側の北側には階段状に日干しレンガが残っており、高さ $12\text{cm}$ で縦横が $33\text{cm}$ である。午前の発掘では出土番号23から24までを記録した。

出土番号23: 土器(灯明皿),  $z=-2.025$ 、出土番号24: 紡錘車,  $z=-2.071$

カメDとEを記録した。カメEは底面の直径が $38\text{cm}$ あった。

## 5月7日 部屋8とカメの位置



部屋8の日干し煉瓦の壁と構造物

5月7日、部屋9の西側壁を記録した。その後、その壁は撤去された。9時頃、北東部分から出土番号25のコインが出土する。壁の陰となり視準できないのでターゲットを0.5mだけ継ぎ足して計測した。その後、出土番号29まで記録する。

出土番号25: コイン,  $z=-1.619$ 、出土番号26: 鉄製品(ナイフ),  $z=-1.981$

出土番号27: 紡錘車, z=-2.177、出土番号28: 土器(小ポット), z=-2.254  
出土番号29: 貴石, z=-2.252

午後からは出土番号30から32までを記録した。

出土番号30: コインとテラコッタ, z=-1.906、出土番号31: 土器(漉し器), z=-2.084  
出土番号32: 土器, z=-2.356

5月8日、午前中に出土番号33から34までを記録した。カメFの位置(jrF01~05)を記録する。  
10時30分頃より雷雨となった。機材は早めにケースに収めていたので被害を受けずにすんだが、三脚などは泥だらけとなった。昼からも雨は断続的に降り続き、午後の発掘は中止。  
出土番号33: テラコッタ(犬), z=-0.636、出土番号34: 土器(小カメ), z=-2.426

5月9日、北へ向けての発掘範囲の拡張にそなえて、測点を設置する。測点の幾つかは土砂に埋もれて使用できなくなっているため、早めの対応を取ることにした。

午前中の出土番号は35a から45までを記録した。

出土番号35a: ビーズ(3), z=-2.485、出土番号35b: 土器(燈台基部), z=-2.486  
出土番号36: テラコッタ, z=-2.466、出土番号37: 紡錘車(2), z=-2.376  
出土番号38: 紡錘車(2), z=-2.444、出土番号39: 土器(台), z=-1.551  
出土番号40: テラコッタ(羊), z=-2.468、出土番号41: 土器, z=-2.518  
出土番号42: テラコッタ(頭部欠損), z=-2.581、出土番号43: 貴石ビーズ, z=-2.661  
出土番号44: 土器(カップ基部), z=-2.588、出土番号45: テラコッタ(犬の頭部), z=-1.670

午後から出土番号46から47までを記録した。

出土番号46: 石器(穴のあいた砥石), z=-2.097、出土番号47: 紡錘車, z=-1.852

5月11日、遺跡西側の測点TS\_02にトータルステーションを設置して記録を開始する。出土番号48から60までを記録した。

出土番号48: 土器, z=-1.985、出土番号49: 土器(カップの基部), z=-2.575  
出土番号50: テラコッタ断片, z=-2.013、出土番号51: 鉄製品(ナイフ), z=-2.473  
出土番号52: テラコッタ(頭部欠損), z=-2.162、出土番号53: 土器(輪状), z=-2.578  
出土番号54: 小ビーズ, z=-2.017、出土番号55: 紡錘車, z=-1.852  
出土番号56: 柱基部, z=-2.686、出土番号57: 四角いビーズ, z=-2.858  
出土番号58: 紡錘車, z=-2.862、出土番号59: コイン, z=-3.014

出土番号60: 土器(小カップ),  $z=-2.818$

部屋8中央のゴミだめ(Yama01)の中からポット( $z=-3.365$ )が出土、さらにその下からコメが出土した。また、ポットの東側から多数の粘土球が発見された。これらは2010年の調査で出土したものと同一形状のものである。

5月12日、昨日の撤収時に Bluetooth の電源を切り忘れ、すっかり放電してしまっていた。急遽、ケーブルの接続に切り替えた。しかし、一人で操作するのであれば無線の利点も余りないと思った。午前中に出土番号61から66までを記録する。

出土番号61: 装身具断片,  $z=-2.938$ 、出土番号62: 土器(管),  $z=-2.523$

出土番号63: テラコッタ,  $z=-2.474$ 、出土番号64: 石器(砥石?),  $z=-0.927$

出土番号65: テラコッタ(馬頭部),  $z=-1.453$ 、出土番号66: テラコッタ(馬の体),  $z=-2.611$

午後から出土番号 67 から 73 までを記録した。

出土番号67: 紡錘車,  $z=-1.507$ 、出土番号68: 紡錘車,  $z=-1.740$

出土番号69: 鉄製品,  $z=-2.956$ 、出土番号70: 土器(錘?三つの印),  $z=-2.004$

出土番号71: 土器(輪状、大),  $z=-2.540$ 、出土番号72: 土器(輪状、小),  $z=-2.636$

出土番号73: テラコッタ(馬),  $z=-2.112$

5月13日、遺跡西側の測点 TS\_02 にトータルステーションを設置して記録を開始する。出土番号74から80までを記録した。

出土番号74: コインと紡錘車,  $z=-2.370$ 、出土番号75: 土器(柱基部),  $z=-3.481$

出土番号76: 紡錘車,  $z=-2.554$ 、出土番号77: 小青銅器碗,  $z=-2.926$

出土番号78: 紡錘車,  $z=-2.525$ 、出土番号79: 土器製テラコッタ型,  $z=-2.450$

出土番号80: テラコッタ断片,  $z=-2.784$

午後からは KKF-XI の西側に試掘用のトレンチ(幅5m)を掘ることとなる。西側の城壁の存在を確かめるためである。

これまでに見つかったゴミ溜めを記録した。ポポムロエフ館長の指示に従って番号をつけた。しかし、一部はまだ打ち合わせていないものもあり、仮の番号である。

ゴミ溜め1 (Yama 1):  $z=-4.128$ 、ゴミ溜め2 (Yama 2):  $z=-2.859$

ゴミ溜め3 (Yama 3):  $z=-3.308$ 、ゴミ溜め4 (Yama 4):  $z=-2.848$

ゴミ溜め5 (Yama 5):  $z=-2.269$ 、ゴミ溜め6 (Yama 6):  $z=-3.046$

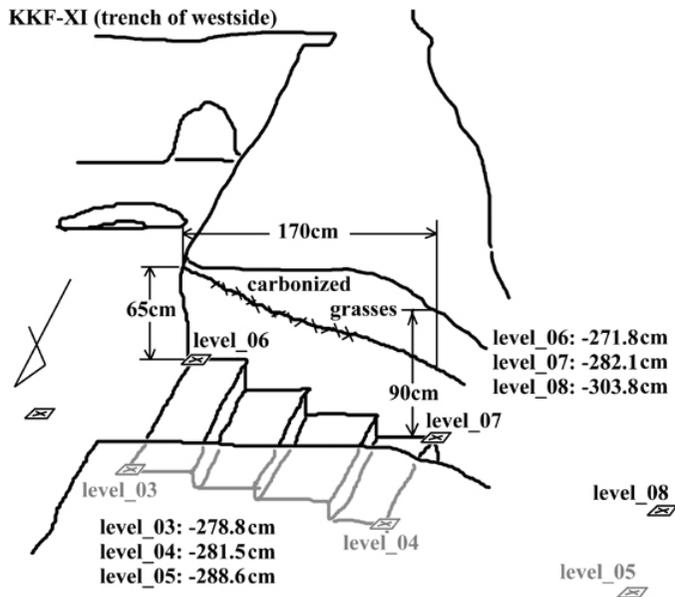
ゴミ溜め7 (Yama 7):  $z=-3.583$ 、

5月14日、遺跡西側の測点 TS\_02 にトータルステーションを設置して記録を開始する。すぐ目の前のポイントはターゲットが見えず、ポールを継ぎ足して計測する。ゴミ溜め5周辺の発掘で遺物が多く発見された。出土番号81から82までを記録した。

出土番号81: 金属製品, z=-1.766

出土番号82: 破損した金属碗, z=-2.694

昨日から発掘を開始したトレンチを記録した。6ヶ所でレベルを計測する。表層の下には炭化した草が斜めに約20°の傾きで見ることができる。城壁があったとは考えられない状況である。恐らくは大きな洪水が起きた時、カフィルニガン河の左岸が削り取られ、斜面となったのではないだろうか。遺跡の中央を北から南へ窪地がつづき、地表が緩やかに南へと、すなわち川下へと傾斜しているのは、町並みに洪水が浸水して流し去ったからではないかと推測される。



5月16日、ドシャンベへ移動、ホテルカヨン泊(休養)

5月17日から5月19日:ホテルカヨン泊(休養)博物館で今年度出土品の撮影

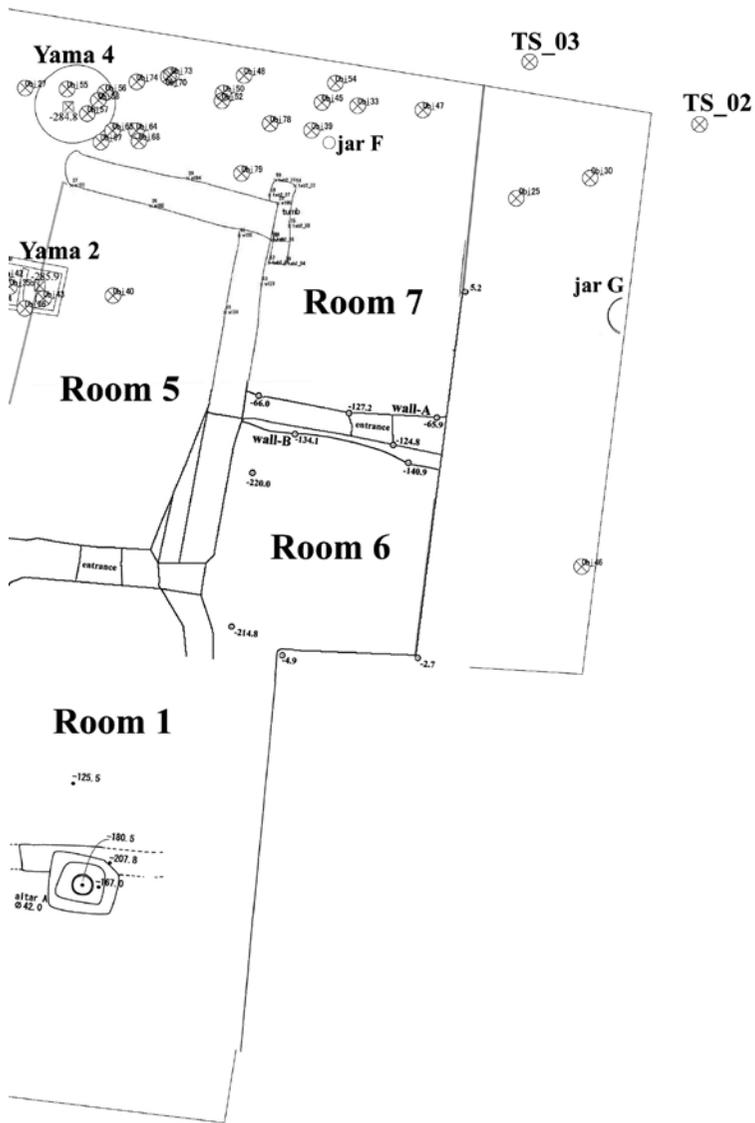
今年度出版予定の出土品カタログ作成についての打ち合わせ(18日には在タジキスタン日本大使及び大使館員2名に調査内容を報告・今後の協力依頼)

5月20日、ドシャンベ発、5月21日関空到着。

## II. 遺跡

遺構についての記録は2009年度報告を参照のこと

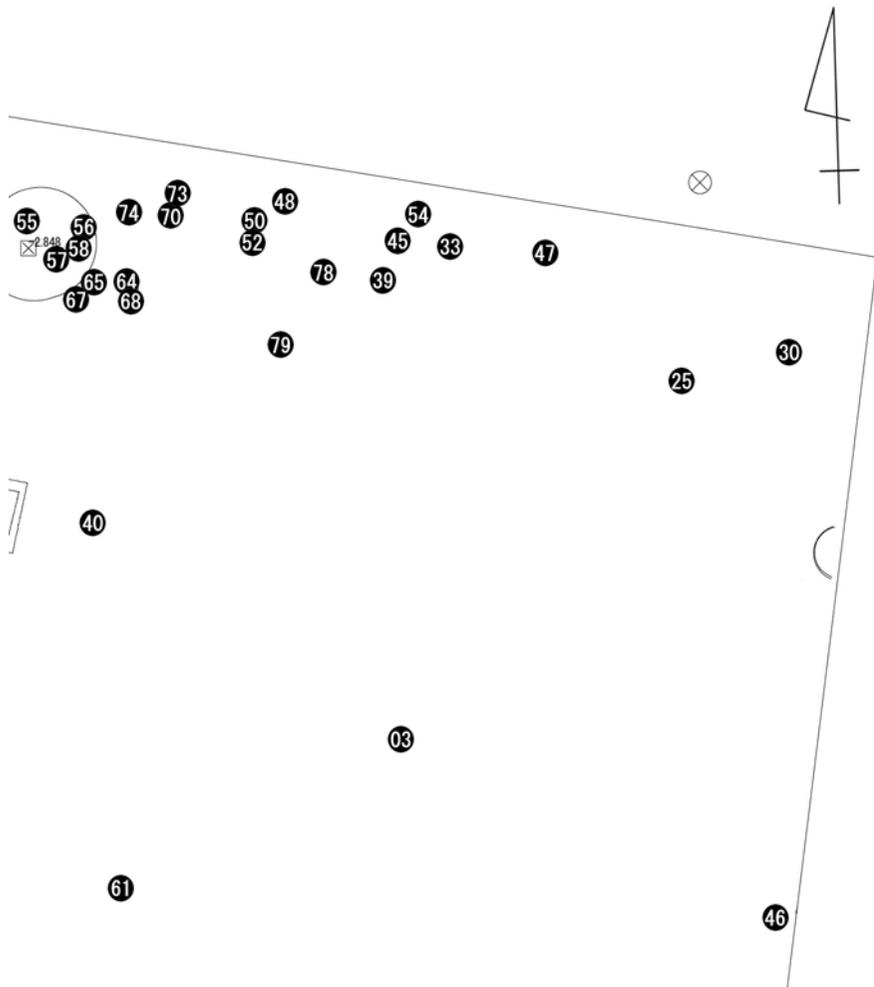




# 2013年度KKF-XI 遺物出土場所



●に白抜きの数字は出土番号(2013年度出土順)



### Ⅲ. 遺物

2013年度の調査では多数の遺物を発掘した。前掲の遺物分布図と口絵カラーページの写真資料を参照してもらいたい。

番号は出土番号(2013年度出土順)である。

#### テラコッタ:

02a(動物)、02c(菩薩像?)、22(羊)、33(犬)、36、40(羊)、42(頭部を欠く)、45(犬の頭部)、50(断片)、52(頭部を欠く)、63( )、65(犬の頭部)、66(ウマの胴体)、73(ウマ)、80(断片)

#### 土器:

05、09(杯)、10(チラク・灯明皿)、21(杯)、23(チラク・灯明皿)、28(小水差し)、31(漉し器)、32(断片)、34(小水差し)、35b(基部)、39(台)、41(断片)、44(杯の基部)、48(断片)、49(杯の基部)、53(チラク・灯明皿)、60(小杯)、62(管)、70(錘、三つの印章)、72(チラク・灯明皿)、75(柱基部)、79(テラコッタの型)

#### 紡錘車:

02b、06、17、24、27、37、38、47、55、58、67、68、74、76、78

#### 石器:

04、11、46、56、64

#### 鉄製品:

01(鍬)、03(鍬)、15(鍬)、26(ナイフ)、51(ナイフ)、69

#### 装飾品(貴石等)

07(貴石)、12(縞文様のビーズ)、13a(珊瑚)、13b(ネックレス断片)、16(貴石と青銅製鈴)、20(ビーズ2個)、29(貴石)、54(小ビーズ)、57(角ビーズ)

#### 金属製品:

14(青銅鈴)、18(コイン)、25(コイン)、30(コイン)、59(コイン)、61(装飾品断片)、74(コイン)、77(青銅碗)、81、82(青銅碗)

#### その他:

08(羊骨・玩具)、19(歯)

## 2013年度3月調査報告

### 概要

2014年の2月から3月にかけて、タジキスタン調査を実施した。この調査はこれまでに出土したテラコッタの主要なものについての3Dデータ測定を目的としていた。学校の春休み期間をその調査のために当てたが、学年末の仕事に追われ、3Dスキャナーの不具合も重なってあわただしい出国となった。その顛末も含めて報告することにしたい。

3月下旬の調査は何度か実施してきたが、2月下旬・3月初旬の調査は初めてのことである。往路のイスタンブールではドシャンベ行きのトルコ航空機が雪のため欠航となり、一日の間足止めを余儀なくされた。

### 日程表

日曜	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜(休)	土曜
						2/22 関空発 イスタンブール
2/23 イスタンブール 欠航・待機	2/24 イスタンブール発 ドシャンベ着	2/25 博物館にて 遺物3D測定	2/26 博物館にて 遺物3D測定	2/27 博物館にて 遺物3D測定	2/28 博物館にて 遺物3D測定	3/1 現地調査 ヒサール
3/2 博物館にて 遺物3D測定	3/3 ドシャンベ発 イスタンブール	3/4 イスタンブール発 関空着				

2月14日、午前中に中央仏教学院関係の採点・成績表を郵送する。大雪で道路は凍結し歩きづらいが電気店に出かけ、ビデオカメラのバッテリーを買おうとするが、海外仕様は扱っていないと断られる。昼過ぎに机の上を整理して、デスクトップPCと3Dスキャナーを接続して操作するが画像がずれて正常に作動しない。何度も試みるがずれてしまう。ネクスト・エンジンの取扱店であるシステム・クリエイト社に電話をして相談するが、ネクスト・エンジン社にメールを送ってくれとの返事であった。出発まで一週間程しかない中、修理に出しても間に合うはずもない。途方に暮れ、今回は断念するかと思う。去年の夏、試運転ではうまく動いていたのだが、キャプチャーが正常に働かなければ、画像取り込みなど不可能。就寝前に血圧を測るとかなり高くなっている。デスクトップとノートの2台に接続して試みるがうまくいかない。

2月15日、3Dスキャナーのことが気になって、早朝から目が覚める。断念する前に試せることは全てやってみようと思う。気になっていたターンテーブルを調べる。去年はガタつくことはなかったはずなのに、基盤部と回転部分がガタつく状態になっているのである。ダメで元々と思い、裏面のシール部分を外してみるとネジが緩んで外れている。回転させると回転部分が外れた。中を見ると歯車が噛み合って回転角を計測する構造である。これでスキャン画像が

ずれてしまったのだと判断できた。歯車を正しく噛み合わせた状態にしてネジをドライバーで締めてやる。ガタつきはこれで解決する。次にPCに接続して動作を確認する。何と正常にスキャン出来るではないか。回転角の情報が正しくなければ、複数のスキャン・データを統合する時にずれが生ずるということのようである。この騒ぎの中、血圧がまた高くなってしまった、何ともはやである。

2月16日、デスクトップPCとノートPCでスキャンができるかを確認する。週末の土曜日には調査に出発する。その前に何度も予行演習をやっておくに越したことはない。さまざまに設定を変えながらスキャンする。

2月17日、デスクトップPCの作業環境を向上させようと思い、メモリーを最大の16Gまで増設しようとするが、32ビットWindows7では4Gまでの制限があることを思い出す。64ビットにしようとするがクリーンインストールの後のアップデートに時間がかかり、またまた血圧上昇。

2月22日、関空出発、同23日、イスタンブール空港でトランジットのため半日待機の後、トラブル発生。ドシャンベ空港が積雪のためフライトがキャンセルされ、一旦、トルコ航空のホテルに移動して待機。翌日の午前3時にホテルを出て空港へ向かう。結局、24日の昼過ぎにドシャンベに到着。

2月25日から3月3日まで：ホテルカヨン2に宿泊

2月25日から28日まで：タジキスタン国立博物館で遺物を14点借り受けて3Dスキャナーで計測する。一点につき2時間前後を要し、出発前日の3月2日の午前中までかかって全てをスキャンすることができた。

調査対象：2007年～2013年までのカラ・イ・カフィルニガン調査で出土した  
神像を含めたテラコッタ14点

3月1日：国立博物館館長サイドムロド氏と他2名と一緒にタジキスタン・ドシャンベ中央直轄行政郡ギッサールギッサール郊外のブストン村で発掘調査ヒサール城址の近くに位置する仏教洞窟遺構を視察する。来年度の夏から4年間をこの遺跡発掘に着手する予定である。

参加者：ボボムロエフ館長、マルチエル研究員、ガフル研究員（運転手）、蓮池

3月2日：博物館にて今後の調査についての打ち合わせを行う。期間は8月末から9月初めを予定し、経費は従来と同様に、一万ドルを協力費として支出することを取り決める。

3月3日：ドシャンベ発

3月4日：関空到着

## I. 作業日誌

2月25日(火) 早朝、2回ほど目が覚める。痛風対策のため、その度に水を飲む。7時すぎに起床し、8時に食事をとる。博物館には10時に行くことと約束していたので、機材の準備をして9時半には出かける。博物館ではボボムロエフ館長が出迎えてくれた。事務室では息子のボボ君もいる。早速、キャノン用のバッテリーとメモリーを土産として手渡す。館長はすぐにカメラに取り付け動作確認をした。うまく動いたようだ。その後、博物館の展示室からテラコッタを2個借り出して3Dスキャナーで計測する。

最初は2007年出土の頭部を欠いたミフル神像をセットして3D\_Scan\_23. scnのファイル名でスキャンを開始する。12時過ぎに第1回目のスキャンが終了する。最も精度の高いスキャン法(16方面、22.5° 毎にスキャン)に設定しているため、50分ほどかかる。もっと粗いスキャン法(8方面、45° 毎にスキャン)でも測定できるのだが、データだけしか持ち帰ることができない状況の中、できる限り高精度のデータにしておきたいと考えた。昼食のためにホテルに帰るが、その間もスキャナーは作動させたままにしておく。午後1時半ごろに博物館に戻ったときには、第2回目のスキャンが終わりに近づいていた。原則的に、1個の遺物について、縦軸回転と横軸回転の2回のスキャンを実施した。

午後2時過ぎに次のテラコッタ、宝冠を戴いた菩薩と思しき小像をスキャンする。ファイル名は3D\_Scan\_24. scnである。午後4時までには縦軸回転、横軸回転の2回のスキャンが終了する。ホテルに戻り、今日測定したデータをバックアップする。ただし、あまり触らないうちに一度バックアップすることが肝要なようである。データ編集をしようとしたが、その前の自動バックアップの段階でフリーズしてしまう。何とか操作してデータを復元することができたが、冷や汗ものだった。ノートPCのメモリーでは十分な編集作業はできないと割り切らねばならないようである。具体的な作業は帰国後にデスクトップPCでやるしかない。

2月26日(水) 夜中に左足膝下に違和感をおぼえる。痛風の前兆のようだが、今起こったらつらいことになる。水を必死で飲むが痛くなったらそれまでだ。ホテルを出て、9時に博物館に着く。ボボムロエフ館長に依頼していたSIMカードを受け取るとモバイルに装着する。難なくメールを受信することができた。来るたびに更新しなければ使えないようである。

博物館の展示室に行き、テラコッタ5点を持ち出す。昨年出土の7点を加えて12点が調査対象である。昨日測定した2点を合わせて14点となる。

10時ころからミフル神像型の計測を開始する。ファイル名は3D\_Scan\_25. scnである。

昼食をはさんで、午後1時から彌勒菩薩のような上半身像をスキャンする。ファイル名は3D\_Scan\_26. scnである。

午後3時から半月を手にした神像の型をスキャンする。ファイル名は3D\_Scan\_27. scnである。午後5時には計測終了。荷物をホテルに置いて、徒歩でチャイハナへ向かう。ポポムロエフ館長と息子のポポ君、博物館員のマルチエル氏と蓮池の4人である。街中はいたるところで道路工事をやっていて、交通の不便は相当なものだろう。足が思わしくないのでウオッカ3杯でグラスを伏せた。

2月27日(木)4時半起床。昨日のウオッカ3杯はそれほど残ってはいないし、左足の膝もまだ痛くないようだ。昨日のデータをUSBにバックアップしておく。1つのファイルが4~7Gバイトというとんでもない大きさで、32GのUSBに23から27まで入れたところで80%ほどになってしまった。残りは16GのUSBを2個用意しているが、少し足りない可能性もある。

9時前にメールチェックすると大学教務から問い合わせのメールが届いている。博物館に移動して返事を送信するが30分ほど時間を費やしてしまう。9時半からスキャン開始。ファイル名は3D\_Scan\_28. scnである。2回目の計測も終わろうという頃、遺物が倒れる。ターンテーブルが傾いていたのが原因である。ほぼ1時間を無駄にしてしまった。最初からやり直す。

次の3D\_Scan\_29. scnの第1回スキャンでは、スキャン画像がずれてしまい、さらに最後の16番目のスキャンで画面がフリーズする。出発前のトラブルとは違ってターンテーブルのネジは緩んではない。一度電源を切って再起動し、やっと動き出す。11時半に最初からやり直す。ノートPCのメモリーが8Gしかないのがそもそもの原因かもしれない。

昼食後に3D\_Scan\_30. scn、3D\_Scan\_31. scnをスキャンする。午後5時までには何とか終わらせることができた。

2月28日(金)4時半起床。昨日のスキャンのバックアップをとっておく。大学の瀬田研究課から回答のメールが届いている。年をまたいだ支出は基金の形を取った今年度から可能であるとのことで、安堵する。タジキスタン側のカタログ出版が今年度中には間に合わないことを相談したことに対する回答である。

9時すぎに博物館に着いて作業を開始しようとするが、停電である。11時すぎにようやく電気が来たので、午前中に3D\_Scan\_32. scnをスキャンする。昼食はパンをかじりながら午後の作業を続け、3D\_Scan\_33. scnと3D\_Scan\_34. scnをスキャンする。33と34は一部を欠いた断片でもあり、横軸回転の16面のスキャンをやめて、上と下から3面の測定で済ませた。残るは2点である。明日は来年度以降の発掘調査候補地の視察である。

3月1日(土)4時半起床。少々下痢気味である。9時に博物館集合。ガフール氏運転のジープ

で、ボボムロエフ館長、博物館員マルチエル氏そして蓮池の4名で来年度の発掘調査予定の遺跡視察に出かける。

ドシャンベから西南西へ約20Kmのギッサール市街を経て、さらに南南東へ約7kmのギッサールに入り、9時40分にはヒサール城址に到着する。周辺のキャラバンサライ跡やイスラーム寺院を改装した博物館を視察、科学アカデミーの研究所にも立ち寄る。ヒサール城址は修復工事の最中であった。

10時15分に城址を出て、ブストン村に10時半頃到着する。丘の側面に掘られた洞窟を視察するが、石窟寺院であるのかは判断しかねる状態である。ブストン村のイスラーム墓地に仏教寺院の遺構が埋もれている可能性があるということで、発掘調査の候補地も訪ねてみた。夕刻にはドシャンベのホテルに帰り着く。

3月2日(日)4時半に起床。2体のテラコッタの測定が残っているので、本日中に完了しなければならない。9時に博物館に入り、一昨日の連番がどこまでいったのかを確かめる暇も惜しくて、40、41の番号を付けてスキャンを開始する。午後1時まで作業を延長してどうにかスキャンを完了。3Dスキャナーは、通関を通るたびに検閲を受けるのも厄介だと思い、博物館に預けることにした。スキャナーを操作するPC側のソフトも博物館事務所のデスクトップPCにインストールして、館員のボボ君に操作の手ほどきをする。

3月3日、2時起床。ホテルまでボボ君が車で迎えに来て、空港まで送ってくれる。荷物は手荷物以外はスーツケース1個で、発掘調査の時に比べてまったく身軽である。4日の夕方には関空に到着する。

## II. 3Dデータの処理

ネクスト・エンジンの画像編集ソフトを使ってstl形式のファイルを作成した。デスクトップPCのメモリーは最大限の16Gバイトに増設したが、それでもかなりの処理時間を要し、ハングアップすることも度々であった。しかし、何とか14点の遺物についての作業も終了した。

stl形式のファイルでは簡単に閲覧することもできないので、3D-PDFに変換してホームページに掲載した。

以下に示した画像はPDF画像から三面図として作成したものである。



KII 1194-355

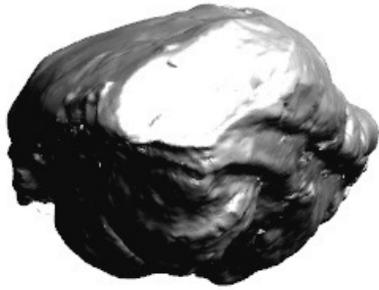
高さ : 9.0cm

幅 : 3.0cm



【ミフル神坐像】 首から上は欠損しているが、王座に坐する姿を取り、右手には三叉の聖杖、左手にはマジマル(携帯型拝火炉)、膝下には拝火壇が置かれる。下半身の背面には放射状に光線が描かれる。胸には鎖帷子が描かれ、襟元には鎧具が認められる。ミフル神の軍神としての特徴をよく表現している像である。

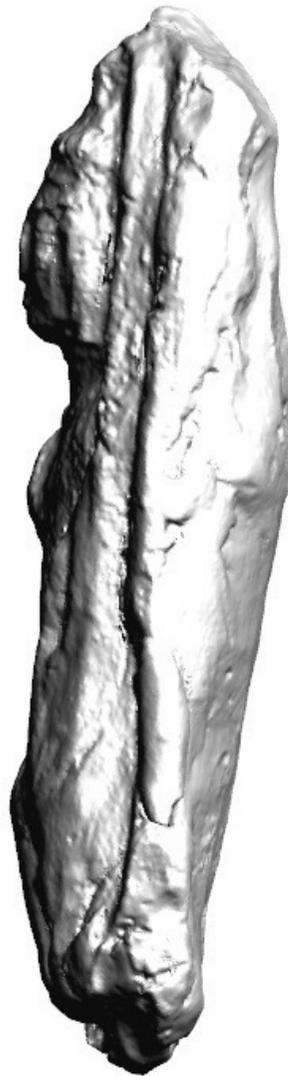
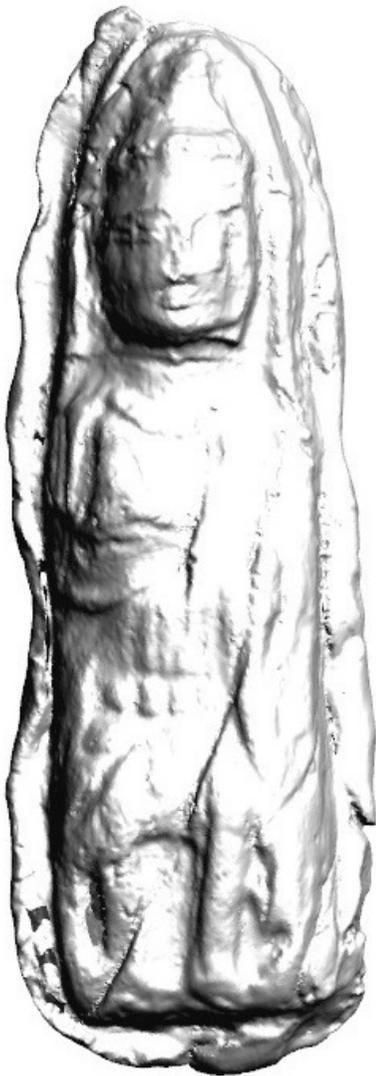
このテラコッタと KII 1194-181 の型は2007年度の最初の発掘で出土したもので、膝下に拝火壇を置く構図はクシャーン朝コインに刻まれるカニシカ王等が拝火壇に手を差し伸べる姿と同じ意義を示すものである。

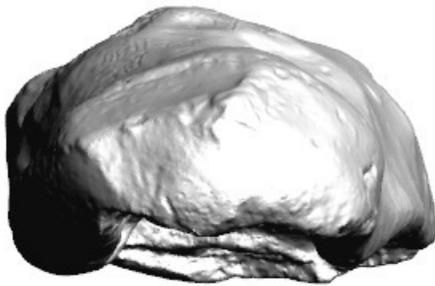


КП 1194-2011

高さ : 11.6cm

幅 : 3.7cm





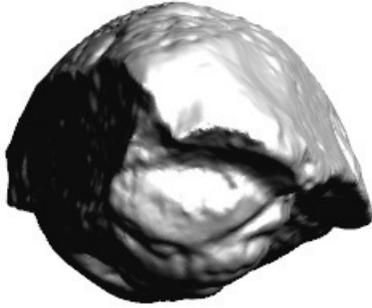
KП 1194-181

高さ : 11.2cm

幅 : 5.3cm



【ミフル神坐像型】 聖杖を右手に、膝下の拝火壇に左手を差し伸べる構図は左右が逆ではあるものの、クシャーン朝コインの王の姿と一致する。



KΠ 1194-1118

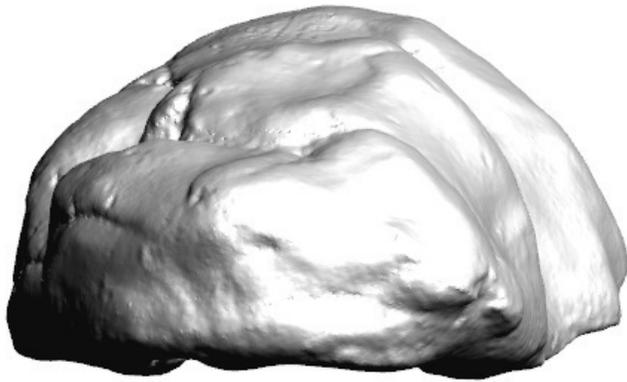
高さ : 5.9cm

幅 : 3.3cm



【菩薩像】 2013年度の発掘で出土した高さ6cmほどの上半身断片である。この像の顔立ちは半跏思惟弥勒菩薩像の容貌と同じように思われるし、7世紀の中宮寺や広隆寺の弥勒象に見られるアルカイク・スマイルと同じ微笑みをたたえている。時代的にもそれほど離れていないと考えられるこの像は弥勒菩薩像の伝来を考える上でも重要なものとなるであろう。

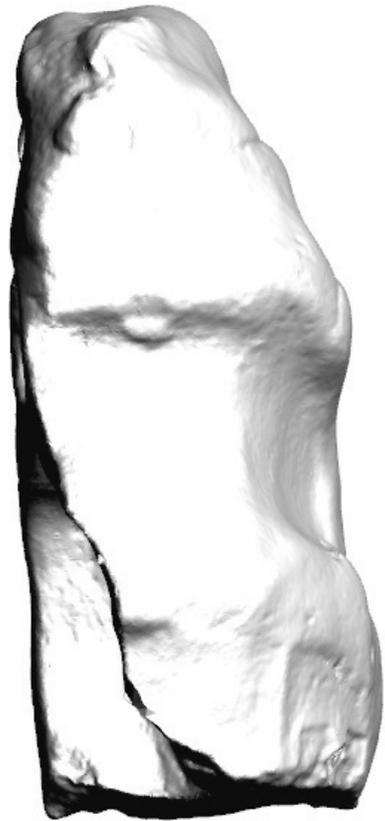
クシャーン朝のコインには神像とともにミイロと刻印されたものがある。それはミトラ(ミフル)からの転訛恩であり、漢訳語の弥勒もこのミイロを音写したものと考えるのが妥当である。



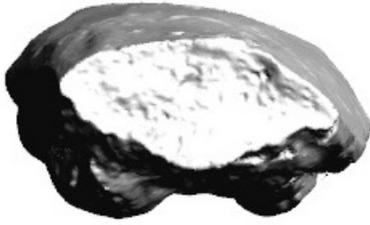
KII 1194-1253

高さ : 7.9cm

幅 : 5.8cm



KII 1194-1150、2045と同じ神格だと考えられる。この型から右手に半月を掲げていることが明らかとなる。ミフルが昼天を司るのに対して、この神は夜天を司るものであろう。インド神話におけるヴァルナ神に相当するものと考えられる。ヴァルナ神が最高神に上り詰めたものがアフラマズダーであるとする学説を検討する上で示唆に富む遺物である。



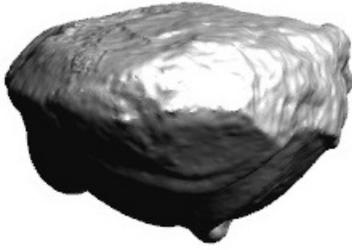
KII 1194-1267

高さ : 8.7cm

幅 : 4.0cm



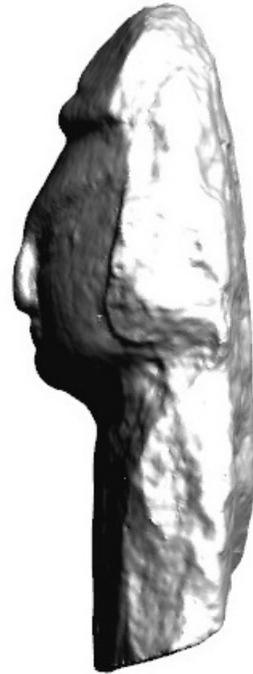
【毘沙門天？】 KII 1194-2011 と同じ神格。2011 では左手の持ち物が不鮮明であるが、この像との比較によって、鎧をまとい、三叉の聖杖を持ち、右手には炎の立ち上がるマジマル（携帯持火炉）を掲げていることが判る。法隆寺の毘沙門天像の姿と酷似するこの像は、宮崎市定「毘沙門天信仰の東漸に就て」に提起される四天王起源を裏付ける重要な証拠となる。



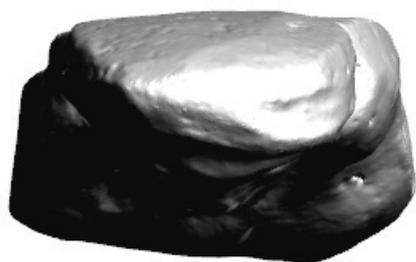
KП 1194-1119

高さ : 6.5cm

幅 : 3.3cm



ボボムロエフ館長の説によれば、吊り上った目の描写は中国系の人を表す。東西の交易にと  
もない中国商人も多く中央アジアを訪れたことをうかがわせる遺物である。

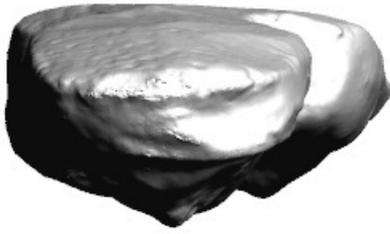


KП 1194-1150

高さ : 10.5cm

幅 : 4.0cm





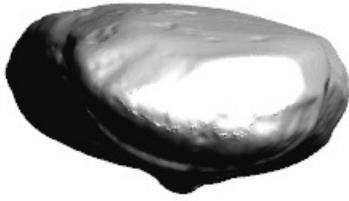
KII 1194-2045

高さ : 6.6cm

幅 : 3.5cm



【ヴァルナ神像】上半身のみ残った断片であるが、前ページの KII 1194-1150 と同じ型によって作られたものと思われる。唇の両端が上に上がっているようにも見えるが、KII 1194-1253 の同神格を表したものとみられる型から判断して、鼻ひげをたくわえているものと思われる。右手に掲げる半円状のものも、容器のようにも見えるが、これも型から判断して半月を掲げ持つものと考えられる。



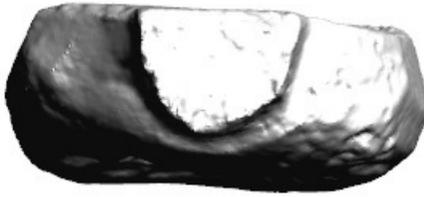
KII 1194-20101

高さ : 9.0cm

幅 : 3.2cm



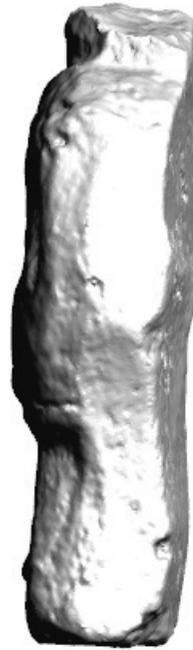
【フラワシ・女性像】ゾロアスター教の祖霊崇拝を示す像だと考えられる。祖霊はフラワシと呼ばれ、子孫を守護し、春分の日には地上の子孫の所に訪れる。子孫は供物をささげ共餐することで歓待する。



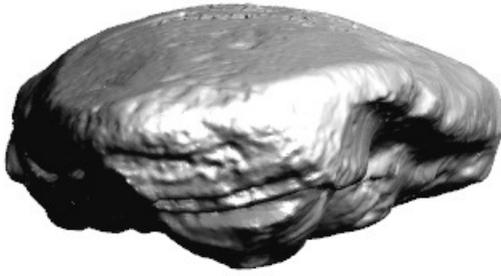
КП 1194-1151

高さ : 6.2cm

幅 : 4.1cm



【フラワシ像？】 頭部を欠くため、正確な判断は困難である。



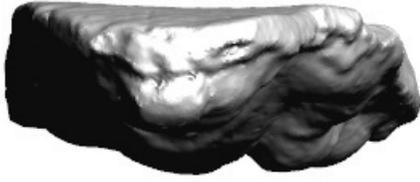
KΠ 1194-781

高さ : 8.3cm

幅 : 5.2cm



【神像】 下半身は欠損、上半身も不鮮明であり正確な判断は困難である。右手に半月を持つのであれば KΠ 1194-1150、KΠ 1194-2045 と同様、ヴァルナ神像である可能性もある。



KΠ 1194-879

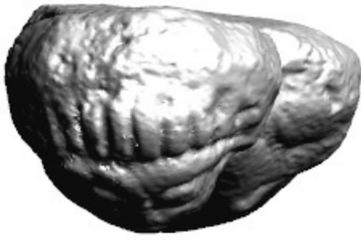
高さ : 6.6cm

幅 : 3.4cm



【邪神像】 ゾロアスター教の邪神はアフラマズダーに対抗する破壊霊・アフリマンに与するものである。ダーエワはインドにおけるデーヴァに対応するが、ゾロアスター教では善悪の判断を誤って、悪を選択したものと考えられている。

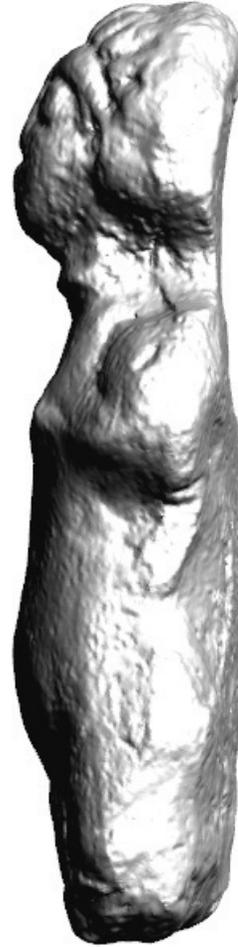
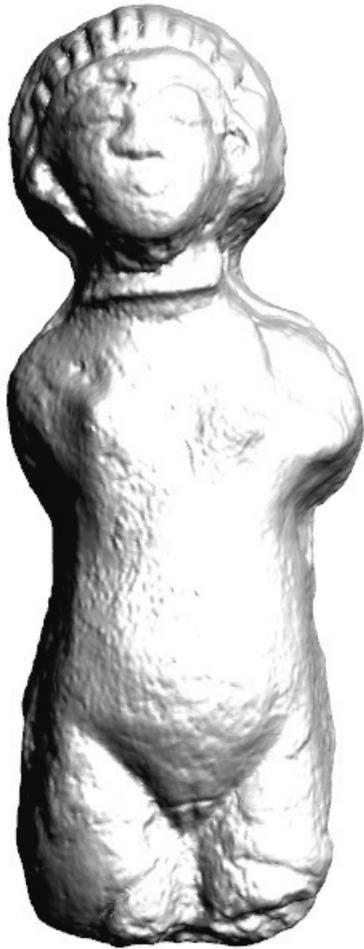
毘沙門天に踏み敷かれた邪鬼の姿を彷彿とさせるものがある。



KII 1194-1219

高さ : 10.3cm

幅 : 3.9 cm



【女性裸像】 豊穰多産を願う女神像、地母神に近い神格のように思われる。

## 考察篇

1. 方形拝火寺院遺構発見の意義
2. 仏教方形寺院遺構との関連
3. バクトリア語(クシャーナ文字)銘文の発見の意義
4. 炭素14検査と遺跡年代について

### 1. 方形拝火寺院遺構発見の意義

2009年度の調査で方形拝火寺院遺構が発見され、2010年度の調査ではその周辺の複合施設も発掘することができた。タジキスタンの拝火教信仰の研究において、方形拝火寺院がタジキスタン中部地域で発見されたことには大きな意義がある。1970年代、タジキスタン北部、ペンジケントをはじめとするゼラフシャン河流域で発掘調査が実施され、多数の拝火教寺院及び宮殿内や一般住居内の神殿が発見されている。寺院という宗教施設のみに限らず、一般の人々が住む居住区内に聖域として神殿が設置され、その中心に火を祀る祭壇が置かれる。それは例えば日本の仏教徒が仏壇を家庭内に設置するのと同じようなものであったと考えられよう。家長が供物を用意し、宗教的儀礼を催し、先祖の靈魂への崇拜が行われていたのである。

Y.ヤクボフ著『古代ソグドの宗教』には、タジキスタン北部発掘調査について述べた「山地ソグドの拝火教」の中で、

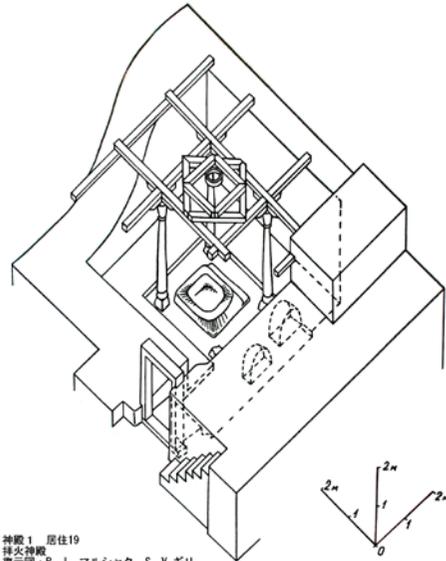
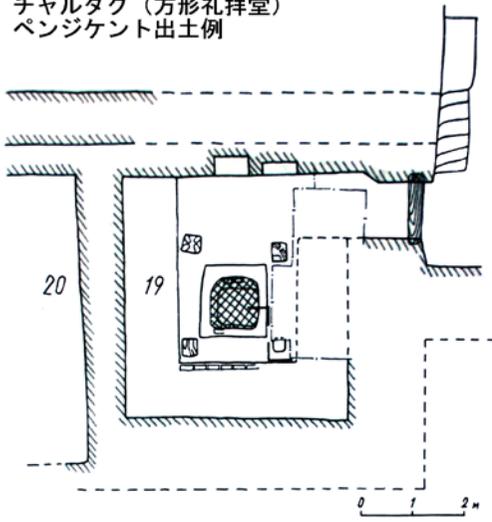
古代ペンジケントの在家祭壇を研究している B.L.ヴァロニンは、「裕福な居住建造物の構成においては、低い壁龕形式の祭壇を備えた在家の神殿、礼拝堂あるいは勤行堂があった。その区画では儀礼的な一まとまりの部屋があって、礼拝堂と広間がつながっている場合、礼拝堂には儀礼用の中心は用意されていない、居住区域の中に置かれていた。簡素なあるいは狭い区画では祭壇は特別な部屋に置かれたのではなく、バルコニーあるいはおそらく居住空間に置かれたと考えられる。」  
(ヴァロニン、1964年、p.71) (『古代ソグドの宗教』p.24)

…中略…このように、中世初期のソグドやその他の中央アジアの地域では、広間や富裕な家屋に、様々な大きさ様々な形の祭壇用構造物があった。おそらく、広間や家屋の中の分離式祭壇には二つの役割(信仰のための聖火と暖房や炊事といった生活のための火)があったのであろう。しかし、主にそれらは宗教的のものであった、なぜなら施設の中はこれらの祭壇が置かれ、彩色がなされていたからである。また、それ故に特別であり、さらには、隆起部において火が燃やされたという疑う余地のない事実は儀礼としての意義がもっとも相応しい。なぜなら、最も初期のイラン民族の拝火祭壇は方形、台形、丸そして様々な高さの台状の隆起部であった。

(『古代ソグドの宗教』p.28)

以上のような記述の他に、70年代に実施された遺跡発掘の報告書には拝火神殿の平面図と復元図が掲載されている。次に示すペンジケントの方形拝火寺院の平面図はKKF-Xの方形拝火寺院の平面図と同じ特徴を示している。

チャルタク（方形礼拝堂）  
ペンジケント出土例



神殿 1 居住 19  
拝火壇  
復元図：B. I. マルシャク, S. V. ギリ

さらに、2007年度発掘によってKKF-X 第1室南隣の工房跡からテラコッタのミフル神像を作成する土器製型が出土している。型から復元した像が下図左である。また KKF-XI から、頭部を欠くものと同じミフル神のテラコッタが出土している。

左手の描き方が違ってはいるものの、それ以外は共通する特徴を示している。王座に座った姿勢を取り、右手には三叉の聖杖を持ち、膝下には拝火壇が配されている。下図では拝火壇を並べて示してみた。型からの復元像では左右の肩の上に突起がみられるが、ミフル神像との比較によって、それが鎧の一部であることがわかる。これはミフル神が軍神であることをよく表している。



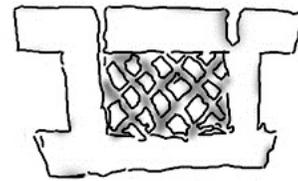
型からの復元像



ミフル神像



拝火壇（左）



拝火壇（右）

また、2008年度には、神像断片(下図下左)が第一室東隣、庭3の新旧炉 CとC' 周辺から出土している。小型マジマル(聖火用炉: 次頁図中)や燈明皿なども多数発見されている。これらのことから、拝火教の信仰が広く行われていたことがうかがえる。

特に2007年度に、KKF-X の方形拝火寺院の付属工房から神像型が出土したことには注目すべきであろう。神像はこの寺院の参拝者に下付されて、前述のヴァロニンの解説にもあったように、各家庭の祭壇に祀られたと考えられるのである。2009年にもKKF-XIから神像が出土している。下図右に示すように、下半身が欠損して、拝火壇が描かれていたかどうかは知ることができないが、右手の位置や頭髮の表現から見て、同じミフル神像の可能性が高い。



2008年出土 神像断片



マジマル



2009年出土の神像

2008年、KKF-XI では拝火祭壇の円柱を支える基礎部分が発掘され、祭壇遺構周辺の石畳状遺構も北部タジキスタンの遺跡と一致する。

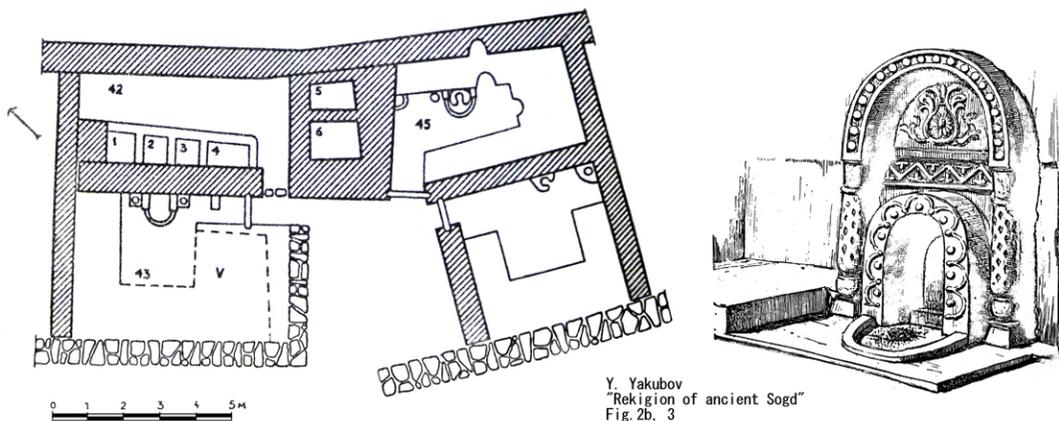


2009年に作成した XI 平面図 (p.12 参照) では、ほぼ中央に南北に並んで一対のピラミッド状台形の礎石が並んでいる。さらにその南側に石畳状遺構が東西に三列残っていた。この上に柱が立ち、バルコニー状の建築物 (アイワーン) が建てられていた。

現在では、発掘が進む中、一対の礎石と石畳状遺構は取り上げられ、バクトリア期の層にまで至っている。

Y.ヤクボフ著『古代ソグドの宗教』には壁龕式祭壇を中心とする神殿についても多数言及している。半円状の張り出し炉、タシュタクを覆うように祭壇が設置される。

下図右にある復元図では暖炉のような形をした壁龕に二重のアーチが付けられている。壁龕式の祭壇であり、両脇の円柱の基礎部分にピラミッド状台形の礎盤が置かれている。また、下図左の平面図では第 43 室の北東壁に壁龕式祭壇があり、半円形に張り出したタシュタクと両脇のピラミッド状礎石が描かれているのを確認することができる。

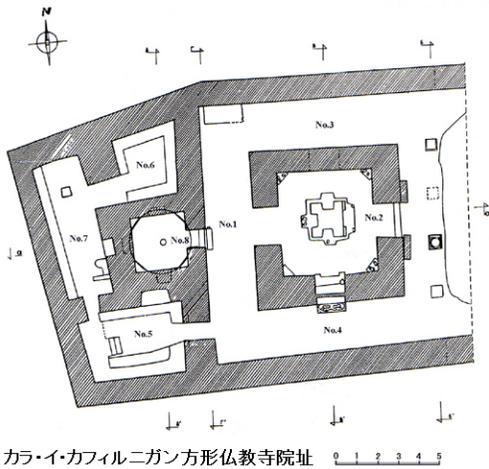


以上の方形拝火寺院と壁龕式祭壇の神殿は宮殿や居住区に任意に設置され、複合施設を構成する。ペンジケント周辺の北部タジキスタンの遺跡ではそのような複合施設が多く発掘されていて、KKF-X と KKF-XI の遺構構成もそれらと一致する。

北部タジキスタンではそのような複合施設において、拝火教と偶像崇拜、さらには祖先崇拜とが融合したような習俗化したゾロアスター教が信仰されていた。このことから、タジキスタン中部においても同様な宗教が九世紀頃のイスラーム化以前まで信仰されていたことが証明されたことになる。

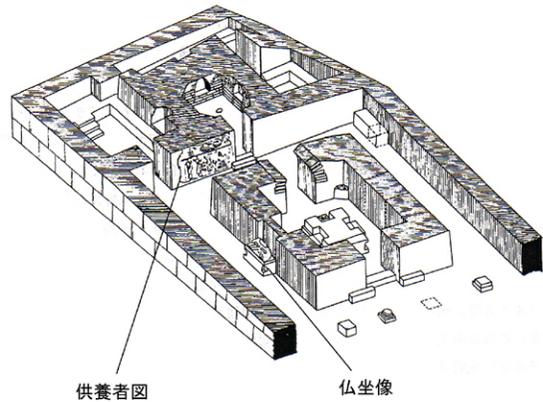
さて、そのような宗教的背景が明らかとなったことで、仏教寺院との関わりもより具体的な形で論議できるようになったと考えられる。タジキスタンにおける方形仏堂の存在は 1970 年代の調査報告書によって知られていた。その中でも注目すべき調査が、リトヴィンスキーを団長とする南タジキスタン探検隊によって実施されている。

カラ・イ・カフィルニガン方形仏堂址 2004年撮影



カラ・イ・カフィルニガン方形仏教寺院址

上図写真はほぼ下図鳥瞰図と同方向



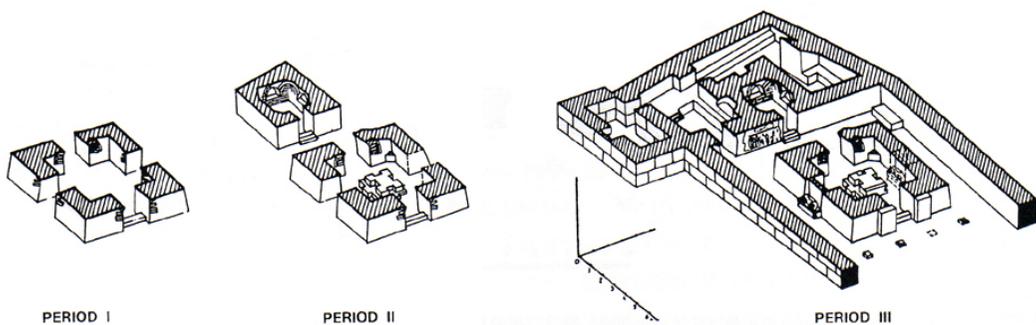
カラ・イ・カフィルニガン(カレ・コファルニホン)遺跡にある遺構は城砦の中に作られた仏堂があり、仏供養者を描いた壁画と仏塑像の結跏趺座した下半身部分が出土している。仏供養者図には王侯貴族の女性とみられる人物が手に供物を持って立っている。同じく、出家僧が描かれており、在俗の人と出家者が同等に仏前に供養を行う構図である。このカラ・イ・カフィルニガン遺跡以外にも、同じ形式による仏堂の存在は、中央アジア地域に数例確認されている。世俗的住居群の中に仏堂が存在するという点においては西域南道に散在する仏堂遺構と同じ特徴を持っている。

壁画はNO.1室の西面に描かれ、仏塑像はNo.4室の内壁に設置されていた。遺構見取り図に示した場所を参照のこと。

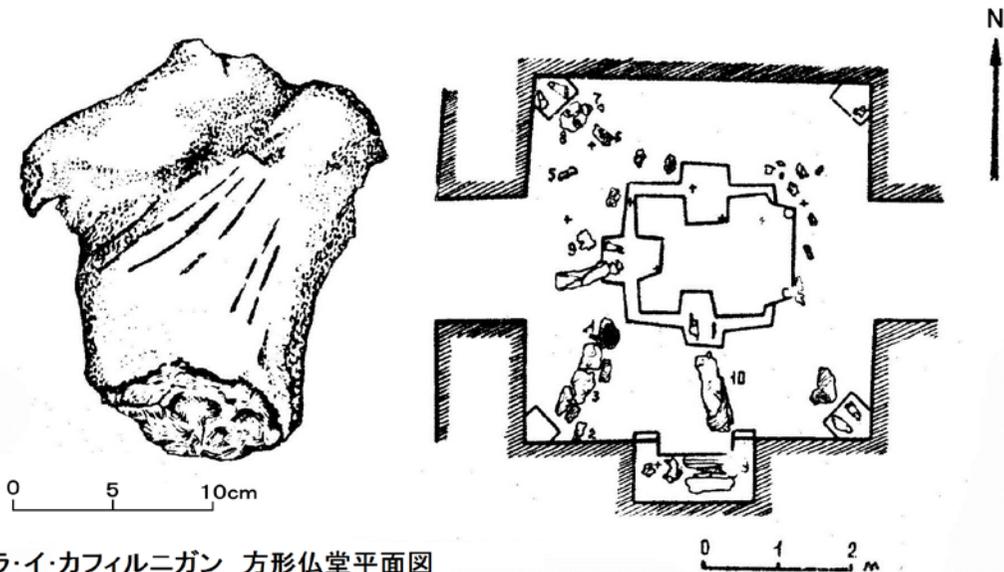


カラ・イ・カフィルニガン出土 壁画と仏坐像

リトヴィンスキーの報告書によれば、この仏堂と付随する施設は三期にわたって増設されたという。その最初期は5～7世紀に遡り、中心となる方形仏堂部分はイランの方形拝火寺院の構造に酷似していることが指摘されている。この仏教寺院に付随する建築様式にはインドとイランの二つの要素が統合されていると指摘されているのである。この見解は先に述べたように、2008年の発掘調査で拝火教方形寺院が発見されたことにより、その妥当性が確認されたことになる。

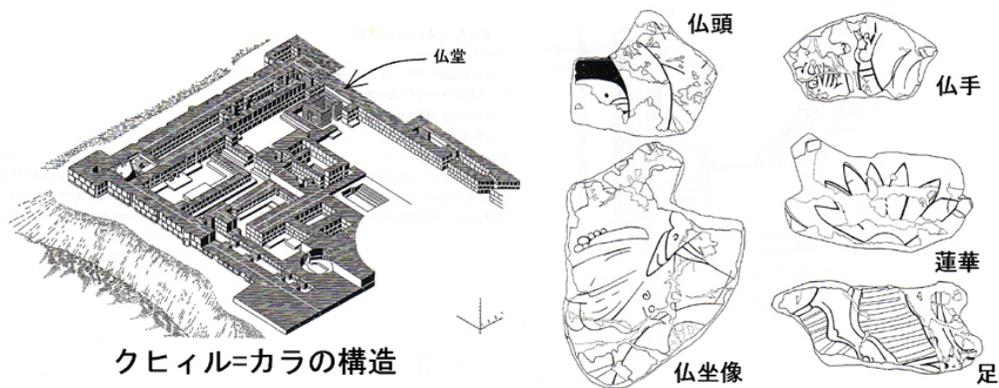


拝火教施設が仏教へと転用されたとなれば、その建築様式だけでなく、信仰の面における影響もあったはずである。リトヴィンスキーの報告書には仏堂の内陣が描かれている。その四隅には台座が設けられ、その上には塑像の足首部分が残されている。神像であるか天王像であるかを特定することは困難である。しかし、拝火教寺院に置かれた神々が仏教寺院に取り入れられた可能性も大きいであろう。



カラ・イ・カフィルニガン 方形仏堂平面図

同様な都城址はタジキスタン南部・ハトロン州にあるクヒールカラ遺跡にも残されている。この遺跡も1970年代に発掘が実施されている。都城址とは、城壁に囲まれた古代・中世の小都市で、ふつう領主の住んだ内城(ツィタデリ)と一般住民の住んだ城壁内居住区(シャフリスタン)および城壁外の農民居住区(ラバド)の3部分から構成される。先のカラ・イ・カフィルニガン遺跡も同じ構成ではあるが、クヒールカラ都城址の方がより整った構成である。



クヒール=カラの構造

上図は内城部分の鳥瞰図であり、仏堂は内城南東角に設置されていた。この仏堂の平面図も方形であり、回廊が周りを囲む形式になっている。注目すべき点として、仏画断片が出土している。蓮華も描かれている。これは西域南道に散在する方形仏堂遺構とも共通する特色であり、初期浄土信仰との関連を示唆するものである。

## 2. 仏教方形寺院遺構との関連

以上の中央アジア方形寺院についての記述中、西域南道の方形寺院については、たびたび論及してきたが、まずその二つの地域の歴史的背景について指摘しておきたい。

何よりも注目すべきことはカローシュティー文字の分布が示すイラン系文化の影響である。アケメネス朝ペルシアではセム系のアラム文字が公用文字として使われていたが、カローシュティー文字はそのアラム文字から作られた文字である。この文字が使用された地域は時代とともに推移している。紀元前三世紀ころにはイラン東部に位置するバクトリアで使用された。ギリシア文字とカローシュティー文字が刻印されたグレコ・カローシュティー・コインが知られている。その後は紀元後一世紀ころに北西インドの初期クシャーণ朝において使われた。仏像や奉納物に刻まれた寄進銘文が多く残されている。これとほぼ同じ時期に西域南道のオアシス都市であるホータン地区で漢字とカローシュティー文字が刻印されたシノ・カローシュティー・コインが作られた。このような文字の伝播から想定される人々の移動は『大唐西域記』にも記述があり、それによればホータンの住民はアショーカ王の時代にガンダーラ地域のタキシラから移住してきたとされている。タキシラはアショーカ王碑銘にカローシュティー文字が使用された地域であり、銘文全文にわたってのカローシュティー文字使用はタキシラと近接するマンセーラとシャーヴァツガレーヒに限られている。この移民はチベットの歴史書にも記述があり、チベット仏伝『于闐国授記』には、夜叉大臣と一族七〇〇〇人が移住したとの記録がある。このような大規模な移民が事実であったかを証明するのは難しいが、小規模な形で徐々に移動定住が進んだと考えるのが妥当なようである。

このようなイラン系文化の広がりを『大唐西域記』ではトハーラ(覩貨邏)という語で表している。トハーラ(覩貨邏)とは、アム河流域、現在のアフガニスタン北部からウズベキスタン・タジキスタン南部に広がる地域、あるいは民族名である。トハーラ族が紀元前二世紀にバクトリアを滅ぼして以来、この地域をトハーラと呼んだ。紀元前一世紀には大月氏に支配されたが、その後も存続した。クシャーণ朝はこのトハーラ族の子孫であったと考えられている。

このトハーラ(覩貨邏)について、玄奘は「覩貨邏国」、「覩貨邏の故地」、「覩貨邏の故国」という表現で言及している。第一巻には、

鉄門を出ると覩貨邏國に至る。その地は南北千余里東西三千余里、東は葱嶺(パミール)にふさがれ、西は波刺斯(ペルシア)に接する。南は大雪山(ヒマラヤ)、北は鉄門による。縛芻大河(ヴァクシュ川)が中境を西流す。数百年より王族は嗣を絶ち、酋豪は力を競い各々に君長を擅ず。川に依り陰によりて、分かちて二七ヶ国を為す。

とあり、また、第一二巻には、同地域について一三ヶ国を挙げて「覩貨邏の故地」と記している。タジキスタンの歴史区分では、この前後(七～八世紀)の時期あるいは関連地域をトハリスタンと呼んでいる。

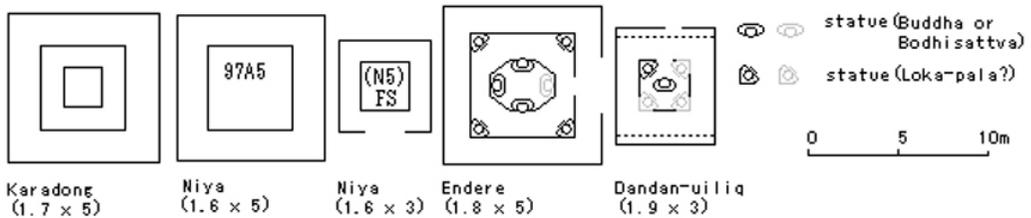
筆者はこれまで西域南道の方形仏堂と常行三昧堂の関係について研究を継続してきた。その中

での課題が方形施設の起源であった。西域南道に散在する方形仏堂の特徴として在家空間に設置されることである。それは西域北道の僧院窟が出家者中心の施設であることと大きく相違する特徴である。僧院窟がインドのチャイトヤ(靈廟)形式を起源とし、出家僧の禪定実践の場であるのに対し、西域南道の仏堂は浄土世界への往生を主要な目的としている。蓮華の華に包まれて浄土へ生まれるという憧憬がその根底にあるように思われる。それは中央アジアの人々の冥途観と関わる。

カラ・イ・カフィルニガンやクヒルカラの方形仏堂が西域南道の方形仏堂の起源であり、さらに先述のように、タジキスタンの同じ城砦遺跡内に仏教方形仏堂と拝火方形寺院が併存していたことは、拝火方形寺院が転用されて仏教方形仏堂ができたことを推測させる。エンデレやダンダン・ウイリクでは四天王像と見られる像が中央壇の四隅に置かれていた。これもカラ・イ・カフィルニガンの仏堂と共通する構造である。

西域南道には北西インドや中央アジアから人々が移住し、玄奘『大唐西域記』にはトカラの故地と記述されている。ニヤ、ダンダン・ウイリク、エンデレなどはそのトカラの故地の領域に入る。

### 西域南道の有心堂形式遺構



ニヤ遺跡方形仏堂址 (FS)



隣接住居址出土の四天王像

『ニヤ遺跡調査報告書』から方形仏堂周辺の遺構について記述している部分を引用してみたい。次頁図は方形仏堂がある遺構群である。スタインが発掘した際には、FC(役所的施設)から多数

のカラーシュティー木簡が出土し、その内容からこの施設が役所的性格であったことが判明している。周囲には垣根が廻らされており、倉庫と仏堂が同じ敷地内に建てられていたことがわかる。前頁右の柱の両面に彫られた神像はFD(倉庫)Ⅲの柱周辺に横積み状態で出土している。

93A35 (N5) 建物群模式図



人々の移住にともなう建築様式の継承を上図平面図FDI南壁と東壁に沿って付設された土壇に見ることができる。ニヤ遺跡調査の際にはベッド状遺構と呼んでいたが、これはタジキスタンのソファー状段と同じ建築様式である。また、アイワーン様式も西域南道の遺跡では多く見ることができる。



①全景（南西より）



②方形仏堂（FS）（西より）



③氷室（FB）（西より）



④役所的施設（FC）（南西より）

タジキスタンにおける2009年度調査で出土した礎石はニヤ遺跡の方形仏堂中央壇の四隅に置かれた木製礎盤と形状の上でかなりの類似性を認めることができる。



タジキスタン礎石（2009年）



ニヤ遺跡方形仏堂礎盤（1995年）

タジキスタンの礎石は円筒部分と方形の基盤部分を一つの石から作っている。ニヤ遺跡の礎盤は木製で、同様に円筒部分と長方形の基盤部分から成っていて、円筒部外径 30cm 前後で長方形礎盤部分は 50cm×30cm である。素材が異なっているが、それはニヤ遺跡がオアシス地帯にあった木材に恵まれていたことによるものであろう。

また、遺構の特徴として部屋の周辺部に壇を設けるのも共通している。ニヤ遺跡では、ベッド状遺構、タジキスタンではソファ状遺構と呼んでいたが、建築様式がトハラーの人々の西域移住にともない伝播して、環境に応じた形で残されたものと考えられる。

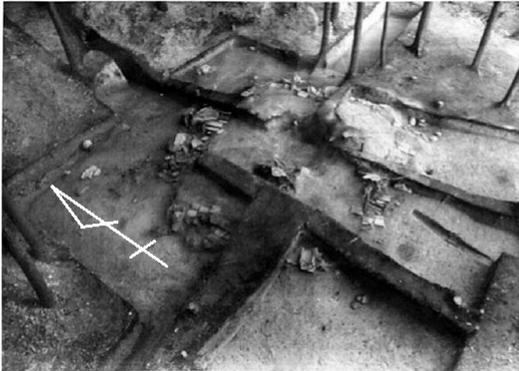


さて、以上に述べたタジキスタンの方形仏堂、西域南道の方形仏堂、これらの特徴を日本の飛鳥時代の寺院遺構にも見ることができる。それは、平城宮址から北東4キロメートルにある京都府木津川市木津天神山地内の神雄寺址の方形本堂（約5メートル四方）遺構である。2011年

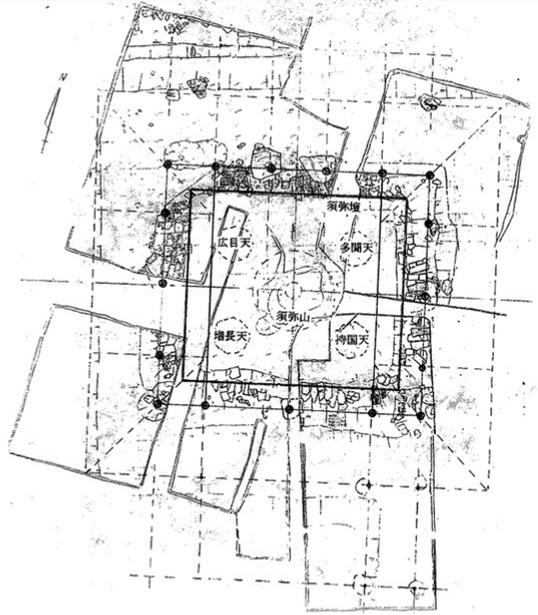
の馬場南遺跡(神雄寺跡)現地説明会資料によれば神雄寺は『続日本紀』には記載がなく、正史から排除された橘奈良麻呂との関わりが指摘される。奈良仏教の特徴である出家・学問仏教としてではなく、一氏族の除災招福を願う寺院であり、氏族宗教としての仏教受容がなされたことをうかがわせる。遺構からは四天王が安置されていたこと、さらに万灯供養が行われていたことを示す遺物が出土している。



木津川市 神雄寺址 灯明皿



木津川市 神雄寺 方形仏堂址 (右図:平面図)



平成21年1月17日(土)付け  
大津市教育委員会  
馬場南遺跡(神雄寺跡)発掘調査 現地説明会資料より

上図から、神雄寺址の方形仏堂が、カラ・イ・カフィルニガン、ニヤ遺跡の方形仏堂と同じプランであることがわかる。また、カラ・イ・カフィルニガン遺跡からは灯明皿(チラク)や携帯拝火壇(マジマル)などの拝火教特有の遺物が出土していたが、奈良の神雄寺においても万灯供養が行われていたことが確かめられたことになる。

また、報告書によれば、曲水の宴の施設ともかかわることが明らかになっており、東大寺二月堂の火振りとお水取りとともに、タジキスタンゾロアスター教方形拝殿が拝火と禊の特徴を持っていたこととのつながりを示唆するものと言えるであろう。

さらに、四天王がタジキスタン、西域南道、さらに日本に至るまで、一貫して堂の四隅に安置されていたことにも注目すべきであろう。先の報告書で詳細に述べたように、四天王がミフル神の機能を四つの特性から分化させてものという説があらためて意義を持つてくるものとする。

### 3. バクトリア語(ギリシア文字)銘文の発見の意義

2009年度の調査ではクシャーン期よりもさらに下層まで発掘が行われた。バクトリアのコインが出土し、タジキスタン中部の歴史をよく示している。また、陶器片に書かれた文字はギリシア文字の草書体で、言語学辞書などによればバクトリア語を表記したものと考えられる。

バクトリア語の表記に用いられるのは碑文体と草書体で、碑文体はクシャーン朝期の碑文や貨幣に刻まれた文字である。草書体は碑文体をくずした文字でササーン朝(3世紀から7世紀)以後の資料に用いられる。文字表はダヴァリ(G.D.Davary)作成のものを吉田豊氏が改変したものを転用している。

ギリシア文字のアルファベット24文字に、バクトリア語固有の音を表記するための文字(文字表の最後の文字=san)が加えられ、全体で25文字であったと考えられている。このことは、7世紀前半にトカラ国を通った玄奘『大唐西域記』の記述と一致する。

「言語進退はやや諸国に異なっている。字のなりたちは25言であり、(それらが組み合わさって)次第に(語彙、文章が)でき、これを用いて必要に備えている。書は横読みをし、左から右に向かう」(水谷真成訳)平凡社、1971年

ギリシア文字で書かれた資料には、碑文、印章、コインの銘、文書の断片などがある。タジキスタン地域にとってかかわりが深いと考えられるものに、アフガニスタン北東部、バグラーン地方のスルタ・コタルの丘にあるクシャーン朝の神殿跡から発見された碑文や、アム・ダリアの北のテルメズ付近のカラ・テパ仏教遺跡で出土した碑文などがある。

翻字	碑文体	草書体				翻字	碑文体	草書体			
		独立形	結合形					独立形	結合形		
			左接	右接	両接				左接	右接	両接
α(a)	A	o	o, p	o, p	o, p	o(o)	o, □	o, o	o, p	—	—
β(b)	B	β	β	β	β	π(p)	π	π	π	π	π
γ(g)	Γ	γ	γ	γ	γ	ρ(r)	ρ	ρ	ρ	—	—
δ(d)	Δ	o	o	o	o	σ(s)	σ, □	σ	σ	σ	σ
ε(e)	Ε	ε	—	—	—	τ(t)	τ	τ	τ	τ	τ
ζ(z)	Ζ	ζ	ζ	—	—	υ(u, h)	υ	υ	υ	υ	υ
η(ē)	Η	η	η	η	η	φ(f)	φ	φ	φ	φ	φ
θ(θ)	Θ	—	—	—	—	χ(x)	χ	χ	χ	χ	χ
ι(i)	Ι	ι, υ	ι, υ	—	—	φ	—	—	—	—	—
κ(k)	Κ	κ	κ	κ	κ	ω(ō)	ω	ω	ω	ω	ω
λ(l)	Λ, λ	λ; )	λ; )	λ; )	λ; )	β(β)	β	β	β	β	β
μ(m)	Μ, μ	μ	μ	μ	μ						
ν(n)	Ν	ν	ν	ν	ν						
ξ	—	—	—	—	—						

注:1) 翻字は、通常、ギリシア文字によってなされるが、ローマ字による場合もある。  
2) 草書体の文字の読みについては、一致した見解が得られないことがある。

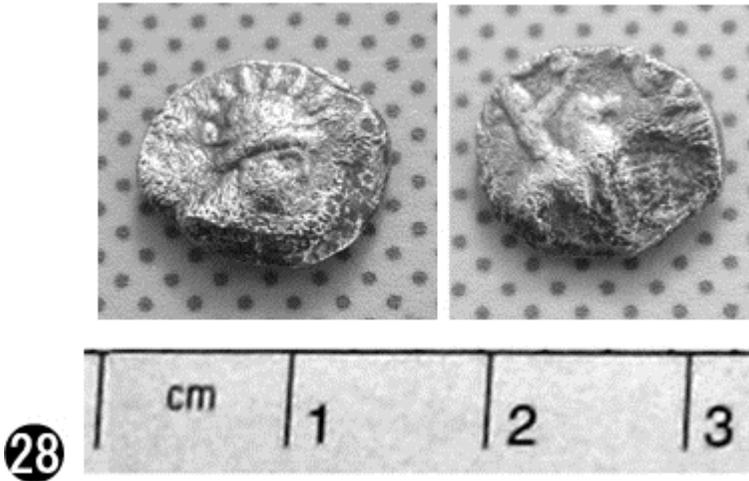
スルタ・コタルの碑文を最初に発表したA. マリクはトハリスタンの地名を取り、また東トルキスタンで発見され、誤った命名が定着していたトカラ語と区別するために、「真のトカラ語」という意味の名称を使用した。しかし、W. B. ヘニングは歴史的名称であるバクトリアを使い、バクトリア語の名前が定着するにいったという。

手元に使用できる書籍・辞書がないので、限られた情報の中で翻字を試みたが、あくまでも試みの段階であることを断わっておきたい。

ο η ε ς ο τ ο β ο  
α τ υ γ α λ α β ο

先に写真資料の中でも翻字を試みてみたが、文字の前部分は壺が断片的に出土したために不明である。ただ、語尾部分が、α β ο「水」(<\*アープ)あるいはα β ο「~に」(<\*アビ)である可能性だけは指摘することができるかもしれない。

バクトリアとの関連を示す遺物はこの銘文の他に、バクトリア・コインも出土している。



2010年度の出土のコイン(出土番号28、直径1.2cm、厚さ0.2cm、p.61 遺物:図25 参照)には表にヘルメットあるいは冠を戴いた人物の横顔が刻まれ、裏面には馬に乗った人物が片手を差し伸べて何かを掲げる姿が描かれている。このデザインは典型的なバクトリア・コインの構図である。一部が磨滅しているために確認することはできないが、裏面にはゾロアスター教を示す印章が刻まれるのが一般的である。

#### 4. 炭素14検査と遺跡年代について

2007年度調査で下表に示すサンプルを日本に持ち帰っていた。

試料	日付	採集場所	内容	検査種類
1	9/13	KKF-X 東西壁・南側埋土(X庭3)	日干し煉瓦	
2	9/13	KKF-X 東西壁・南側燃焼部(X庭3)	日干し煉瓦	
3	9/13	KKF-X 東西壁・南側床面(X庭3)	黒炭(不明)	C14 検査
4	9/13	KKF-X 東西壁・南側床面(X庭3)	黒炭(麦)	C14 検査
5	9/13	KKF-X 東西壁・北西側床面(X部屋4)	灰	
6	9/15	KKF-X 東西壁・南側作業台(X庭3)	灰(オリーブ)	
7	9/15	KKF-X 東西壁・南側炉跡(X庭3)	灰(オレンジ)	
8	9/16	KKF-XI 北東隅・lev.330.5(XI)	釉薬?	
9	9/16	KKF-X 東西壁・南側炉跡(X庭3)	鉄さい?	
10	9/16	KKF-X 北東隅・床面(X部屋1)	木炭(炭化柱)	C14 検査
11	2008	KKF-X 南中央・炉付近	灰(白色)	

#### 2007年度試料採集場所 (KKF-XとKKF-XI)



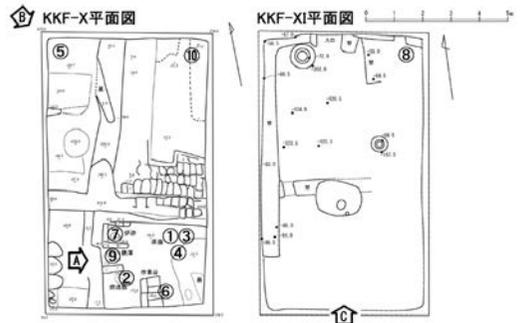
KKF-X(西より撮影・左端が東西壁)㊦



KKF-X(北西より撮影・右奥が東西壁)㊦



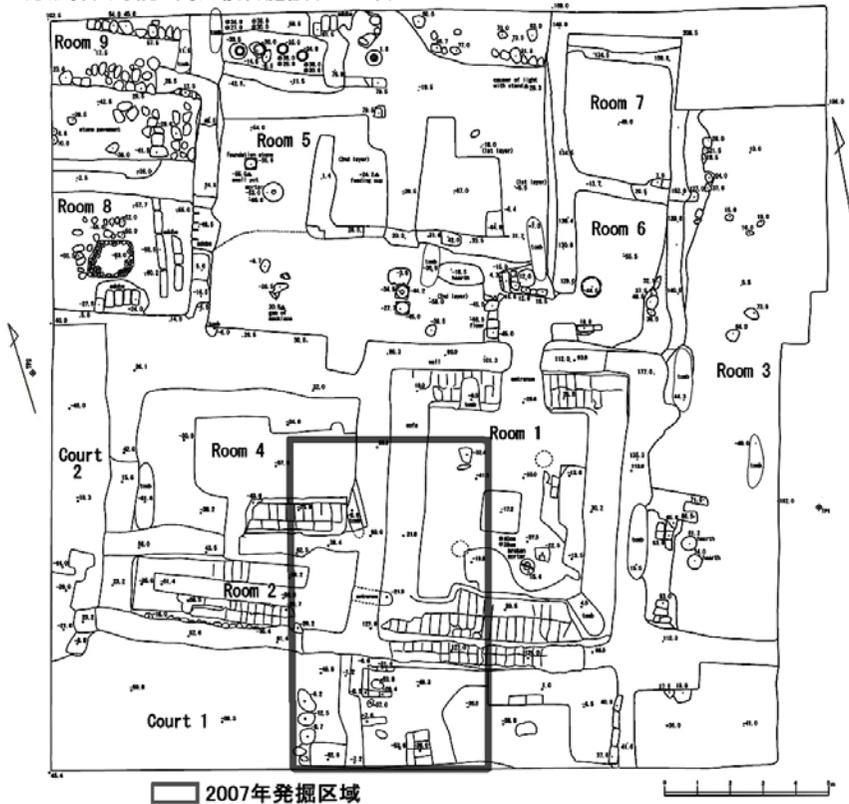
KKF-XI(南より撮影)㊦



2009年度の発掘調査で明らかになった方形拝火寺院とその周辺複合施設との位置関係を

次の平面図に示す。KKF-X の試料がほとんどで、KKF-XI からのものは1点と限られているので、KKF-XI の平面図上での位置関係は省略した。

方形拝火寺院と周辺複合施設(2009年)



試料10は北東隅床面から出土しており、平面図では第一室基壇周辺に置かれた木製基盤あるいは柱の炭化物だと考えられる。次ページに挙げた検査結果の表2によれば、紀元後579年から紀元後631年までが68.2%の値であり、紀元後559年から紀元後645年までが95.4%の値である。

次に、試料4は炭化した麦である。紀元後668年から紀元後695年までが37.7%の値であり、紀元後661年から紀元後725年までが63.9%の値である。ほぼ同じ場所で採集された試料3は泥に含まれた粉末の炭であり、紀元前10439年から紀元前10278年までが52.8%の値であり、紀元前10451年から紀元前10153年までが82.2%の値である。

カラ・イ・カフィルニガン遺跡の年代がトハラ期前後の7世紀から8世紀とされているので、試料10と試料4の年代は妥当な数値のように思われる。試料3は極端な値であり、正しい年代を示しているものとは考えられない。

次頁に検査結果の報告書を挙げておきたい。

## 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ  
伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薫・小林紘一  
Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani

### 1. はじめに

加速器質量分析法(AMS 法)による放射性炭素年代測定を行った。

### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC 製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$  年代、暦年代を算出した。

### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代、 $^{14}\text{C}$  年代を暦年代に較正した年代範囲を、図1と2に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$  年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$  年代(yrBP)の算出には、 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその  $^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

#### 暦年較正

暦年較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された  $^{14}\text{C}$  年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、及び半減期の違い( $^{14}\text{C}$  の半減期  $5730 \pm 40$  年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$  年代の暦年較正には OxCal4.0(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、 $1\sigma$  暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$  暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

#### 4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

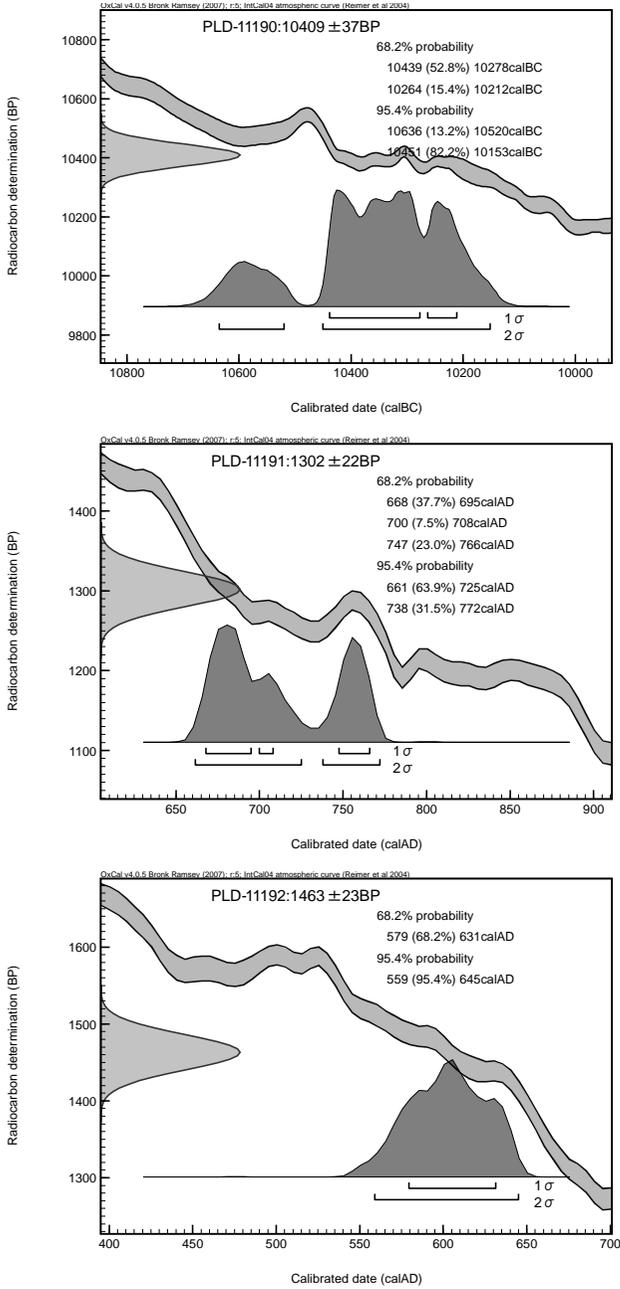


図1 暦年較正結果

表 1 測定試料及び処理

測定番号	採取地データ	試料データ	前処理
PLD-11190	採取地: タジキスタン 試料 No.: TJ03	試料の種類: 土壌 状態: dry	湿式篩分 106 $\mu$ m 酸洗浄(塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-11191	採取地: タジキスタン 試料 No.: TJ04	試料の種類: 炭化種実 (ムギ類 3 粒) 状態: dry その他: 土より炭化種実選別	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-11192	採取地: タジキスタン 試料 No.: TJ10	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス

表 2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正 用年代 (yrBP $\pm$ 1 $\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm$ 1 $\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-11190 試料 No.: TJ03	-8.80 $\pm$ 0.15	10409 $\pm$ 37	10410 $\pm$ 35	<u>10439BC(52.8%)10278BC</u> 10264BC(15.4%)10212BC	<u>10636BC(13.2%)10520BC</u> <u>10451BC(82.2%)10153BC</u>
PLD-11191 試料 No.: TJ04	-26.08 $\pm$ 0.19	1302 $\pm$ 22	1300 $\pm$ 20	<u>668AD(37.7%)695AD</u> 700AD( 7.5%)708AD 747AD(23.0%)766AD	<u>661AD(63.9%)725AD</u> 738AD(31.5%)772AD
PLD-11192 試料 No.: TJ10	-28.13 $\pm$ 0.18	1463 $\pm$ 23	1465 $\pm$ 25	<u>579AD(68.2%)631AD</u>	<u>559AD(95.4%)645AD</u>

参考文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の  $^{14}\text{C}$  年代. 3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson,

T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029–1058.

『古代ソグドの宗教』第一章、「拝火神殿と寺院—高地ソグドの拝火壇」ナヴルーズシャハ2遺跡 p.17にある報告が参考になるかもしれない。

次に引用する。

施設12の北西隅には小さな囲いがあった。この施設の床ではそれぞれが30cm 以上ある多重の灰含有層が検出された。灰はおそらく排出されることなく床の上にばら撒かれ、その上を覆ったものと見られる。施設の壁は火や煙によってひどく焼かれ煤が付いている。なぜ灰が排出されることなく床にばら撒かれたのかということが唯一理解できないが、施設12は厨房であったと思われる。したがって、施設12にはいくらか信仰上の用途もあったとも考えられる。施設の壁は5cm から1.5m の高さで残されていた。それらは幾重にも漆喰できれいに塗り上げられていた。戸口は95cm の幅で北東隅にあった。

この記述中、「なぜ灰が排出されることなく床にばら撒かれたのかということが唯一理解できない」とあるが、一種の宗教儀礼(浄め)として、灰を床面にふりまいた可能性を考えることができるように思う。試料5が採取された KKF-X 部屋4からは炉跡は検出されていない。細かい灰が土に混入した可能性として、火災にあったことも想定できるかもしれない。しかし、その場合であれば灰は層状態で検出されるべきようにも思われる。土に混入しているのは灰を撒き散らした後、土で消火したのかもしれない。東大寺二月堂のお水取りで行われる火振り儀礼とのつながりを指摘することもできるであろう。

試料写真は口絵参照